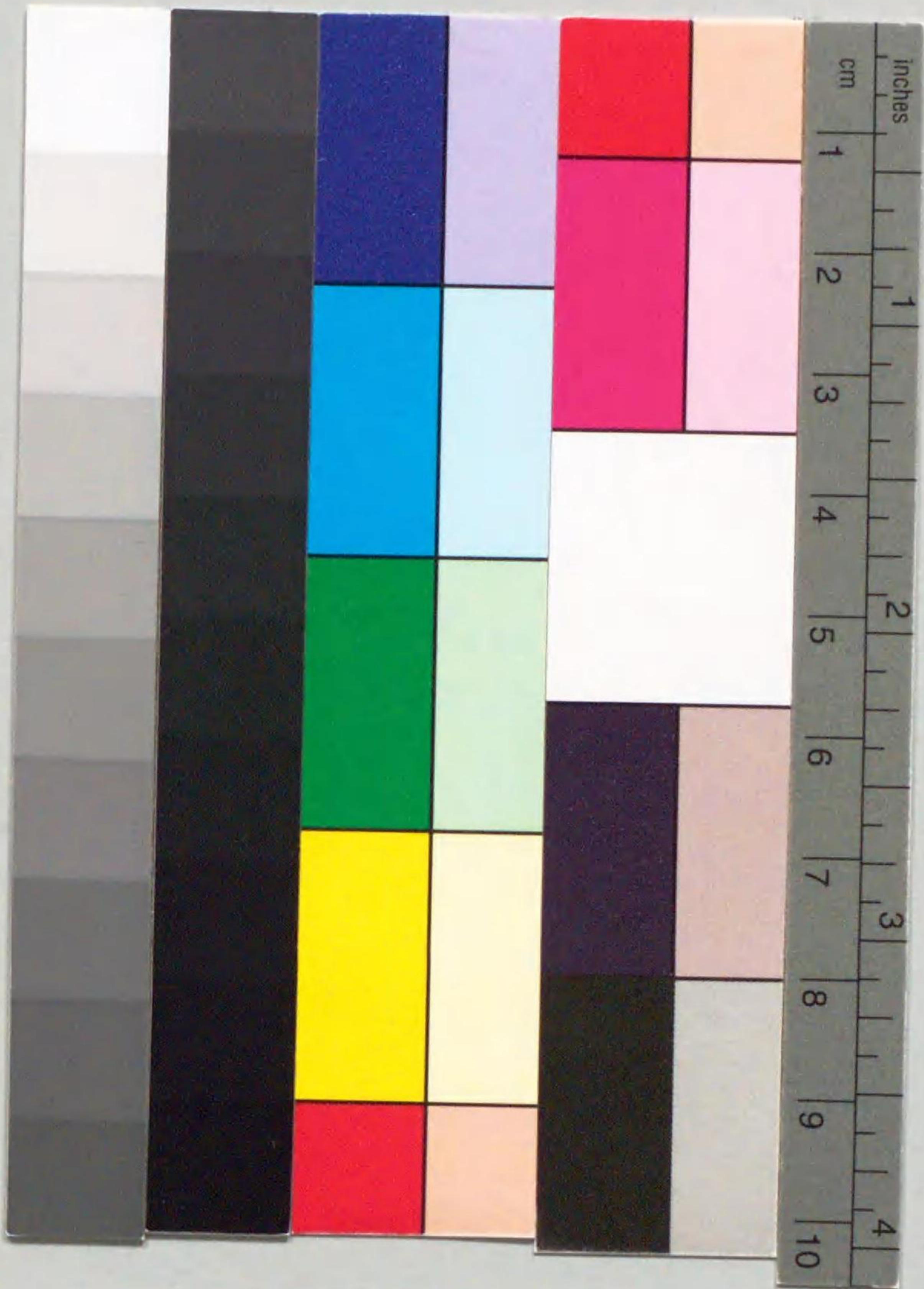


081
Y978
T



00974985





淨瑠璃名作集

中



淨瑠璃名作集



081
Y978
TII
(117)



数量更正
~~59.5~~

974985

緒言

本卷に收めたるもの左の七種、何れも流布の丸本によりて嚴密に校訂せり。

鎌倉三代記 享保三年正月二日 豊竹座

繪本太功記 寛政十一年七月十二日 豊竹座

作者 紀海音
作者 近松やなぎ、近松湖水軒、近松千葉軒

近江源氏先陣館 明和六年十二月九日 竹本座

作者 近松半二、八民平七、松田才二、三好松洛、竹田新松、近松東南、竹本三郎兵衛

道成寺現在蛇鱗 寛保三年十月二日 豊竹座

作者 淺田一鳥、並木宗輔

傾城阿波の鳴門 明和五年六月朔日 竹本座

名代 近松門左衛門 作者 近松半二、八民平七、寺田兵藏、竹田文吉、竹本三郎兵衛

緒言

碁太平記白石噺 天明七年八月十二日

作者 烏亭焉馬、紀上太郎、容揚齋、焉烏旭、三津環

夏祭 浪花鑑 延享二年七月十六日

並木千柳 三好松洛、竹田小出雲

此時はじめて人形に帷衣の衣裳をきせはじめ。

大正三年十二月

豊竹座

竹本座

校訂者 松山米太郎

浄瑠璃名作集中目録

鎌倉三代記

第一	忠臣標し揃へ	一
第二		二
第三	鳥追大黒舞	三
第四	若狭の局道行	四
第五	まよひのすがた	五
發端		六
六月朔日の段		七

繪本太功記

四九—一四〇

近江源氏先陣館

同二日の段	六
同三日の段	六
同四日の段	七
同五日の段	七
同六日の段	七
同七日の段	八
同八日の段	九
同九日の段	九
同十日の段	一〇
同十一日の段	一〇
同十二日の段	一一
同十三日の段	一一
第一	一三
第二	一四

第三	一五
第四	道行旅路の濡衣	一七二
第五	一七三
第六	一八〇
第七	一九五
第八	二〇三
第九	二二〇

道成寺現在蛇鱗

二三九—三三三

第一	二三九
第二	二五六
第三	道行塗分轄	二七五
第四	清姫日高川之段	二八五
第五	三〇七
.....	三三五

今様亂拍子

三三六

傾城阿波の鳴門

三三—四四

第一	三三
第二	三四三
第三	三五八
第四	三六四
第五	三七八
第六	三八五
第七	道行思ひの富士	三九九
第八	四〇六
第九	四二〇
第十	四三五
第一	四三五

姉は宮ぎの碁太平記白石噺

四三五—五七六

第二	四四〇
第三	四四六
第四	四六五
第五	四七三
第六	四八九
第七	五〇〇
第八	五二七
第九	道行いはぬいろぎぬ	五五一
第十	五五三
第十一	五七四

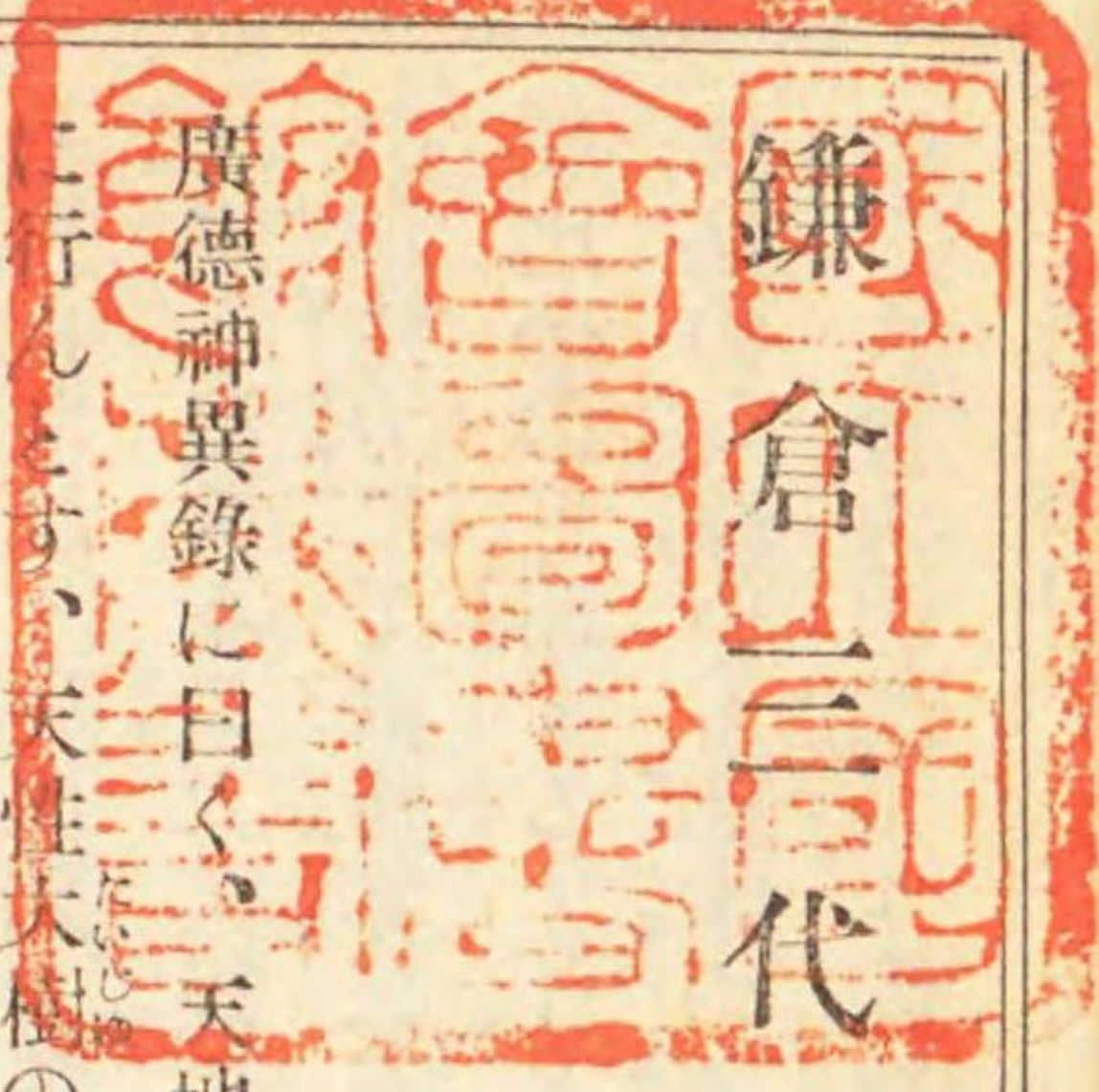
夏祭浪花鑑

五七七—六七四

第一	色の水上汲分た 御鯛茶屋の鹽竈	五七七
第二	殿の謎意を巻込だ おやま繪の拜領物	五八七

第三	出入の數をつまぐつた 珠數三昧の男作	六〇〇
第四	手代が戀を掘出した 浮牡丹の箱入娘	六二二
第五	道行妹背の走書	六二七
第六	男の意地を立ぬいた 焼鐵の女房作	六三三
第七	舅が欲を止兼た 紅粉絞の色入帷子	六四三
第八	友達に心を碎た 石割雪踏の合印	六四七
第九	親と子の縁を繫だ 貫さしの捕縄	六六二

鎌倉三代記



廣徳神異録に曰く、天地は凶惡を長育せず、蛇鼠は龍虎と成る事能ず、天網恢々たり去て何處
二行んす、天性木樹の御氣性、花實備はる鎌倉山、動きなき世に扇が谷、千代萬代の龜が谷、
 春知りがほの梅が谷、時めく源氏ぞ芳ばしき。時維建仁三年源の頼家卿、故右大將家の譲りを
 請け征夷將軍に拜任有る、虎は威有つて猛からぬ廿二歳の若緑、丁固が松と見ゆれども、李白
 が酒杜牧が色、二つのしなに身を浸し、政道怠り給ふ故、秩父北條土肥小山、舊老竹馬の忠臣
 等、度々に諫の術盡きて、勤番出仕も遠ざかれれば、辯佞邪曲の若者共、晝夜お側に蹲踞する、
 中にも比企の判官が、いつき娘の若狭の前、君御寵愛淺からず、一幡君として當年は、四歳の若
 君ましませば、舅心に邪を裁けど比企能員とて、貪慾驕邪のあら入道同名三郎員家、笠原太
 郎兼澄中野の五郎廣教、胸に惡事を徒黨の武士、まくらをわつて謀計の、色には出ず判官は謹
 んで申様、判官扱も此頃出羽の國羽黒山の山伏、願行院豪海とて當國に徘徊し、假令ば手足叶

081.6
Y

113
Y

はざる年來の病人を一祈に働かせ、啞に忽物言はせ盲人に眼を開かせ、難病癡病加持力にて本復させずと云ふ事なし、世舉つて此驗者を活不動と尊稱す。去に依て某も密に私宅に招き寄せ、殿若君の御身の上、祈禱を頼みしに、丹精を擡でて御壽算二百餘歳迄は、慥に加持し延せしと、卷數を持参し今朝より、大廣間へ相詰させ置く。御目見得を遂げさせ度願ひ入候」と詞を盡し言上す。頼家卿、御機嫌麗しく、頼家「其驗者儀は某も、先達て聞てあり急いで招喚致すべし」それ此方へと御説にて、奏者に連れだち願行院、悠々と立出て御目通に畏る。頼家御覽じ、「ム願行院豪海とは貴僧の事よな。世は濁亂に及べども三密ゆがの功積り、病苦を救ひ且は又、鎮護國家の止觀の旨、甚以て神妙なり。今日よりしては頼家が祈の師ぞ」と宣ひて渴仰あるこそ笑止なれ。豪海詔ふ氣色もなく、左右を見廻し打咳き、豪海「其昔役の優婆塞孔雀明王の咒を主持し鬼神を役し人民の壽命を延し、法流を汲知る者は今の世に恐らく拙僧只一人、此度修法の加持力にて御壽算二百餘歳迄、慥に請合申せし」と廣言放つて言ひ散す。問注所に控へたる朝比奈の三郎するくと走り寄り、豪海が膝元にどつかと坐り、三郎「コレ御坊、某元來武骨者、佛法の有難いも仙術の不思議なも、曾て以て存せねども、大かた人の壽命には分量の有るべい物、大食大酒滯事を随分謹み嗜んでも、百年は活にくい、よし又和僧の咒咀で、我君二百餘歳

迄御長生なさるととも、誰あつて其時迄御奉公を仕り、虚か誠の證據には何者が出て立べいぞ、どうやら護摩の灰臭い。判官殿も旁も、獨鈷仲間の一味らしい」と、頭叩いて嘲笑ふ。かねかね牒合せたる中野の五郎つとと出で、五郎「いしくも言れし朝比奈殿、八幡拙者と同腹中、正法に不思議はない、外法成就の人ならば其段は知ぬ事、命を延るも縮めるも畢竟以ては同じ事、某を一加持に祈殺して見せられよ、經文の端くれも些と覺えて居る男、驗證なくては信用せず、如何に」と詰掛る。豪海些とも悪びれず、豪海「ヲ、面白しく、邪正一如の宗意なれば善惡には拘はらじ、望みに任せ其方の命を落して只今、嘲笑を塞がん」と印事々しく結びかけ、神咒を唱へ眼を閉ぢ暫く觀念する内に、不思議や五郎忽ちに面色變り慄ひ出し、五郎「あら耐がたや苦しやな、大聖不動明王の索に五體を締付られ、手足も竦み動ず」と眼を見つめ戰慄しは、不思議と云も餘あり。各是はと仰天し天晴御坊の御法力、方便の御殺生最う此上は御赦免あれ、縛をも解せ給れと、聲々にこそ詫にける。豪海は打領き、豪海「夫こそ出家の本懐たり、苦痛を救ひ申さん」と、重ねて印を結びかけ、數珠さらくと押揉ば、五郎即座に起直り、先非を悔む涙の體、皆々ハット感じ合、頭を垂れて居たりける。朝比奈かつらくと笑ひ、三郎「此義秀がむき出した黒い眼を抜うとは、むごたらしい旁、賣僧坊主が行力にてちくとん計朝比奈が、腕先

にても縛つて見よ、然ないと、汝大驅一寸も立せじ」と、太刀捻くつて押直る。勢に氣を吞れ、豪海左右返答なく、五人の者もうぢくくと片隅欲しき氣色なり。斯とは誰か知せけん和田の義盛駈來り、御前に畏り、義盛君を始め諸歴々御尊敬ある客僧へ、悴に候朝比奈め、持病の我儘差起り、慮外の振舞致す由、千萬恐れ入候。義盛日頃の忠勤に思召かへられて、御赦免あらせ給はれ」と頭を付けて言上ある。判官大きに悦んで、判官ヲ、御尤々々、子を持ってこそ世の中の、親の心は量るれ。法印へは某が幾重にも詫申さん。御子息の我儘も時に取ては武士一疋、浦山しいく。底意を残さぬ證據には、若狭の前が妹に、淺茅と申す乙娘貴殿の嫁に進ぜたい。朝比奈殿を判官が聲に取る儀は成まいか。どうぢやく」と抱いるよ、是も謀の一ツぞと義盛合點行きながら、然あらぬ體に會釋して、義盛出頭無二の能員殿殊更以て我君の、御縁家に繋る事、身に取ての大慶」と、世に嬉しげに領承ある。朝比奈すと立上り、三郎「ヤア付上るな入道め、今日此頃、漸と取立武士の分際で、聲なんどとは存在な、口引裂かん」と飛懸るを、義盛中に押隔たり、義盛「是非辨へぬ若者哉、汝を聲に取んとは、心に一物有ての事、契約申す義盛も心に一物有ての事。平にく」と囁けば朝比奈早く合點して、「成程聲に成りませう」三郎「是判官殿隨分と、仕拵にお氣張られい、嫁入長持塗篋篋箱貝桶狗張子、部屋の世帯も其方から、味噌鹽薪

米油、其外天壤無上ちや」と、笑ひて屋敷に歸りけり。頼伽は卯の内よりも、其聲諸鳥に優るとかや。生先しるき初元結、千幡君と聞えしは、頼家卿の御舍弟にて、今年十二の干支の馬、手綱搔繰り静々と、春の野懸の乗姿、優しやかに美しく、ほつとりしてしをらしく、實にも武將の嫩とは、名乗てしるき御器量や。山の内の松蔭に暫し御馬を控へられ、谷七郷の繁榮を悠々と眺望ある。茶道坊主の勘齋を近く参れと召寄せて、千幡「汝は當地の者なれば、此所を以前より鎌倉と名付たる、謂れを定めし知るらん」勘齋「イエ、所には住み候へども名所とも、舊跡とも白河夜舟、又してもうまい所を引起され、鬢作つたり燻べたり困つたる若旦那、語つて聞せ給ひ給へ」千幡「されば入鹿の大臣とて、猛惡無道の逆臣あり、又大織冠鎌足とて智仁勇を備へたる、忠臣是を悲みて、天神地祇に祈誓をなす、忠貞神にや通じけん、天より一つの鎌ふりしを、これ吉左右と押戴き、欺り寄て入鹿が首、水も堪らず搔落し、それより天下太平の守りの爲と其鎌を、此相州に納し故、鎌倉山と名付たり。なんと目出度い所ではないか」勘齋「ハ、くくく殿様にはいつの間にも左様の事を御存じ有、然らば拙者も覺えたる谷々の名は多けれど、寐もせて君を松葉が谷、耳と口とにさどめが谷、託は盡ぬいづみが谷、憎いかい、ヤ可愛がやつ、のほせばいこふ舐るが谷、すしなやつとて誹るがやつ、折角茶の湯教へ

ても、銀かねくれるやつ呉くれぬやつ、吝しんいがやつか酷じこいがやつ、あらまし斯かやう様に候ういと、呆たはこ言ご盡じんせば若君わかしよは、氣きさくな奴やつとのお口合くちあひ、馬上うしやう靜しづかに歩あゆませ行く。東見あづまみかどの向むかふより、比企ひきの二郎にらう員家いんけ、御所ごしよよりの歸かへるさに此所こゝへ來き掛かりしが、出頭しゅつとう自慢じまんの鼻はなの先さき千幡君せんぱんきみのお先さきとも、知しず顔がほなる咳せき拂はらひ邊あたりを拂はらひ打うて來くる。御近習ごきんじゆの若侍わかしやくつかくと立寄たちよつて、侍さむらいヤア比企殿ひきだんにて候うか、若君わかしよのお供とも先下馬さげまなされい」と立塞たちふさがる。二郎にらう驚おどろく氣色けしきなく、二郎にらう「當時たうじ某下馬かぎげません者もの、武將ぶしやうならで恐おそらくは、鎌倉中かまくらなかつに覺おぼなし。家來けらいの者もの共とも片寄かたよるな、通とほれ」と云放いひはなつ。お先さき徒士たらしの衆しゆ聲こゑ々に、大士おほしヤア緩ゆる怠たいなる詞ことばかな、大樹たいじゆの御舍弟ごせてい千幡君せんぱんきみ眼まなこが見みえぬか醉狂すゐきやうか、但ただしは引指ひきさし下くださうか、返答へんたう聞きん」と罵ののれば、員家いんけけらくと笑わらひ、「眼潰まなこつぶればお主ぬし等らよ、我君わがきみの小舅こじゆう辨わかまへ知しば其方そのかたより、きつと下馬げまをば致いたす筈はず。若輩わかしやく人ひとに見許みゆるす」と傍若無人ぼうじやくむじんに言散いひちらし、一鞭ひとびらあててはいしいと中突割つぎわつて駈通かけまる。コハ慮外りよぐわい者もの通とほさじと、一度いちどにはらりと抜ぬつれて、追おひ駈かけんとする所ところを、若君わかしよは聲こゑを上げ、千幡せんぱんヤレ早はやまるなく、彼等かれらが無禮ぶれいは頼家たのけの御心ごこころよりする事ことぞ、大老役おほらうやくを相勤あひつとせる、和田秩父わだちぢふさへ了簡りやうかんして、見通みとおしにする狼藉らうじやく者もの、若年わかしやくねんの身みが言募いひつものり、彼かれめに迷惑めいわく致いたさせては、頼家公たのけこうの御心ごこころに、嬉うれしとは思おぼすまじ、親兄しんきやうの禮重れいぢゆうければ堪忍かんにんするぞ旁かたわらよ、必かならず粗相そさう致いたすな」と道の道みちたる御一言ごいちごん、御幼稚ごちゆうぢながら頼朝たのちゆうの器量きりやうの胤たねを受け給たまふ、聰明そうめい叡智いぢの生れ付なまれ、色いろには出いず心こゝろには、千里せんりの馬うまも伯樂はくらくに逢あはば跛あしなへ

同然どうぜんと、世よを恨にくみたる御背おんせ、近習きんじゆの武士ぶしも口々くちくちに、扱さても憎にくい比企ひきがやつ、いざ追著おつてきりがやつ、ほつこしもないやつくを、越こて屋形やかたに入り給たまふ。善惡ぜんあくを身みに與あらず忠言しゆんげんの、御蹴止ごせきとどし山重忠やまぢゆうぢゆうの屋敷やしきには、賓客車馬ひんかくしやばの道絶みちたて雨あめを疑うたふ松まつの風かぜ、糸いとに亂みだるよ淺あみどり、五柳先生ごりゆうせんせい窓まどに倚より、七松居士しちしようこじが床ふかに伏ふす、氣色けしきを見せて文机ぶんぎに、文武ぶんぶの眼まなこまくばりて、悠然いんぜんとしておはします。本田ほんだの二郎親經にらうちかづね、宿直しゆくぢくに詰つめて居ゐたりしが、差奇さしきて小聲こゑになり、親經ちかづね「今日けふ御所ごしよの様子ようしよをば未いまだお耳みみに達たつせずや、巨細こさいは確しと知らねども、佞人ねいじん原はらと朝比奈殿あそひなだん、口論くちろんを仕出しされ鬪諍とうじやうに及びしを、親父義盛しんぢやうぎせう駈かけ付つけられ、事穩便ことんべんに納なまる上うへ、判官はんくわんが乙娘義秀おとぢやうぎしゆに妻めあすとの、契約けいやく迄いたりし由よしゆ、一門いっもん廣ひろき和田殿わだだんが、惡人徒黨あくじんたうたうに成なれては、やす大事だいじにて候うはん。何なにとぞ御思案ごしあん廻めぐらされ、此縁組このえんぐみを妨さまたけて、然しかるべうや」と伺うかへば、重忠ぢゆうぢゆう莞爾わんじやくと打笑うちわらひ、重忠ぢゆうぢゆう「ハテ吉左きちざう右みぎかなく、比企ひきの縁組えんぐみ致いたせしは義盛ぎせう天晴あつはれ發明者はつめいしや、敵てきの手段てんでを此方こゝの、手段てんでにするが軍書ぐんしよの祕事ひし、お頼たのもしき和田殿わだだん」と咄はなしの跡あともとりあへず、又差向さしむかふ物の本ほん、氣きもしんくと澄渡すみわたる、夜よも閑たけなに裏門うらもんを、忍しのびやかに音おとづる。親經ちかづね頼たのておつ取太刀とりたぢ、駈寄かけよつて差視さしければ、頼家卿たのけけいの御母君ごぼきみ千幡君せんぱんきみと只ただ一人ひとり、扉せきの外そとに立ち給たまひ、母君ぼきみ重忠ぢゆうぢゆうに對面たいめんし、密ひそかに尋たづぬる事ことの有あり、案内案内せよ」と宣のたまへば、ハットばかりに立歸たちかへり、斯かと告つげば重忠ぢゆうぢゆうも、驚おどろき遽あわて迎むかひに出いで、御兩所ごりやうじよを勞いたは上座じやうざに誘いざなひ奉ほうり、其身そのみは遙はるかに押退おしり、重忠ぢゆうぢゆう

忠お召あるべきを夜陰の御歩行、去とは氣遣しく候」と謹んでおはします。母君暫し御涙、御衣を絞らせ給ひつと、母君「さればとよ世の中に、自程な憂事の、數々多き者はなし。頼朝卿に別れし時、共に黄泉に赴くか、去すば如何なる山の奥、谷の蔭にも世を厭ひ、後世願はんと思ひしに、二人の若に身を繫れ、心にもなく世に立ちて、歎きを重ね日を重ね、漸として頼家に家を譲りて嬉しやと、思ふ甲斐なく此頃は、酒と色とに打亂れ、親の諫を聞ぬから、まして臣下の強異見、憎み疎めば、旁も、出仕を止め給ふに付き、小人共が世に誇り、人を人とも思はずして、今日此若が供先を、乗打せしとは何事ぞや。いかに文盲野人として、刀も腰に帯む身が、主従の禮を知ぬとは、よもや世間へ云れまい。頼朝生てましまさば斯様な不義は致すまじ、後家の子ぞとて侮るのか。武將の弟たる者を、匹夫の馬の蹴上をかけ、衣裳を汚せし無念さを、思ひ量りて給はれ。こさめぐ泣ておはします。重忠横手をちやうと打ち、重忠「古今稀なる狼藉者、狐は虎の威を借るとは、斯様の事を申すべき。糺明致すは易けれども、露顯に及ばず頼家公、政道暗き譏あり、何れを何れと別き難き、御連枝の中なれば、知す顔こそ御慈愛」と、宥め申せば母君は、母君成程其方の云ふ通り、此事のみは、自が、心ひとつに濟もせん、只恨めしきは、頼家が邪曲者に氣を奪はれ、其行末は身を亡し、國をも遂に失ふは、鏡にかけて見る如し、

切て此子を亡人の、形見と思ひ障妨なく、成人さして眺めたし。其方ならでは後見に、頼まんと武士はなきぞとよ。日頃の忠義改めず、勞り仕へ給はれ」とお手合すれば重忠、重忠「コハ勿體ない御有様、頼家公のお若氣は、老臣どもが入替り、千度も萬度も諫をいれ、夫にも承引なされずば、お家の爲には換られず、無體に押込參らせて、此若君を守育て、管仲晏子が義を守り、鎌倉三代將軍と、侍き申さば四海の内、靡かぬ草木は候まじ。人數ならぬ奴原は、鰻魚の水を慕ふとも、遂には自滅致すべし、お心安かれ母君様。今宵お成の壽に、指古し候へども、畠山が重代を若君に献上」と、太刀をお前に差置は、母君顔面打解けて、母君「チ、頼もしよ去乍ら、りれうが如き忠臣も、夷の方へ降參し、章邯が勇持たるも、秦を背きし例あり、一心なき神文に、血判あれ」と宣へば、重忠少しえせ笑ひ、重忠「神文誓紙と申す事、武内の大い臣の、湯起請より事起り、鐵火を握り或は又、牛王に血をばあへしなど、上古の風儀に候へども、末世は人間邪曲なゆゑ、神も非禮を受け給はず、誓紙の名有て誠なし。義經を偽る土佐坊が、七枚起請の先例など、お家に於て不吉なり。夫までもなく御心を、安め申さん、それ」と詞の下に親經奥の襖を引明れば、朱の鳥居のありくと、八幡宮の額をかけ、鎧を列べ玉垣の、光輝く有様は厳しくぞ見えにけれ。重忠頓て懷中より、一紙の願文取出し、高らかにこそ讀上たり。

忠心標し揃へ

再拜々々、愚臣重忠敬つて申して申さく。それ神道人道正直の一ツを以て建立す。就中正八幡宮は源氏累代應護の尊靈、神に誓ひて面々が約束堅き金鐵の、鎧一領旗指物、寶前に納め奉る。扱若君の御手を取り、一々次第に教へ給ふ。先づ東の第一は御代萬歳の春秋を、重ね櫻や八重櫻、小櫻緋花やかに、射向の袖の白妙に、曇らぬ光久方の、月に星の指物は千葉之介胤直、忠義の弓の一張に、矢竹心の幾度か、敵を欺くやり梅や、烏毛にまがふ鶯の、花に留りし印はそも、坂東の八平氏、時めく武士の名取川、名乗て通る時鳥、卯の花飾る腹巻に、夏の雪かと過たる。團扇の紋は兒玉黨、風にそよよ吹貫の、梢走りに散り浮ぶ、紅葉流の龍田川、緋緋は岩永黨、五番に見えしは春日野や、紫裾濃の割小札、兜の星の晃きて、眞向肩庇忍の緒、鐘の指物は、信濃の七黨ござんめり。萌黄匂ひの最上方、障子の板の揚巻に、四目結を附たるは、近江源氏の佐々木とは、誰も知らん白糸を、染ぬ心に色と香を、錦がはの胸目綴、鬼の腕を鋭くも、一きは目立つ指物こそ、浅利の與市と御覽ぜよ。扱八番に飾りしは、紺絲緋の胸丸に、總覆輪の筋兜、大簇小簇吹流し、お花流しの染こみは、武藏の國の住人仁田の四郎忠常、

次に列ぶはいつとても、向ふ敵を宇都の宮、好む所の藤繩目、龍虎の指物嚴しき、末座なれども隠れなき、黒草緋に金紋の、二ツ頭のまうたるは、駿河の國の住人天智天皇の末孫、竹の下の孫八左衛門。扱其外大和源氏美濃侍、近江の國には山本柏木木村姉川、播磨の國には富田高梨赤松黨、伊賀に服部伊勢平氏、三河に足助矢矧武者、出雲に道田河井山、伯耆に詫麻姊輪の一黨、總じて日本國中の侍所武者所、嫡流祖流陪臣迄、末世末代子孫々々、永く源氏の幕下に屬し、不忠の心を扱まば、神罰疑ひ有るべからず、今日よりしては重忠が、若君輔佐の臣となり、眼に魏徵が鏡を張り、肱に諫の鼓をかけ、胸に批判の木を抱き、美惡邪正を手の内に、四海太平國繁昌。漣やく、濱の眞砂は盡るとも、源氏の御代は盡せじと、三べん諡奏づれば、母君若君諸共に、悦び勇み立給ふ。漢の太公きじんけつ、慈あり敬あり忠ありとも、中々申すばかりはなかりけり。

第二

手車の品こそ變れ源は、清和の流れ堰留む、戀の湊に頼家公、色と酒との亂れ髪、捌け過ぎたる近習が、そより上たる太鼓口、拍子に乗て手車の、女房達はさはくと、殿御一人を宿の花、

枝を離れぬ風情にて、太股抓める痣ぬく、姿顔れてしどけなき。若狭の局奥よりも、悠々と立
 出て、若狭「ナウ申我君様、どう思召すお心ご、正體もなき御風情、母君様や北條殿、御耳へ入
 ば嚙やさぞ、御嘆かしう覺さん」と、實體つくる風俗の、爪はづれさへ優しけれ。頼家殆ど無
 興有り、頼家「總じて女と云ふ者は、子を産むと早や氣が沈る、此界の樂は、色と酒とに極つた。
 なんほう富士が名山でも、抱て寝たらば冷たかろ、更科の月ぢやとて、左のみ變つた事もなし。
 兎角浮世は柔かな、膝と談合」と引寄せて、足擦らせておはします。若狭の前は聲を上げ、「コ
 レ申父様、兄様も聞召せ。女の目にさへ餘りたる、取所なきお遊びに、踊り狂うて座ます、こ
 な様方の御心底、何とも私は呑込ぬ。一幡君は御幼少、近頃大事の御命ぢや、なぜ御意見を成
 れぬ」と、心一杯理を切て、恥しめるこそ道理なれ。判官眼に角を立て、判官「入ざる和女の諫言
 だて、格氣の様で見苦い。大將の御榮耀、珍らしい事でもなし、女護の島へ渡らうと、仰られ
 ても是非ないに、屋形の内のお慰み、重疊の儀と思つて居る。御意見は此方の役、和女の役は
 氣に入る役、やくたいもない事云はずとも、一幡君のおむづかる、奥へ」と睨られて、殘
 る詞を言へばえに、言ねば胸も乳も張て、悄悄として入給ふ。斯る所へ秩父の六郎重保、披露
 も遂ず入來れば、頼家卿も近習も、俄につくる武士行儀、咳拂ひこそ可笑けれ。重保「ア、大事

ないく、些とも御騒ぎ遊ばすな。重忠こそは年に恥ぢ、片意地ばかり申せども、此重保めは
 我君の、日々夜々の色遊び、御浦山しう存る故、扱こそ推參致せしが、武將共有うする、御器
 量には去とては、御慰みが小さい」と、氣を持すれば頼家卿、頼家「ム、なんとといふ重保、手の變
 つたる挨拶は、是も意見の色品よな。それとも遊び小さいと、難じて見たる心は如何に」重保「さ
 ん候、我君の遊樂遊ばす名は高く、見れば女中四五人など、相手に取てのお樂み、大磯狂ひ仕る、
 小大名より下の事。和田酒盛の昔など、手放した儀が面白い。某熱々存るに、女中の五百も三
 百も、お泉水へ追放し、龍宮城の樂みは、如何あらん」と言ひければ、頼家近習口々に、「八幡
 飲る物好かな、サア〜女中用意あれ。乙姫は美人の由、差詰に若狭の前、それ〜つかめ」と
 立騒ぐ。重保は小聲になり、重保「イヤ〜子持は寫るまい、その妹の淺茅こそ、比企殿の乙姫、
 乙姫の名も御容色も、似合しからん」と勸むるを、頼家暫しと御思案あり、頼家「成程淺茅が容
 色の儀は、聞及んだり去りながら、氣の毒は夜前はや、朝比奈と云ふ男を持つ。あの髭面の意
 地張者、斯様の事を聞たらば、鎌倉中を一夜さに、でんぐり返すと云うもの、残念さよ」と宣
 へば、重保「ア、お氣弱い事ばかり、往昔鳥羽の法皇は、源の仲致が妻女の美質を聞き召し、仙
 洞に召入れられ、御寵愛あそばされ、祇園女御と是を稱ふ。其後仲致法皇を、恨むる色の見えけ

れば、官職を削られて隠岐の國へ左遷ある。斯様の例も候へば、一寸一筆御墨付、某に賜はらば、朝比奈に對面し、淺茅を迎へ參らん」と、手に取る様に言ひ放す。判官重ねて、和田秩父同志討さする陷阱、仕濟したりと下笑し、判官「ヲ、頼もしい〜、娘自慢でなけれども、小憎體なる朝比奈には、些と過たと思つて居る」頼むと云ふに頼家も、硯引寄せさら〜と、一筆書て賜はれば、重保頓て懐中し、お氣遣遊ばすな、彼奴を云ひ伏せたつた今、御輿を入れて此御所を、目前の龍宮界、珊瑚の枕、瑪瑙の帶、琥珀の盃、眞珠の鍋、人魚の吸物鰐のぬた、鱈の〜ん焼、孔雀の摺身鳳凰の、玉子のふは〜ふはと乗る、人心こそ愚なれ。吉日を、三浦の家の御祝言、九十三騎の一門は、云ふに及ばず大小名、出入の町人御用人、御部屋見舞の菓子杉折、蒔繪の文箱紅の、紐解初る花嫁御、淺茅の前と聞えしは、二八に二ツ三ツ計、數へ足したる容色よし、聲の鶯百千鳥、聞て詠めて口吟む、歌の趣向ぞ懐しき。斯る所へ朝比奈は、不興顔して立歸り、三郎「エ、嫁入程世にくくな面倒な物はない、外へ出れば髭頬が細つたなどと、夢聊か知らぬ難題云かけられ、あた胸惡さに立歸れば、目詰めらが散ばうて、油臭くて頭痛がする。傍八けん寄るまい」と、拳を振れば女房達、逃て奥にぞ走り入る。淺茅の前は立寄りて、淺茅「去とは初心な、其様に當言は言ぬ物、嫁入た晩からお側へも、寄らぬといふはあんまり」と、無

念な事と抱附けば、三郎「ア、したたるい許してくれ、拜む〜」と迷廻るを、淺茅「イヤ〜人來ぬうちに、お前に些と無心がある」三郎「サア其無心が嫌ひ物、今日は大事の精進日、嫌ぢや嫌ぢや」と聲立る。淺茅「スリヤ頼む事聞かぬか」三郎「エ、あたくどい」と振放し、斷入んとする所を、淺茅は頓て懐中より、護脇差取出し、既に自害と見えければ、朝比奈頓て抱き止め、三郎「サア品に由て聞てくりよ、短氣なる女がある。如何にも無心聞である、ひら〜」と押しむ。淺茅悦び手を仕へ、淺茅「無心と申は別ならず、恥しながら自を、判官殿の娘とは、僞りにて候」と、云はせも果す朝比奈、三郎「ナニ能員か子でない」と云ふ仔細は一淺茅「ア、御不審は御尤、誠は都六條の傾城にて候が、畠山の重保様、京詰の折節に、假の枕の重なりて、仇に思はぬ中なりしを、御奉公とて是非もなう、つい此國へ御下り有り、程なう迎のお乗物、身請も首尾能く相濟で、いそ〜爰に下りしに、思ひの外な判官殿、奥の一間に呼入れて、向後身共が娘分、風俗も更めて、諸事高尙に嗜むべし。和田が秩父が兩家の内、聳に取るとの仰ゆる、重保様に逢ふ事も、存生有りし効もなく、此お屋形へ嫁入は、死ぬべき我が時節なり。お情あらば朝比奈様、我戀人に逢せて給へ、頼みまする」と泣居たり。朝比奈覺えず手を拍て、三郎「扱巧んだり〜。コリヤ氣遣すな、禍ひも三年おけば役に立つ、身共が女房嫌ひなが、和女が爲

には大仕合、願ひの通りさつぱりと、埒を明けて其上に、重保と媒介も、此朝比奈」と、言ひも果ぬに奏者番、御上使として畠山六郎殿の御出と、聲々に呼はれば、浅茅はハット立上り、浅茅「サア彼の人が見えました、早う逢せて〜」と、うろくするを押し止め、三郎「某所存有る間、先暫く」と奥へ遣り、式臺にこそ出にけれ。重保上座に押直り、威儀繕ひて云ふ様は、重保「貴殿の内室浅茅嬢、容儀優れし其聞え、上聞に達しつゝ、御殿へ召れ御酒宴の御相手にと有る御誑にて、某迎ひに参りたり。きつと御請け申されよ」と、詞鋭く相述る。朝比奈ふつと吹出し、三郎「色狂ひする程あつて、嘘劫の經た狸殿、尾を出せ〜手も出して、下されませいと降参せい。喰ぬぞ〜六郎」と、頭を叩いて打笑ふ。重保少し色を變へ、重保「某一生假初にも、虚言言うたる覺がない、疑はしくば御墨附、頂戴あれ」と差出す。義秀ハット立寄つて巻返し繰返し、寸々に引裂て、大太刀半分抜寛け、大聲揚げて、三郎「コリヤ六郎、此お使を承り、うつかと爰に來りしは、三浦一家を侮るのか、但は比企の判官に、眼を剝れたが怖かつたか、所存を聞ん」と突懸る。重保騒ぐ氣色なく、重保「非道の使者に某が、望んで來るは仔細あり、當時大名多けれど、和田と秩父の兩家こそ、文武の人を指れたる、其義盛が何故に、無道卑劣の判官が、聲に貴殿を致されしは、重保更に吞こまぬ。善惡探り知らん爲、態々推参致したり。忠心變る

事なくば妻女を君へ上られよ、但悪人一味の氣か、有無の返答眞直に、承はらん」と云ひければ、朝比奈顔を和けて、三郎「成程得心した。扱なう女房と云ふ者は、一夜でとんと持重り、捨し所を其所此所と、思案して居た眞只中、上意殆ど満足せり。浅茅々々」と呼び猛る、聲に従ひ走出で、浅茅「喃六郎様懐しや」と、縋り付てぞ泣きにけり。重保ハット赤面の、色も聲音も押静め、重保「比企殿のお娘御浅茅の前とは御身よな、如何様世間の沙汰程有り、天晴御器量御容體、我君の御望みも、道理々々」と立退くを、浅茅は猶も取縋り、浅茅「未練に候御卑怯な、恨が有らば打明けて、なぜ聞えぬと宣はぬ。判官殿に欺られ、憂い月日を送りしも、お前にどうぞ逢うかと、思ふ心の樂みに、今まで生てはありしぞや。誰が怖うてうじ〜と、見知らぬ顔を仕給ふ」と、千々に思ひを一口に、云うて歎くぞ道理なり。重保ほうど持扱ひ、返答もなくきよるきよると、溜息ついて居たりけり。義秀立寄り襟元をほと〜と打敲き、三郎「ぬつくりとした顔付で、怖事して置たな。根本根元聞いて居る、些少には候へ共、女房一疋進上する、三百目とは強請まい。先抱付け嚙付け」と、焦燥がるも可笑けれ。重保莞爾と打笑ひ、重保「遠來と仰られ美事の女房賜はりて、千萬大悦仕つる、私宅に於て打置ず、賞翫致し申さん」と、手を引合て立歸るを、朝比奈向うに立塞がり、三郎「先待て、一言問ふ事あり。シテ其方は眞實に、女房に

持つか自然又、君へ上うで連行のか」重保「ム、あたらしい詞かな、始に貴殿の内室を、迎ひに來たる某が、今では自分の妻女とて、何と違變が成る物ぞ、只今御所へ連行く」と、聞より中に押隔り、三郎「弓矢八幡そりや成らない、此朝比奈が媒介は、大鎧を數百本、打付たより堅い事、日本國が動しても、びくとも動く事はない、臆病至極の腸が、臍の下へ落著たら、何時にても迎ひに來い、夫迄は身が預る」と、腕押捲れば重保も、氣色を損じ聲荒らけ、三郎「ヤア無禮過た朝比奈、汝が媒介を頼みにて、六郎妻を持つべきか。假にも比企が娘とは、名を聞くさへも穢はしい、さつぱりと縁切たぞ」三郎「ヲ、去らば去れ、此上は朝比奈が女房にする」重保「イヤ御詫意ぢや連て行く」三郎「ナンヂヤ實正請取るか」重保「スリヤ何分にも渡さぬか」ヤルマイ渡せヤルマイと、互に詞詰合うて、鏝元寛け立寄れば、淺茅は左右に取付て、淺茅「詮ない事にお命を、果し給ふか情なや、自跡を暗して、屋形に見えぬと有るならば、お二人様は我君へ、申譯こそ立つべけれ。時節を待て判官と、親子の縁を切たなら、心變ず六郎様、女夫に成つて給はれ」と、涙ながらに立出れば、兩人ハット感じつと、重保「出來したり神妙なり、今出て行くは知らぬ分、夫婦の縁は切た分、此屋形をば脱落分、朝比奈殿の分も立つ」三郎「貴殿の分も立つである」三郎「如何にもく」三郎「去らば」重保「去らば」去ばくと三方へ、別れ行く身ぞ切なけれ。藝として爲

ざる事なき樂みは、富貴のかくの癖とかや。斯くて御所には重保が、遅参いかどと夕暮の、鞠場に騒ぐ女中鳥、こだまの響く大廣間、弓鎗計役目とて、立列びたる氣色なり。然るに和田の義盛は、黒縁の乗物を、玄關深く昇据させ、義盛「誰ぞ御取次頼ましよ、頼みませう」と言入る。中野五郎立出て、五郎「ヤア珍しの和田殿、何故御出仕あられしぞ」義盛「サレバ上意の旨を受け、朝比奈が最愛召連れて参つたり、宜く御披露頼みます」五郎「ヲ、御大儀く、追付て御對面あるべし」と、奥へ入らんとする所へ、畠山の重忠、是も蒔繪の乗物を、お次の間まで昇入れさせ、重忠「コレ中野殿、お取次頼みまする」と聲かくる。五郎「ハア是はく、重忠殿、貴殿も御出仕有りしよな」重忠「然ればとよ忤重保め、上意を受けて朝比奈の、妻女を伴ふ途中より、俄に邪氣に當られて、身心悩み候故、遅参を憚り、某誘引致し候段、御披露頼む」と云ひければ、中野合點はゆかねども、咎だてして拗者等に、したよかなめに逢うかと、「成程承知致した」と、御前を指て走り行く。義盛顔をさし寄せて、義盛「ナウ重忠、朝比奈が女房は此乗物の内に居る、御自分同道致されし、其乗物は何者ぞ」重忠「莞爾と打笑ひ、重忠「其方にも朝比奈の内室伴ひ給ふとは、慥に見届け罷在る、此方も又朝比奈の妻女をば連れ参つた。如何様武士の魂は割符を合す様な物、合ば仕合違うたら、その時互に改めう」義盛「ハ、ハ、ハ、ハ、秩父成程尤ぢや、追付

割符が知れう物、然らばお尋ね申すまい一ハテ扱後程々々と、互に尻目遣合ひ、物をも言はず控へたり。斯くと聞くより頼家卿、頓て廣間に御出あり、義盛此方へくと、仰に従ひ乗物を、手繰々々に昇出れば、大將浮れ出給ひつゝ、「籠の鳥とは恨しい、姿をちよつと水鳥を、飛せ飛せ」と御意を受け、義盛頓て乗物より、黒革織の鎧を出し御前に指置て、謹んで畏る。君を初め近習共こは抑如何にと呆れつゝ、きよろくとして居たりけり。義盛顔を振上げて、義盛「ハア心得ぬ旁かな、朝比奈が最愛を御所望と有る御墨附、重保上意を述べられし、惣じて武士の最愛は、弓鎗小太刀薙刀など、色品數多候へども、悴に候朝比奈は、度々の先駆矢軍に、裏をもかへさぬ鎧とて、親より子より兄弟より、別て最愛致す故、中々惜み申せども、上意を如何で背かんと、無體に持參致せしが、若し粗相ばし候か」と、然あらぬ體にあいしらふ。頼家赫と赤面あり、頼家「汝等今日來る事、素直の所存に有るまじと、先達て推量せり。重忠が慮外をも序に聞て遊ばん」と宣ふ内に乗物を、同じく手繰りに昇入れて、白銀の猫取出し、御膝元に差置て、其身は遙に押退り、重忠是は先年頼朝卿、西行法師に下されし、銀猫にて候を、修行の旅の妨げとて、門前の童に投やりて通りしを、縁を求めて某が、家の祕藏に仕る。承れば我君は、朝比奈が妻女をば、無體の戀慕あそばす由、彼の女儀も出生は、京堀川の遊女の由、實や世上の

諺に、猫には遊女が成るとやら、承つて候へば、何れを寵愛なさるよも、さして變らぬ儀と存じ、献上致し候」と、眞顔作つて言上ある。比企の員家つと出で、員家「扱々旁骨折て、巧み出された事ながら、外の目からは出來過る。言は武將の御身にて、是しきの御慰み、有まい儀とも申されず。其上朝比奈女房は、親判官が乙娘、若狭の局の妹を、遊女なんぞと言ひ落し、猫の或は鎧のとて、我君を嘲るは、兩人共に反逆と、睨んだ眼は違ふまい、返答聞かん」と罵れば、重忠カラくくと笑ひ、重忠「ナニ我々が逆心とは、古秦の趙高が鹿をば馬と争ひて、世を傾けし故事など、聞はつよての咎めよな。それは悪人此方は、忠義の鎧譏人の、鼠を取らする猫なるぞ。随分用心あられい」と、空嘯いて在します。頼家甚だ立腹あり、頼家「ヤア推參なり汝等、諫は臣の道なれど、若年者と侮つて、嘲弄するこそ奇怪なり。二度對面叶はぬぞ、其所立去れ」と宣へば、兩人聲を打揃へ、義盛重忠「ナウ御勘氣とは曲もなや、主君は二代我々父子、元曆治承の昔より、建仁正治の當代迄、身は泰山に倚懸り、命は鷲毛に等くて、奉公怠る事なければ、追放たるよ覺えなし。諫の詞は苦けれども、身を助くるの良薬にて、詔ふ辯は甘けれども、命を滅す毒草とは、夢聊かも御存じなく、忠臣は遠ざけられ、佞媚の族が勧めに寄り、翠庭の柳腰、きんこくゑんりの花の顔、酒宴妓樂にお目眩み、心を奪はれ給ふ事、お笑止や情なや。三仁去つ

て殷空しく、范増死して楚は亡びし。兩人蟄居致しなば、土屋北條土肥岡崎、新田佐々木千葉上
 總、其外名有る諸大名、頼みなき世を慣ほり、皆分國に引籠り、讒臣奸人時を得て、禍必ず蕭牆
 より、忽ち起つて萬代の、源氏のお家の恥辱となり、君萬歳のお命も、亡し給はん、淺間しや
 と、秩父はお袖に取付けば、和田は疊を打敲き、諫言實に道理なり。頼家左右の返答なく、扣
 る袖を振放ち、殿中深く入り給ふ。二人は溜息はつとつぎ、「實に良禽は木を擇ぶ、賢人は師を
 擇ぶ、愚將と知らず今日迄、仕へし事の後悔さよ。廣言憎しと聞き給ひ、重ねて討手給はらば、
 潔よく腹切て、臣下の手本にせんもの」と、悄悄立つて歸らる。近習の者共聲々に、「ヤア後れた
 る人々かな、君を恨みて腹切るに、所撰みは無い筈ぞ、所望々々」と取捲て、スハ事こそと見る
 所に、重保朝比奈龍象の、浪を蹴立る如くにて、一文字に駈來り、大太刀振て立懸れば、詞に
 も似ず我一と、逃て御殿に走り入る。義秀猶も怒りをなし、三郎しや物々し愚人めら、帝釋天
 の威を藉て、喜見城に籠るとも、朝比奈手くせの門破り、捻り殺して捨つべし」と、兩人御殿
 へ駈入るを、和田も秩父も取付て、重忠、義盛、ヤレ逸まるな若者共、三度諫めて容られねば、身を
 退くは君子の道、首陽の蕨に世を凌ぎ、滑溜に釣を樂まば、鎌倉計りに日は照るまい。御殿へ
 向うて慮外すな、ヤレ待て〜」と引止る、秩父は伯夷が仁を説き、和田は四皓が義を守る、

重保朝比奈兩人は、かうせいようが刺客の、猛きを寫す虎の髭、獅子の吠ゆるが如くにて、往
 つ戻りつ飛返り、踊り狂ひし有様は、須彌勃海を跨りし、りやうはくこうの勢も、是にはい
 かで勝らんと、見る人聞く人今の世に、語りて共に興じける。

第三

唐土に優りし物は何々ぞ、京羽二重と大名の、お道具持の造り髭、揃うて〜徒士の衆、手を
 振る腦振る烏毛振る、鶴が岡への御參詣、先驅後乗きらめきて、光を三つの大鳥居、だん葛の
 松蔭に、御乗物を昇据れば、乳人おはした立かより、高麗の飴仙家の蜜、龍眼肉ともてかしづ
 く、御果報日本一幡君、實生を出すは帚木や、若狭の局當年は、お厄年とぞ白重、薄紅梅の袖
 匂ふ、柳が枝に初櫻、咲せて見せる景色なり。後乗滑川四五右衛門、二重の腰も奉公の、七重
 に折りて若君の御前に膝まづき、滑川殿御怠屈成れたか、もう追付で御座るぞや。八幡様へも
 厄神へも、手々を合せてのよ様と、仰しやると早今の間に、お背かによんによと伸まする。取
 わけて今日は、放下もあり能もあり、くも舞あやをり八ちやうがね、鳥追萬歳大黒舞、見せま
 したならてつきりと、館へ往のとはおつしやるまい。久しい事ぢやかゝ様の、お腰がな痛みまし

よ、爺めが膝へ乗せませう、お出なされ」と愛すれば、「イヤ〜此處が面白い、いつもの様な
 切合しよ、爺も人形を持って出い、はやう〜」と大將の、わやくは心廣かりし。滑川「サア切合
 も仕ましようが、あれ〜あそこを見さつしやれ、西から南へ押渡で、漫々たる大海も、おつく
 るめて若殿の、お泉水も同じ事、鯛も有り海老も有り、鯉節の生たのが、ひち〜と鱈まする、連
 立て往て見せましよう」と、紛らかせ共、「イヤ〜〜、おれは切合々々」と、お膝元なる辨慶人形、
 鉞持て禿頭、こつりと鳴れば、「アイタシコ、八幡堪忍ならない」と、心得て持つ懐中人形巴
 女が大長刀、エイヤツトウ〜エイヤツトウ、如何はしけん若君の、人形碎け落ければ、母様
 大事の辨慶を、爺めが此様に仕をつた」と、むづかり給へば母君や、女房達は入かはり、賺せど
 きかぬ〜とて、泣入り〜仕給ふに、うろ〜涙に四五右衛門、「若君堪へて下さりませ、今年
 ちやうど四十年、御奉公仕れど、か様に不覺仕らぬ、正八幡も照覽あれ、企んでは致さぬ〜と、幼
 き人に誓言も、實體過ぎて笑しけれ。

鳥追大黒舞

「やんら目出たやんら樂しや、千町や萬町の鳥追が參つた、福の神を祝ひ込めしらけも米やろ、

ましらけも米やろ、よねやろがぢやうには福と徳と參つて、宿かろと申す。宿借候はど殿も榮え
 候、我身も榮え候、大黒舞を見さいな、福大黒見さいな大黒〜。大黒と申すは大黒の人ならず、
 天竺の人ならず、住吉の角の方に炭屋を仕て居られた。夫で色が黒いはやんら樂しや、やんら目
 出たや、大黒舞を見さいな、福大黒を見さいな誰人の誰やろ、左大臣に右大臣、關白殿のお手
 かけぢや大黒と申すは〜、角前髪の昔より夜這好なお人で、あちらの角でもちよこ〜、こち
 らの角でもちよこ〜、角々でちよこるととて、炭消に躓いて、夫でお色が黒いは「コレ大黒舞、
 疾とと彼方へ退てたも、鳥追歌の邪魔になる」ホ、〜なめたり〜、女の口から鳥追とは、い
 かなる君が鳥追ぞ。色の黒いがお好なら大黒舞も相伴せう」「ハ、〜有様がわしや傾城
 ぢやが、様子が有て此通り、今日鳥追の水上ぢや」「ハイいはれを聞ば面白や、身共とても浪人
 者、妹の傾城に何卒巡り逢ん爲、大黒の今ぶきぢや、あんまり退た中でもない、なんと一所に行ま
 いか」「成程々々そうしましよ。さあ大黒舞やらつしやれ」先こなたから謠はつしやれ」「やん
 ら目出たや、やんら樂しや」「四五右衛門聲をかけ、滑川「コリヤ〜鳥追大黒舞、よい所へ參つた
 故、和子の御機嫌直されて、皴腹一つ助かつた。とても事の事に今一節、お慰め申てくれ」鳥追「コ
 レハコレハ有難いお詞を聞まする、お望みと有からは、傾城の身の上を、鳥追にして謠ひましよ。

やんら目出たや、やんら樂しや、千兩の萬兩の身請客が參つた、比企の家に祝ひ米、姉御もよねや
 ろ、妹御もよねやろ、よねやろがぢやうには、慾と惡と巧んで嫁らそと申す、よめらし候へば比企
 も榮え候、我が身も榮え候、嫁らす處とは誰人の誰やろ、和田殿に秩父殿、大將軍のお手かけぢ
 や、御代の盛りとは若殿の御祝「歌や心に懸りけん、若狭の局顔さし出し、よくく見れば都
 にて、同じ流れを勤めたる、妹女郎の八千代なり。何故斯る身の上と、問ひ度も有り淺茅も又、
 語りたさに來れ共、人目を忍ぶ粹同士の、顔と顔とに知せあふ、夫さへ有るに大黒舞、面引取れ
 ば是はそも、兄の花垣伊織之介、あら懐しや戀しやと、飛付く程に思へ共、若君の爲比企殿の、
 身の仇とこそ成べきと、急來る胸を押鎮め、若狭「ヤイそこな大黒舞、おぬしは龜相な、當り障
 りに成る事を、必らず云ふな諺ふな」と、詞は下けて心には、戴きまする兄様と、知らせませ
 しき風情なり。四五右衛門氣もつかず、滑川「大黒舞も何なりと面白う申ませ」伊織はじつと會
 釋して、伊織然らば拙者も身の上を、お慰みに申ましょ。大黒々々ならず者の大黒、大黒と申
 は天竺の人でなし、上京の素浪人、爺が一せん荒金の、槌で打ても金は出さず、乗るべき俵持ざ
 れば、米に妹を代なして、それで親子暮した、さつても哀れな大黒、左れば果報は知れぬ物、
 米に賣た妹が、此國の殿様の奥様になつたけな、左らば無心を云はうと、旅立の大黒、さつても

穢い大黒、大黒舞を見さいな、むさ大黒見さいな。大黒の能には、一ちに妹が見ぬ顔で、二に悪い
 根性で、三に左あらぬ面をして、四つよい物著張つて、五ついつかい氣色で、六つむさいけし
 んで、七つ何が惜うて、八つ厄介嫌ひをる、九つ此方を得向ひで、十チで吐胸つきをつた。扱
 も慘い大黒「様子知らねば、四五右衛門肩身揺りて打領づき、滑川「嘘々腹が立ち申そ、扱々々
 妹めは、言語道斷惡い女郎、當分榮花に誇る共、何の將來善んべい。そんな不義奴此方から、
 勘當をぶち切て、若い花ぢや立身の、思案仕覺を仕召されい、近頃侮づりがましいが御合力
 申すつ」とて、腰を探つて百の錢、轉りと傍へ投やれば、ハット計りに押戴き、伊織「冥加に餘り
 し御合力、逆もの事に此錢を、妹が面へ投たい」と、恨みを含む目の内に、餘る涙ぞ道理なる。
 若狭も今は人目にも、餘る難儀の色見えて、四五右衛門に差向ひ、若狭「其方はようぞ氣が付た、
 貰ふ者より妹が、陰で聞たら嬉しかろ」滑川「イエいかな事く、悦ぶ事は扱置て、戲けた老爺
 と笑ひましょ」若狭「ハテナうさうは云はぬ物、他人の目にさへ淺間しき、見る影もなき姿形、
 妹は身にも命にも、替へて苦しう思ふらん。され共若しは國の爲、家の爲又子孫の爲、三ツを一
 ツに絡めたる、切ない義理の有る故に、一人の兄に憂い共、犬畜生と云はれても、名乗らぬ妹が
 心かと、他人の我身に引當て、思ひやるさへ魂も、消ゆる計に悲しや」と、餘所目は餘所の涙川、

沈むは頼て我身なり。取亂しては叶はじと、形を作り居直りて、「よし無き事に暇取つて、上や
 晩しと待給はん、鳥追ひ計りは若君の、お伽に屋形へ召連ん、大黒舞は立歸れ」と、輿の戸はた
 と鎖し給へば、「ソレお乗物やりませい」ハツト答て行列の、足もしく過行けば、伊織之介大
 音上げ、伊織「若狭の局よつく聞け、嫌はど兄には成るまいが、たつた一言人知れず、問はで叶はぬ
 こと有つて、形を簀し様を替へ、漸々巡り遇たるぞ、一夜は屋形へ連て行け、若狭の局、妹」と、
 人目も云はず呼吼れば、笠原太郎駈戻り、笠原何とも成らぬ横道者、若狭の局の御事は、比企
 の判官能員とて、お大名の親里あり、何者に頼まれて、斯る慮外を吐出す、白狀する迄家來共、
 それ打敷け」と罵しれば、伊織「ヤア麓忽ばし成さるよな、容こそ微祿致したれ、心は花垣伊織
 之介、棒の先でも當たらば、八幡堪忍致さぬ」と、反打かけて氣色する。笠原元より武骨者、「瘦
 浪人の腕ずんばい、叩き落せ」と下知せられ、追取巻て打けるは、笑止と云ふも餘りあり。若狭
 の局身を悶き、若狭「ヤレ麓忽すな早まるな、廣い世界に同じ名の、有まい物でなき物を、堪へて
 往せ浪人も、蟲を死なせて逃て去ね。ヤレ逃け逃がせ」と聲を上げ、あせり給へど心なき、雜人
 原は聞入ず、起れば敲き立てば打ち、落花狼藉花垣と、どつと笑う、入にけり。無慘やな伊織之
 介、聲を計りに泣叫び、伊織「エ、胴慾者妹め、此體を見て能もく、打捨ては歸るよな。命の

内に此の恨み、おのれ晴さで置うか」と、悄悄立て行く袖や、紙子もちぎれ頭巾さへ、行方も
 知らぬ大黒舞、打出の小槌現なき、身の行末こそ覺束な。玉しける家に住む身は物思ひ、知らで
 貌さへ形さへ、若狭の局とは、名にこそ立れ人知らぬ、下の歎きに消えかへる、雪見の亭に立
 出て、浅茅を近く招き寄せ、若狭「扱々久しや懐しや、ほのかに聞しは和女にも、判官殿の情に
 て、朝比奈を殿御に持ち、侍かるよに沙汰せしが、思ひの外の姿形、氣遣しや」とのたまへば、
 浅茅は暫し涙ぐみ、浅茅「問るよさへも恥かしき、あだに果敢なき身の上を、哀れと思し給へか
 し。勤めを致す折からに、重保様と云ひ交す、深き中をばひき裂れ、思ひも寄らぬ和田殿へ、
 嫁入て往たる其晩は、恐ろしいやら悲しいやら、現心もなかりしに、武道を磨く朝比奈殿、事
 の道理を聞分けて、重保様とお出合に、變らぬ中の縁結び、御取持に預りしを、父御に劣らぬ堅
 意氣で、惡逆無道の判官が、娘とあれば添はれぬと、顧みもなき御返事故、然らば親子の縁切つ
 て、其上添うて給はれと、詞を詰て別れしが、工の多き判官に、逢うて云ふのも氣味悪く、傳を
 求めて頼まうも、お前ならではなき故に、今日物詣を幸ひに、道に待受け候」と、しをくと
 して語りける。若狭「扱なう左様な事ぞとは、夢聊かも知らざりし。いとしや苦勞しやつたの。
 遠慮がましい今迄に、なぜ談合はし給はぬ。氣強う思や親と子の、縁が切りたか切らしてやる。

それまでもない自らが、思案一つで添はしてやる。昔は勤の兄弟分、今改めて眞實の、姉を
 持つたと思つてゐるや。嫁入も自らがさせませう、化粧田に卅町、一幡君の伯母上を、重保妻に
 遣はすと、使を以て云はせたら、秩父殿で御座らうが、否ぢやと云うて御覽うじやれ、ア、慮
 外ながら」と時にあふ、人の詞ぞ頼もしき。浅茅はハット手を合せ、浅茅「そんならお前は姉様
 か、此若君は甥子か」と、髪を搔撫抱き上げ、今は心も落付て、お庭のかよりお物數寄、谷七
 郷を手の下に、見越の堀の馬場先を、引つれ来る大名は、何十人と知らね共、色の黒いは朝比
 奈殿、御器量よしは重保様、不思議や今朝の大黒舞、本田が肩に打かより、此處へ來ますと云
 ければ、ハット計に驚きて、若狭も立て見おろせば、無慘や花垣伊織之介、顔も手足も、疵つきて
 身に添ふ物も切れぐにて、諸大名に引添うて、評定所にこそ入にける。コハそも何の詮議
 ぞと、納め兼ねたる胸騒ぎ、若狭「ナウ姥もおぢや誰も來い、今朝の様子は知る通り、大黒舞も
 浪人とや、打鼓かれたる口惜さに、人を過めし物ならん、賤しき形と云ひながら、一幡君へ一
 度でも、お目見え致せし者なれば、相手はどなたで有うとも、品によつたら自らが、肩を持ま
 い物でもない。次の間へ往て聞ておぢや、ヤレゆけく」とせり立て、詞は強く心には、如何
 なる罪を仕出して、憂目に逢せ給ふぞと、立て見居て見うろくと、案じ入りたる氣色なり。腰

元二人立歸り、腰「大黒舞は何者やら、秩父殿を一番に、諸大名衆が最眞して 相手は比企の
 判官様、仔細は未だ知れませぬ」若狭「ヤレ取わけて氣遣ひな、またゆけく」と追ひ遣りて、
 胸に手を置き思案して、最早大事に成つて來た、確な事を見ぬうちは、秩父が取持つものでな
 し、腹立紛れに兄様の、如何なる事か宣ひて、我憂名をや流さんと、忍び涙ぞ道理なる。乳人の
 松代遠たどしく、走り歸りて云様は、松代「いや早興の醒めた事、朝比奈殿へお嫁入の判官様の
 娘御は、京六條の遊女ぢやと、和田殿からは宣ふを、判官様は眞實の娘とあるの争ひを、秩父
 殿が中へ出て、一つ二つのたまふと、判官様が轉りと負け、親でない子でないとの誓言の上にて、
 朝比奈殿のお内儀が、秩父殿へ貫はれて、此一埒はさらりと濟み、跡がお前の詮議ぢやけな、
 聞て參ろ」と走り行く。浅茅は心いそぐと、浅茅「姉様最早御苦勞に、成さるゝ事は入りませぬ、
 重保様の女房と、私には札が附いたれど、お前の事が氣遣ひ」と、案じ顔こそ優しけれ。若狭
 はハット泣出し、若狭「ナウ浦山しの浅茅やな、扱浅ましの身の上や。實に世の中は飛鳥川、變
 る淵瀬と聞しかど、二人が中を今の間に、早く歎きと悦びの、替る物とは知らざりし。何を隠
 さん最前の、大黒舞こそ自らが、誠の兄にて候ぞや。傾城の身の習ひとて、賤しき兄を持たる
 が、差て恥にはあらねども、判官が娘こそ、君の寵愛淺からず、一幡君を儲しとは、日本六十六

國には、知らぬ者としてよもあらじ、諸國の大小名に若狭の局と侍かれ、榮花を見るは君の恩、元の根ざしは判官の、悪にもあれ善にもあれ、須彌より高き恩ぞかし。去とて誠の親兄を、仇に思ふに無けれども、一幡君の一門に、大黒舞と云はれんは、瑕ある玉の如くにて、親子の光は消失せん、親子の光失せたらば、判官一家は滅ぼされん。逆心募る天罰にて、外の口より知るとも、恩をば仇で報すべき、道理は更に無きものを。いまこそ情無く過ぐるとも、若君御代を嗣ぎ給はど、心の儘に親兄へ、御孝行申さんと、思ふ心の一筋を、神ならぬ身は御存じなく、見捨て歸る恨みと云ひ、打ち敲かれたる無念さに、訴人に出させ給ふこと、恨みと更に思はれず 正直正路な四五右衛門、我身の上と知らずして、扱々悪くい妹めぢや、將來が能うあるまいと、云ひしは胸に應へしが、早く報いの來りしと、思ひ出すさへ淺まし」と、聲を上げてぞ泣き給ふ。淺茅も左右涙のみ、應答もやらで居る内に、二人の腰元立戻り、胸押撫て息をつぎ、腰元「御身の上を唯今が、大黒舞と判官殿、角め要めの受答、秩父殿の仰せには、お前が遊女に極まらば、賤しき腹に若君は、よもや胎らせ給ふまい。取替子でも致したか、負けものかの二つの内、一幡君も門前より、大黒舞の面を著せ、追ひ拂はんとの御評定、若も左様に成たらば、こち等は何と成べき」と、縄り付てぞ泣出す。若狭の局聲を上げ、若狭「聞しにも似ぬ重忠

が、今の詞の愚かやな、天下の鑑と云はるれど、流石は吾妻戎にて、武道は知れど文は無く、花は有れども實を結ぶ、辨へさへもなかるらん。后高位の御身にも、徒ら有し噂もあり、海女の腹から大臣の、生れ給ひし例もあり、傾城遊女の胎内に、大將の子が胎らぬとは、なんの書物で見出し、泥の中より生出る、蓮より猶美しくしき、花の顔面白露の、玉よりけなる若君を、追失なはんと云ふ事は、忠義か扱は逆心か。源氏を守りの御神は、など餘所に見てお在ます、頼家卿の御運さへ、末になつたか悲や」と、咽返りく、わつと叫ばせ給ひける。涙の中に若君を、膝元近く引寄せて、若狭「果報拙くましくて、賤しき母が腹よりも、生れ給ふが淺まじや。稚く渡り給ふとも、只今母が云ふ事を、篤りと能う聞き給へ。大將の子と云ふものは、死ぬべき時に死なざれば、人の笑ひを受くるぞや。母が詞を懸けたらば、此守 刀にて咽の邊を突貫ぬき、頼家卿の胤と有る、證を見せて母が身の、恥辱を雪ぎ給はれ」と、云舎りれば一幡君、わろびれ給ふ氣色なく、一幡「腹十文字に切らうか」と、莞爾と笑める稚顔、見るに目もくれ心消え、抱き付てぞ歎かるよ。淺茅暫しと押し止め、淺茅「ア、道理やさりながら、二度の便りに跡先の、詞の違ふ所あり、傾城の名も假親も、變らぬ姉と妹を、我は秩父の嫁にして、お前を若君諸共に、追失なはん様はなし。浮くも沈むも同じ世に、今より誠の兄弟ぞ、甥子と契り初

めたる、詞はいかで違ふべき、篤と様子を聞届け、死で叶はぬ道ならば、跡にはなどか残るべき、三つ瀬の川を諸共に、手を引いてこそ渡らめ」と、諫合ふこそ優しけれ。若狭の局顔を上げ、若狭「なう嬉しの人の詞や、七度結びて姉となり、六度契りて妹となる、それは誠の兄弟よ、是は今日しも假初に、云ひ交したる契りとて、一所と迄にのたまふは、先の世よりの約束と、思ひ遣るさへ睦まじき、眞實覺悟極めてか」淺茅「ア、愚なる仰せやな、武士の性根は時に依り、味方が敵に裏返る、例しはあれど傾城の、言替したる心底は、違へぬと云ふ手本は、末世の人に見せう物、急せ給ふな姉様」「怯れを見せな妹」と、互に顔を見合せて、莞爾と笑ひつ泣きもしつ、死を待つ内ぞせつなけれ。斯る所へばたくと、乳人腰元駈戻り、腰元「なう悦び成されませ、判官殿利潤に成り、大黒舞は大騙、由井が濱にて御刑罰、仰せ付られ候」と、きほひ懸れば兄弟は、命を延る悦びの、中に歎を引出す、伊織之介が縛めを、本田の次郎繩取にて、屠所の羊の引綱や、隙行駒の足元も、よろりくと行く道を、若狭はわつと泣倒れ、又起上り「あれくくく、あれなう兄様々々」と、聲からしたる呼子鳥、浮川竹につらなれる、枝を放れし鶯や、子は子なりけり時鳥、悦びのうら歎のうら、恨を誰に由井が濱、波なき方に立波の、袖の裏とは兄弟が、身の上こそ知られけれ。

第四 若狭の局道行

嬉しとは昔ぞ詠し星月夜、明くる詫しき鎌倉の、御所の御門の七重八重、越えつ忍びつ隠るいつ、若狭の局妹は、淺茅と云へど淺からぬ、思ひは一つ二人連、現心も亂ればし、一幡君が今も猶、母に添寐の夢や見ん、寐顔脇顔笑ひ顔、目にちらつきて身を去らぬ、袖と袂のうらくに、涕碎けて音無し、瀧の白絲、絲による、物ならなくに別路の、心細くも夜の道、迷ひ來る身がやつ過ぎて、春まだ寒し雪の下、積る思ひに哀別離苦の、理しるき曙や、東光山の鐘の聲、別れを歎く人有れば、眠りを覺す法の友、親同胞は遠近に、葦蕒も名のみして、霜の芝道踏しだく、紅匂ふ空煙に、誰待宵の侍従川、寄せては返へる白波の、ふじが谷とはあれやらん、一刷毛さつと横雲は、誰筆染て隈どりて、四季の詠めもとはに、代々を重ねし鶴が岡、こよはやれ何處ぞと道人に問へば、此處は坂川辻町ちやとさ、心ばかりは由井が濱、つらなる枝を打つ波の、胸に答へて身に懸る、責て空しき骸にだに、行合川の丸木橋、踏は返へさじ一筋に、千代の例しの細石、無き名の數や數ふらん。無常を告ぐる野鳥の、聲も鋭き松蔭に、暫らく休らひ給ひける。梟は寐に行く鳩は起て出るとかや、明けなんとして玉鉦の、道まだ闇

き岸陰に、高札立てて高提燈、さし寄て見給へば、若狭「何々若狭の局が兄、花垣伊織と云ふ者、上を偽り掠めし故、刑罰に行ふ」と、讀も終らず此所其所と、見渡す向ふに獄門の、顔は知らねどそれとのみ、するくくと走り寄り、若狭「なう淺まし御姿や、人をも害め盗みをし、重き科有るものこそは、斯る憂目に逢ふと聞け、ありの儘なる有り事を、云ひも開かてやみく」と、非道の掟に逢ひ給ふ。是と云ふのも自らが、名乗て出ぬ誤りを、百千萬の言譯も、今では甲斐も消漕ぐ、蟹の小舟のこがれ來て、せめて最期の御顔を、拜まんとこそ思ひしに、早くも變る兄上の、御「佛」と計りにて、二人は其所に倒れ伏し、泣くより外の事ぞなき。本田の次郎親經、夫とは知れど知らぬ顔、親經「ヤイく女寄るまいぞ、言語に餘る大罪人、首なと盗み取らんかと、本田が番を相勤む、はやく歸れ」と云ひければ、二人は頓て起直り、若狭「ハア秩父が家來の本田よな、我こそ若狭の局なり。是なるは又淺茅とて、汝が主人重保が、様子は知つてゐる女。就ては彼なる高札に、心得難き事こそあれ、詮議が闇い狼狽た、秩父に是へ參れと云へ、尋ねん」と宣へば、親經ハット畏り、親經「驚き入たる仕合かな、扱又詮議の筋に付、何か御不審候よし、重忠召にも及ばぬ事、憚りながら拙者めが、申開き候はん、御尋あれ」と領承す。若狭「ム、何といふ其方が、主人に代つて返答とや、只今尋ぬる色品を、若し言譯に詰りたら、まああの

如く汝が首、獄門の木に曝すぞよ、心を鎮め能つく聞け。あの高札に若狭の局が兄伊織之介と書付しは、確かな證據あるならん、然る上には彼の者を、上を偽り掠めしとて、なぜ刑罪には行うたぞ。但し偽り者ならば、若狭の兄とはなぜ書たぞ。二つに一つは重忠が、誤りにても有るまいか、返答聞かん」と宣へば、親經莞爾と打笑ひ、親經「云うても女儀の事なれば、そこ等は御存じ知れぬ事、國の政道致すには、非理法權の四つの文字、第一に仕る。理非の捌きは常の事、理は持ちながら一國の、法を背けば落度となる、理も有り法も背かねど、權威には又壓るるなり、權威と云うては誰あらん、比企の判官能員殿、理非善惡をも顧す、法も無法も辨へねど、君に出頭無二と云ひ、若狭の局の親御ぢやの、一幡君の祖父様のと、持上したる權威をば、碎く時節の來らぬ故か、洲を潜つて泥水の、澄るをじつと待つてゐる、重忠は温和の武士、花垣伊織お局の、兄と見据て有りながら、首を打しは政道に、權の一字を用ふるなり、又高札の書付は、親經自分の量見にて、學問したる事もなく、智慧に餘計も候はず、善なれば善惡は惡、見えた所をまつ直に、云はねば聞かぬ生れ付、御名を出したが落度なら、獄門の儀は扱置て、火焙にも遊ばせ」と、道理をならべ云ひ立つれば、二人は兎かうの詞なく、差うつぶいてお在す。親經威丈高になり、親經「拙者めも又御局へ、御不審を申すべし。兄を敬ふ禮儀をば、御存じ

あらば、昨日にも、名乗て御出成さるゝ筈、イヤく身こそ大事ぢやと、御引成さるゝ心底なら、只今是へは無用な事、生ける時には無禮をし、物をも云はぬ死首に、諄々とした言譯は、心得難し」と冷笑へば、淺茅は頓て差出でて、淺茅ヲ、能い御不審さりながら、遊女は義理の商賣にて、身を底保など云ふ事は、かけても知らぬ事なれど、大將軍の奥様の、昔のしがを云はるゝは、夫の恥辱子の恥辱、判官殿の恥辱にて、名乗り合ぬは伊織殿、只一人の恥辱ぞと、最かるくしき量見が、思ひの外に兄上の、身を滅ほせし悔しさの、言譯もせず御首を、烟になして亡跡を、弔らひ給はん其爲に、御所を諸共出たれば、再び歸る心でなし。高札を打割りて、首を此方へ渡されよ。但しは了簡成るまいかと、守刀を取出し、妹が抜けば姊も抜き、どうぢやくと詰寄るは、何れせつなき心なり。親經ハツト感涙し、親經何しに惜み申べき、首は勿論軀共、只今進上致さん」と、櫃を明くれば伊織之介走出で、「ヤレ妹よ」兄様か」是はくと計にて呆れるも又涙なり。伊織涕を押拭ひ、伊織昨日の恨引替へて、今日の心底満足せり。某當地へ來る事、御身に逢うて身の榮花、極めん爲にて更になし。去年三月五日の夜、羽黒山の修驗者、豪海と云ふ法師に、一夜の宿を貸けるが、親立蕃が寢首を搔き、夜の内にお失せしを、此所やかしこと草を分け、縁を求めて尋ねれども、知れぬこそ道理なり、頼家卿の歸依僧にて、

營中を離れぬよし、狙ひ寄るに手術なく、そなたを語らひ討ん爲、遙々此所に下りし」と、始終を語れば若狹の前、若狹「こはそも夢か淺ましや、假令暫しは別るゝとも、待つとし聞かばいづぞは又、鎌倉へ呼取て、朝夕御顔を拜まんと、仇の頼みもなき身ぞ」と咽入りく、歎かるゝ。漸々涙を押止め、伊織能くこそ思ひ立給ふ、親の敵と云ふからに、討たて叶はぬ道なれば、心を盡し氣を碎き、狙ひ果せて討ち給へ。兄様頼む」と云様に、守刀をすばと抜き、心元に刺進せば、こはそも如何にと人々は、驚き騒ぐ計りなり。伊織は膝に搔抱き、伊織心得難き有様や、兄弟名乗合うたるが、一分立ぬと云ふ事か、様子を語れ」と云ひければ、若狹は苦しき聲を上げ、若狹「ア、愚かな事を宣ふかな、廻り逢うたる嬉しさは、冥途の道の土産ぞや、宿世いかなる報にや、鬱も憂さも悲さも、身に積む罪の味氣なや。聞けば聞く程自らは、世に存へん様はなし、判官殿の常々に、若狹の誠の親兄弟、生て此世にある内は、いつか名乗出づべきと、心の休まる事なしと、戯れ事にのたまひしが、其豪海と云ふ法師、分けて懇志の中なれば、それを頼みて父様を、殺し給ふに紛れなし。討れし親も自ら故、討する親も自ら故、今又狙ふは誠の兄、手引をせぬは不孝なり、心を合せば是迄の、榮花の恩に預りし、後の親をば親とする、義理に背くが悲しさ、斯こそ思ひ定めしぞや。體は朽て行くとても、我魂は妹の、淺茅が胸に残し置き、兄弟心を合

されて、敵を討ちて父上や、又自らが修羅道の、苦患を早う救うて給べ。本田殿へは取分て、申置
 度き事こそあれ、一幡君の行末を、宜に見立てて給はれと、重忠殿へ頼うて給べ、是のみ黄泉の
 障りぞ」と、口説言こそ哀れなり。親經涙押拭ひ、親經「お心易く思召せ、伊織殿の御事も、敵を首
 尾よう討せん爲、成敗せしと偽りて、大罪人の首を討ち、獄門の木に曝せしも、是皆主人の計略
 なり。一幡君を御代に立て、重忠後見致す事、何しに違背申さん」と、世に頼しく答ふれば、若狭
 の局手を合せ、若狭「ア、有難や忝なや、此上思ひ置く事なし。兄様去らば」と云ふ聲の、弱ると
 聞くぞ玉の緒も、切れて果敢なく成にけり。淺茅も共に泣狂ふを、親經伊織押止め、「姉の魂
 止りて親の敵を討つ迄は、こなたの骸は預り物、龜相成れな怪我有るな」と、諫め賺してたづか
 弓、「矢竹心はさる事にて、云うても敵は本身者、主人などが智慧も借り、力も借つて討ち給
 へ。若狭の局の御最後は、沙汰なし」と、御死骸を、密かに寺へ送らん」と、先長持に昇入れて、本
 田は先肩跡は兄、逢はぬ昔の戀しさと、逢うての今の悲しさと、擔ひ較ぶる棒先の、永き別れぞ
 是非なけれ。

まよひのすがたる

こやうけいがいに歸り、鳥雀枝の深きに集る。實に世の中は仇波の、寄邊はいづく雲水の、身
 の果いかに知らざりし。御悼はしや頼家卿、瓊樓玉樹の閨の内、二世の三世の七世のと、互
 に契り交されし、若狭の局何となく、屋形を紛れ出給ひ、今に御行方知れざれば、現心も涙
 の床、身を知る雨の明暮に、翼しをるゝ雛鶴の、一幡君も朝夕に、母よくの諸聲に、いとど
 歎きを増鏡、俯うつす姿繪も、それも心に任せねば、せめては夢を頼むてふ、假の枕の假御殿、
 一念既に亂るれば、迷ひの門を開くとは、知らぬ御身ぞ味氣なき。石に勢あり水に音あり、風
 は大虚にわたる、形を今ぞあらはす女、掛字を離れて心魂忽ち顯はれ出たり不思議やな。水
 莖の筆の禿と身を染めて、眠りならひの夕邊より、幾朝ごみの春秋を、梅は柳に靡き合ひ、松
 は櫻の合床も、昔語に成りたるぞや。奥様なりの釣衣著に、鴛鴦の衾の羽根かはし、情かは
 すも色の淵瀬と、水のかしはの浮沈む、身は浮草の根を絶えて、娑婆に残れる輪廻の業過は、
 雲霧の軒端に立ちて雨に霰に、霜に雲に積りくゝて消返りては、又降る雪の姿のふじよ、烟比べ
 は淺ましや。「なう懐かしや一幡君、親子の中は一世とは、誰か云ひけん空言や、泣音は遠き昔
 の下、露のそこなる魂に、答へて餘り悲しさに、姿をかりの懸物に、映りて是まで來れり」と、障
 子の内の床しげに、すつくと立ちてお在す。頼家見るより走出で、「恨めしの若狭やな、妹脊の

山の中を行く、吉野の川のよしや世に、何がつらうて悲しうて、屋敷は遁出でけるぞ」「ア、愚かなりく、誰に恨みを由井が濱、親同胞になのりその、名乗れ辻しも假初に、忍び出たる閨の戸の、跡だに未だ鎖ざりしを、誰が通ひ路と今ははや、つまや重ねし小夜衣、妬ましの男やな、いやらしの妬みや」と、逃んとすれば引戻し、拜めど顔を打振て、恪氣は女の手癖口癖往古今も、貞女きう女もていかかづらや薦蔓、這纏はれても、此身元よりうへきにあらねば、臺に輝く鏡もなし、煩惱菩提は法の道連、あら面白の世の中や。夕邊朝たの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞て驚く人もなし。花は根に、鳥は古栖に歸れども、行きて歸らぬ死出の道。「申殿様」なんぞ「酒をばふつより止めさんせ」なぜに「色遊をも置しやんせ」そりや成らぬ「すれやどう云うても止めぬ氣か」「およいかなことく」「そんなら妾は最う往る」「どこへ」「あの世へ」「あの世とは」「はて冥途へ往まする」頼家はつと氣を注て、「何と冥途へ歸るとは、扱は此世を去りしよな」「藻に住む蟲の我からと、刃の上に消し身の、此世に心は止めねど、迷ひ來るは君故ぞや。直きを捨て曲るに、親み給ふ誤りも、色と酒との二つとぞ、諫め申さん爲ばかり、二度見え候なり。唐土玄宗皇帝は、御心賢くて治まる御代は五十年、國土も民も太平の、天子と呼ばれ給ひしが、海棠眠る楊貴妃の、桃の媚ある顔ばせを、御日尻に懸りしより、逆臣起つて御輦も、帝都の外

に出給へば、比翼連理と契りたる、羅綾の袖も仇し野の、露かあらぬか魂の在所を、尋ね詫びさせ給ふとかや。憂き事を暗部の山の鶯の、子に迷ふのも恩愛の、薄き契りの袂には、涙を包む春雨に苔める花の若君を、最一度見たし抱きたし」と、障子の元に立寄れば、コハなんとせん情けなや、此世あの世と立隔つ、罪障の雲高くして、涙の霧や戀慕の霞、暝々朦々朧々として見れども見えず聲も聞えず。南無三寶親子は一世の契り知られて、泣いて笑うて悶え焦れて、かつばと伏してぞ泣き居たる。頼家頼に大音上げ、「李夫人去つて漢王の、空しき床の寫繪に、魂迎せし烟のうち、云はず笑はぬ 佛を、歎きしも身の上なるを、現世の逢瀬叶はずば、刃に死して此世を去り、極樂諸天は愚かの事、假令地獄の底迄も、誘へ連立て伴へ」と、手に手を取て行くも歸へるも逢坂の、關も此身は止め得ぬ、泣も笑ふも夢よ現よ 幻よ、最早別れのあら堪難や、刃の罪に修羅の太鼓の「去ば」と云へば、「暫し」と止むる、袖振り放せば、目にこそ見えね、踏む足元は猛火の煙、こは淺ましやと、逃つ轉べどまた行く先も、火焰の煙に姿も焦れ、身慄してこそ立たりけり。悪かれと思はぬ山の峯にだに、あふなるものを人の歎きは、「君を侮り民を惱す判官父子が悪心惡逆、縁にひかるよ我身に報うて、廻り車のくるりくるく、くる夜もく明けてもく千年萬年、百千億劫獄卒惡鬼の答に打れ、山に上れば劔に劈き、谷へ下れば紅蓮

のこほりに、白無垢却つて唐紅の、花も紅葉も月も雪も、人間萬事は胡蝶の戯れ、酒は仇をば結ぶの刃、色は命を切るの鉞、皆をり捨て今日より政道正し給へ」と、聲華やかに夕告鳥の形は其儘消てんけり。頼家泣くく慕ひ惑うて、座敷の隈々此所よ、其所よと尋ね廻れば、又立歸るえんぶの有様、向ふに翻然と形を顯はす。抱き止んと走り懸れば、其儘消えて電光石火の、水の螢のちらく、ちらりくと立廻る、而影月影諸共に、あくる詫しと云ふかと思へば、形は其儘元の掛字に立戻り、晝空事とぞなりにけり。頼家はつと手を打て、「迷悟三界唯一身、昨日の酒の酔醒て、今日は衣の玉を得つ、家には子あり弟あり、國の警衛は和田秩父、動きなき世の鎌倉山、我身は思ひきりが谷、唯今幽靈尊場へ、手向の花」と鬘を、切て彼所へ投げ給ふ。順縁あり逆縁あり、共に成佛得脱の道の道とは、往古の聖人も説き置き給ひけり。

第五

天道は満るを缺き、地道は驕奢を憎むとかや。扱も判官能員は、若狭の局自害故、積惡世上に露顯の上、先つ頃より頼家卿、御不例甚だ重うして、事極り見えければ、謀計日夜身に迫り、野心の胸に手を置いて、御次に控へ居る處へ、願行院豪海は、御祈禱の爲宿直して、御枕元に居

たりしが、徐りくと忍出で、判官を見るよりも、豪海「ヤア比企殿か」判官「法印か、先々君の御容體、如何渡らせ給ふぞや」豪海「然れば次第に目を追て、元氣弱らせ給ふと見え、正體も無き御風情、コレ大切の場に成りしぞや。今にも尼君北條など御居間に詰かけ、御家督の沙汰あらば、貴公の仇とならん事、鏡にかけて見えた事、此頃心を盡されし、用意如何」と嘯けば、判官莞爾と打笑ひ、判官「御坊氣遣なざるよな、そこらは疎忽らぬ呑込だ。言るよ通り毛蟲めら、病ほうけの頼家に、差込れては年來の大望が成就せぬ、所詮本復ない命一思ひに刺殺し、御家督は一幡へ御相續の遺言と、鎌倉中へ披露せば、差詰め拙者は執權役、悴どもは自から、外威の威を振ふべし。貴僧へも又千石か、二千石は知れた事。其上にも和田秩父、北條などが意地ばらば、片端から欺し討。コレ床の下を掘抜いて、忍びの者を入れ置た、悦び給へ」と云ひければ、豪海ぞくく小踊し、豪海「ハテ御殊勝な御了簡、萬事は頼み上ます」と、領き合うて居たりけり。頼家卿それぞとは、夢にも知らず御寐間より、徐々と歩み出で、兩人に打向ひ、頼家「今日は一入氣も勝れず、宿直の者がつくんと、取廻すのも鬱かしい、暫く爰で語らう」と、打解け給ふぞ危ふけれ。二人は悦び目配せし、左手右手より飛かより、刀を胸に押當て、判官「コレ迂愚殿、どうで快氣のない命、生けて置ては某が、大望の妨げ、覺悟なされ」と突掛る、頼

家ハット計りにて、差俯伏て在せしが、稍有つて宣ふは、頼家「人窮する時は偽り、鳥窮する時は攔む、窮鼠却つて猫を喰ふとは汝等が事なるよな。エ、過つた重忠や義盛、数度の諫言を思ひ出るも恥しや。覺悟極し上からは、命は更に惜からず、爰を放せ腹切る」と、二人を左右へ突倒し、既に斯よと見えける時、怪しや御座の疊の下、ぐわらりぐわたりと、百千萬の地雷、天地も崩ると如くにて、頼家卿の座ます、御座の疊の下よりも、すつと差上げ朝比奈が踏んばたがつて立たるは、けんろう地震の湧出かと、恐れ慄く計りなり。判官漸氣を静め、判官「ヤア後れたかかねぐに、示し合せし悴共、笠原中野は何所にある、出あへぐ」と呼ばれば、朝比奈かつらぐと打笑ひ、三郎「甲に似て穴を掘る鼯鼠のへろぐ武士、御用ならば進上」と、ばらりぐと人礫、投げ出しぐと投げ出し、大太刀寛けすつと寄り、三郎「コリヤそこな護摩の灰、身が法力の鐵縛、三寸繩の數珠繫ぎ、ナント弟子にならぬか」と、二人が細首引攔み、えいやぐと絞付れば、眼を見出し血を吐て、「眞平御赦免ぐ」と、手を合するぞ心地よし。斯る所へ和田秩父、本田花垣駈來り、伊織「出來したぐ朝比奈」と、煽ぎ立れば義秀は、三郎「コレ伊織殿、此法師めは其許で、御慰みに料理あれ、判官は某が、只今庖丁致すぞ」と、首宙に打落す。伊織もすかさず豪海を、氣も堪らず打放す。「チ、潔よし面白し」悪人退治國

繁昌、佛法繁昌武家繁昌、五穀成就願成就、佛力神力の整ふ國こそ目出度けれ。

鎌倉三代記終

繪本太功記

發端

天にかなひし故やらん、八百の諸侯従ひて、紂王を討んと言ひしを、我未だ天命を知らずとて、諸の軍を引具し先歸りぬ。實戰國に大勇を示す亂舞の音高き、内大臣春長公の一構へ、遠近の諸士大半屬し、登城は櫛の齒を引く如く、さも嚴重に見えにけり。取次の侍罷出、侍「仰付けられし安部の法印、只今參著仕る」と申上ぐれば近習の面々、斯と取次ぐ間もなく内大臣平の春長、從ふ武士は羽翼の臣眞柴筑前守久吉、武智光秀諸共に、縁際近く座に直る。久吉下部に打向ひ、久吉「ホ、君にも殊なうお待かね、早く案内申せよ」と、いふ間程なく法印安部氏、追都の水清く、淀まぬ公家の交りに、衣紋正しく入り來る。春長莞爾と打笑給ひ、春長「ホ、法印には大儀々々、其方を召寄せしは餘の儀にあらず、あれなる大庭の蘇鐵、泉州妙國寺に有しを、此安土に楠置く所に、頻に聲を發し、妙國寺へ歸らん歸せ」と震動する事三夜に及ぶ、正しく變化の所爲ならん判斷いかに」と有ければ、始終を聞入る内よりも、理を考ゆる道々の、胸の算木に眉を皺め、法

「御尤成る御尋、某考へ申せしに、草木心なしとは申せ共、佛地に育ち朝夕妙經を聞込み、一度枯れし木なれ共、元の如く榮えしも法華經の徳ならずや、法力の尊きは御宗旨の有難き所なれば、君にも御満足ならん。急ぎ佛地へ送還し給はるが、肝要ならん」と法印が、水を流せる辯舌は、實精明の末孫の、器量顯れ見えにける。血氣の大將道理に迫り、春長「春長が手に入れし蘇鐵返すべき理由なし、暫らく妙國寺へ預くる旨、使者を以て申遣し、身が心に叶はざる法華の族、いはれざる宗論を好み、上を恐れざる無禮の段々、牢獄へ押込め置たり、其上今日捕置たる普天一人、身が目通へ引出せよ、安部氏には休息有て然るべからん、久吉には籠略なき様もてなすべし」はつと領掌式禮目禮、眞柴に隨ひ法印は、次の一間へ立て行く。程もあらせす下部共、普天坊を高手小手庭上に引据れば、光秀は普天に向ひ、光秀「ヤア貴僧、かよる縛に遭ふ事も、法義故とは云ながら、獄の苦しみ察しやる。君にも是に御座ましますれば、退つて出牢の御願ひナ、サ致されてよからん」と、普天を庇ふ明智が詞。尾田殿赫と怒りの面、春長「ヤア某が詞も出さぬ内、出牢の願ひせよとは、いらざる汝が眞眞の沙汰、控へて居よ」と居文高、春長「ヤイ根ぐさり坊主よつく聞け、此度妙國寺の庭木の蘇鐵、某所望し此安土に植置きたる所、無上に妙國寺へ歸らんと吠ゆる、餘り喧しきによつて、暫らく彼地に預ける間、佛木たり共春長所望の上は、再

び返すにあらず、汝等を番人に申付る間、其旨急度心得られよと、冥途の高祖へ申達せよ、不承知ならば直様に普天を以て冥途より返答有るべし、儂も法華の妙を知らば、二度此土へ立歸り、某に詞をかはせよ。最早左様なる法力は有まい、一時も早く使を急がせよ、早く早く」と不敵の春長、重惡募る權威の仰、怵へくし普天坊、すつと寄つて齒齧をなし、普天「ヤアぬかしたり嘲つたり、汝が宗門で有りながら、高祖を輕じ奉り、惡口雜言報忽ち遠かるまじ。愚僧只今命を滅するも、汝が使に行くにあらず、閻魔の廳へ趣き儂が惡逆訴への爲に此世を去る。見よ、頓て火の車を持せ、拙者迎ひに来るべし。サア一時も早く冥途の門出急ぎたし、イザ光秀殿介錯」と、罵る普天を光秀がはつたとにらみ、光秀「ヤア我君に詞をかへし、惡言を吐く手間で、なぜ助命の願ひは致さぬ。恐れながら我君にも、御怒りを鎮められ、御助命の程偏に願ひ奉る、元來勇猛盛にして、良もすれば靈場佛地を破却し給ふ事、君の一失。山門の衆徒等も急難を遁れんと、一七日の加持祈禱、惡逆の勇將と、世の人口黙しがたし。只仁惠の御計らひ偏に願ひ奉る」と、事を分けたる光秀が、詞に春長突立上り、春長「黙れ光秀、我惡逆とは憎き過言赦されず」と、拳振上げ明智が頭りうくく、打据る給へど手向ひの、ならぬも主命ハアはつと、誤り入たる無念の涙。普天猶も怒りの顔色、普天「エ、惡鬼魔王といふは汝が事、

君有つて臣、臣有つて君たる事を知らず、情なくも大國の主たる光秀殿を、童劣にうち打擲ちやうちぢ天罰佛罰一時に報い、墮獄にくだしくれんず」と、怒り重ぬる額ひたいの天弓、光々として日運ひのりの、出現あら有かと身もよだつ。春長「ヤア、物な言はせそ、早くも國境へ引立よ」と、御下知おんげ恐れ家來共、はつと計に引く繩なはの、頓つがて恨を知らさんと、題目の聲一心に、佛敵春長赦さじと、詞は正に本能寺御法の庭の露となす、佛の報い宗門の威力の程こそ三軍

六月朔日の段

扱そも其後天正十年六月上旬の事かとよ、内大臣平の春長、東北に猛威を振ひ押して都に上洛有る。御嫡おんちやく男城之助春忠二條の御所に居をしめ給ひ、天奏御查みくを入れ給へば、饗應きやうおうの役人は武智日向守光秀、森の蘭丸初めとし、譜代ふだいの良臣古老の諸士列を正して相詰る。院いんの御所の内勅、浪花中納言兼冬仰出さるよは、兼冬かねふゆ「往昔應仁の亂れより、諸國の逆賊王威を輕んじ、都の内へ軍馬を引入れ、玉座近く馬蹄けがに穢し、叡慮えいりょ穩ならざりしに、幸春長大志を抱き、帝都を無事に治むる條、主上えいかん叡感淺からず、其功を賞し給ひ、嫡子城之助春忠を從三位に叙し左中將に任ぜらる、院の内勅、斯の通り」と有ければ、春長はつと平伏あり、春長「コハ有難き勅命、不肖ふせうの某、何ぞ一臂

の力に及ばん、三好を初め逆徒原、四方に退散いたせしも君の聖德、數ならぬ躬せがれ春忠身に餘つたる官位昇進、天恩謝するに詞なし」と、勅答有れば兼冬卿、やよ満足の御氣色。春長重ねて、春長「軍務に暇なき某、心計の御饗應、鄙ひなびたる觀世能御上覽も時の興、イザ奥殿へ」と有ければ、袖かき合せ兼冬卿、武智が案内にしづく」と、奥の間さして入給ふ。春長跡を見送つて、「蘭丸是へ」と近く召され、春長「汝も兼て知る通り、無二の忠士と思ひの外、心得難き光秀が心中、彼が心を探らん爲、いつぞや寺に於て諸侯の見る前、恥辱を興へ恥しむれど、面に怒りを顯はさず、無念を忍ぶ彼が胸中、猶以て不審の一つ、其儘にさし置かば、虎の子を飼に同じ。逆心の企有や虚實を探り試し見よ」と、仰に蘭丸、蘭丸さん候、武智が行跡聊不審に存する折から、割符わりふを合す君の御心、思ひ合する彼が俗性、頭上に喜怒哀骨有る者は、主人に崇ると異人の禁め、もし逆心に極まらば、討つて捨んに手間隙てまひまいらす、奥へ踏込み引捉へ」春長「ヤレ、龜忽かめこつなり蘭丸、實否じつぶも糺さず荒立あらしなば、却つて僻事ひがこと出來せん、事によそへて、ナ、合點がてんか」蘭丸「ハア、畏り奉る」春長「必ず油斷ゆだんいたすな」と、牒合しめあはして春長公、帳臺深く入給ふ。蘭丸は只一人、兩手な拱んで思案顔、工夫を凝す折も折、奥は亂舞の打囃子、二番三番ワキ能も、終りと見えて配膳はいぜんの、時刻も移る、巳の上刻、武智が一子十次郎、古實を守る饗應司、配膳のかけ盤山海の珍味を盡し、

目八分に捧け来る。蘭丸見るより、蘭丸「コレサ十次郎先待れよ、饗應の役目は、お手前の親父光秀殿と此蘭丸、兩人立合ひ申合せも有べきを、自分一人の取計らひ、此蘭丸は呑込めぬ、膳部の次第は如何でござる」十次「ハア御料理は板元奉行中井半左衛門、七五三の獻立」蘭丸「ナニ七五三、ハテナア何にもせよ、相役の某に一應のこたへもなく、氣儘なる致し方、近頃以て不躰千萬、此分では差置れず、光秀殿へ直應對、イデ役所へ」とかけ行向ふ。襖ぐわりと出来る武智、蘭丸傍へぐつと詰寄り、蘭丸「様子残らず聞れしな、武士は禮儀を表とするに、此蘭丸を踏付し仕方、如何なる趣意か言へ聞ん、返答次第手は見せぬ」ときつば廻せば、光秀「ハ、ハ、ハ、コハ仰々しや蘭丸、道若氣の一徹、何故貴殿を侮り申さん。最早御膳の時刻故、役目大事と勤る光秀」蘭丸「黙り召され、饗應の役、貴殿拙者に相勤めよとは主人の云付、主命をもどき、自分の氣儘にせらるゝは、エ、聞えた、こりや何か拙者を役に立ずと思召すか、但し又智慧者と呼れし武智殿、人を見下す高慢か。イヤハヤ、人も知つたる其元の素性、何か浪人の寄邊なく、所々方々をうろたへ廻り、北國に於て詮方なく、糧に盡たる身のせつなさ、土民共の小悴を集め、手跡指南の禮物で、命をつなぐ寺子やお師匠様。ハア、まだ有、日外、江州佐々木征伐の折から、木下と先手を争ひ、箕作和田山時限の合戦、久吉に仕負ても、恥を恥とも思はぬ其許、

何と、さうではござらぬか」と、心に思はぬ傍若無人、さしもの光秀赫とせき上げ、光秀「ヤア物に狂ふか蘭丸、大切の場所と事を憤み、いはせて置けば法外千萬、今一言云つて見よ、舌の根を切下けん」蘭丸「チ、ならば手柄に切て見よ」光秀「チ、切て見せう」サア「と兩方が、互に詰寄り、既に斯よと見えたる所、襖あらはに春長飛かよつて光秀が、衿がみ攔んでどうど捻付、春長「やをれ光秀、凡武家の格式は、古實を以て式法を用ふる、過たるは猶及ばざるに若かじとは、古人の詞、院の内使も重ねけれど、皆それの例法あり、中納言殿饗應の膳部、金の瓶器を用ひ、七寶を芥の如く鏤め、法外奔走。此後、主上仙洞の行幸には、何を以てか饗應に叶はんや。其上蘭丸が申は我詞も同然なるに、異變致す慮外者。頬打て蘭丸」「ハア」早く打て「蘭丸ハア」御上意なり」と蘭丸が、腰の鐵扇振上げて、眉間眞向續け打、喰入る要に血は瀧津瀬。是はと斷寄る十次郎、膝にかためて引敷光秀、流るゝ血汐諸共に、眼血走る無念の顔色。春長つくぐ、打守り、春長「いかに光秀、今蘭丸が手を以て春長が折檻、口惜うは思はぬか」と底意を探る大將の、詞に光秀居直つて、光秀「コハ仰とも覺えず、數ならね共武智光秀、君に捧けし我命、骨は挫れ身はずたくに成迎も、大恩ある御主人をお恨申さん様はなし。左は去ながら世の人口、春長こそ鬼の再來、情を知らぬ大將と、譏を殘し給はん事、末代迄お家の瑕瑾、

舊惡を憎む御性質、諸士の恨は小車の、終に御身に報ふといふ、御心の付ざるは、へエ、淺まし
 や悲しやなア。御心を翻され、適仁義の大將と、呼れ給はれ我君」と、或は怒り、或は歎き、
 五臟を絞る血の涙。思ひは千々に十次郎、父の心を察しやり、齒を喰しはる忍び泣、心ぞ思ひや
 られたり。金言耳に逆立つ大將、猶も怒りの聲荒らか、春長「ヤア言はれぬ諫言、推參至極、目
 通り叶はぬ立てうせう。ソレく、蘭丸、武智光秀親子の者門外へ引出させ、早くく」と烈し
 き下知、はつと領掌、蘭丸が、猶豫は如何にときめ付られ、無念重る光秀が、我子を引立て出て
 行く、底意は誰かしら浪の、萬里に羽打つ大鵬や、面目涙十次郎、身は銷氣鳥の片羽がい、父の心
 はしらにぎて、神も佛もなき世かと、身を嘆ちたる忍び音の、胸は暗闇五月闇、せん方涙諸共に
 御門の外へと、三重 出て行く。名にし負ふ、花の都を隣して、時に近江の本城を、跡に見なして
 今爰に、假の舎の上屋敷、千本通りに一構へ、日向守光秀が、出仕の留守は操の方、夫子の武運
 長久を、神に祈をかけまくも、手づから備ふる神酒供物、殊勝に見えて爪はづれ、追は武家の
 奥床し。折から次の襖を開き、出来る武士は武士武智が組下、九野豊後守、年も五十の分別盛り、
 操が前に両手を突き、豊後先以て今日は、林鐘の初日、大内にて氷室の節會、殊更太守光秀
 公、大公儀より饗應司の大役仰付られ、御家の眉目我々迄、大慶至極」と述べれば、操の方取あ

へず、操「夫、光秀殿、十次郎諸共未明よりの御登城、殊に大事は今日のお役目、常々短氣な春
 長様、生れ付いた夫の一徹、何の障りもない様と、案じるは女の常、悲しい時の神佛と、手づか
 らのお供物」豊後「是はく、イヤもう萬事抜目なき光秀公、追付け吉左右上首尾」と、挨拶取々
 なる所へ、殿様の御下城と、知らせの聲に妻操、我子の乙壽諸共に豊後守も座を改め、待つ間
 程なく武智日向守光秀、常に變りし其面色、疊さほりも荒々しく、不興の體に立歸れば、跡に
 隨ひ十次郎、しをくとして座に直る。夫の顔色額の疵、心なうすと操の方、光秀の傍近く、
 鼻申し我夫、常にないお顔持、お氣もじ悪うはござりませぬか、お怪我でもなされたか、どう
 やら氣がかり胸騒ぎ、心がかかり」と尋ねれど、とかう答へもせぬ夫、十次郎顔振上げ、十次郎「今
 日二條の館にて、饗應司を勤むる所、日頃不和なる森の蘭丸、我々へ様々の悪口雜言、そのの
 みならず春長様、以つての外の御怒りにて、蘭丸に仰付られ、アレあの通り、父上の眉間へ疵
 の付程に、殿中でのうち打擲、目通りは叶はぬと、警固の武士に追立られ、無念ながらもおめ
 おめと、顔押し拭ひ歸りし」と、云つとこほす口惜涙、聞くより妻はハアはつと、胸を貫く釘、鏝、
 豊後も俱に拳を握り、咬牙齒ぎし無念の涙。様子立聞く四方天、物をも言はず表の方、駈出
 す裾をしつかと止め、豊後「事を急いたる汝が顔色、仔細ぞあらん」と言はせも立す、四方天「ヤア愚

なり豊後守、主人へ恥辱を與へし素丁稚の蘭丸め、素頭引抜き立歸る、妨けすな」と振解き、行んとするを猶も引止め、豊後「イ、ヤ其憤りは徳忽々々。汝が不骨は主人の誤り、返つてお家の仇とならん、先待たれよ」と支ふる九野、「シヤ面倒な」と勇氣の田島、放せ放さぬ二人が争ひ、光秀聲かけ、光秀「ヤレ待て兩人、身が詞も出さぬ内、立騒いで見苦しい、静まれやつ」と制すれば、物に怍へぬ田島頭、武智が前にぐつと詰かけ、四方天「縦誤り有るにもせよ、丹州近江兩國の太守、殿中での打擲は、我々も俱に恥辱、頼恥を曝さんより、蘭丸めを打て捨て、叶はぬ時は生害と、覺悟極めし四方天、ナ、何故お止なさるとな」光秀「ヤア愚か」。光秀を打たるは私ならぬ主命、スリヤ蘭丸に遺恨はない。元來短慮の御大將、心に叶へば飽迄寵愛、又叶はねばうち打擲、縦命を召さると共、君に捧し我一命、ちつ共惜ます厭はぬ某、我存念も知らずして、息筋はつて尾籠の振舞、静まれ退され」と睨め付る。道理に迫荒者が、行くも行かれず立つたり居たり、勇氣もたゆみ猶豫ふ内、下部「御上使の御入」と下部が聲。光秀不審の眉を皺め、光秀「ハテ心得ず、思ひがけなき上使とは。何にもせよ、女房助は次へ立て、早く」と追立やり、威儀繕うて出迎ふ。案内につれてのつさく、役目を功に肩肘はり、頼も眞赤山與三兵衛上座にむんずと押直り、與三「上意の趣餘の儀にあらず、先達て眞柴久吉、郡三家を退治の爲、中國へ馳向ふ、

急ぎ光秀加勢として、西國へ下り久吉の幕下に屬し、戦功を勵むべし。其功勞によつて、出雲石見の兩國賜はるべき間、今迄下し給はる丹州近江二ヶ國は召上らるる旨城代へ申渡し、急ぎ城を明渡すべしとの嚴命なり」と、いふに人々二度悔り、主従顔を見合せて、暫し詞も口籠る。物に動ぜぬ光秀は、禮儀正しく上使に向ひ、光秀「ハア、台命の趣委細承知仕る、直様是より西國下向、城あけ渡しの用意萬端、家中の諸士へも申渡さん」與三「ホ、早速の領掌神妙々々。一刻の延引は一刻の不忠となる、出陣やら宿がへやら、がらくた道具片付て、はやく城を渡し召され役目は是迄おさらば」と、憎體目禮取混せて、眞綿に針の青聲、蹴立てこそは立歸る。一徹短氣の田嶋頭、四方天「コンサ御主人、今赤山が上意の次第、前後揃はぬ詞のはしく、西國加勢と披露して、實は御身を改易し、自滅をさせんず春長が姦計。良禽は木を見て栖む、不仁非道の尾田春長、義理も忠義も是限り、西伯姬昌は殷を討ち、つひに天下を治めし例、破鏡再び照さぬ道理、今日前に顯はれたり、今隨臣の空虚を考へ、一時に尾田を討亡し、天下に覇たる功を上げ、名を千歳に留めんは、サ、いかに」と急立つ田島。やと默然たる日向守。始終こなたに立聞く操、襖あらはに走出で、夫の傍へ差寄て、褒詞「忠義一途の田嶋頭、さらく無理とは思はねど、勿體ない我君を弑して四海を奪ふとは、聞くもうるさい穢らはしい。罪は目前美濃

尾張、主を弑して一日も、安穩ならぬ天の責、お年寄られし母御様、いと可愛子供迄俱に悪名とらするが、夫が本意か情ない。妻子不使と思すなら、御身全う月と日の、曇らぬ鏡武士の、操を立てて給はれ」と、わつつ口説いつ理を責めて、夫を思ふ貞心の、思ひは千筋百筋の苧綿を亂す憂涙、止めかねてぞ見えにける。元來仁義の豊後守、光秀に打向ひ、豊後文武二道の我君に、お諫め申は憚りなれ共、和漢の書籍に記せし通り、反逆謀反の輩が、本意を達せし例はなし。世に秀たる光秀公、高木風の俗語に等しく、皆佞人のなす所、時節を待つて誤りなき、申開きの手段はさまぐ。上使に立し赤山と、君が五音を考ふるに、水火既濟の卦に當つて、西施國を傾くる不吉の占、一旦勝利有りと雖も、日あらずして災生じ、終に全からざる前表たゞ幾重にも思ひ止まり下されよ」と、事を分けたる諫の詞、いへども兎角の返答なく、光秀「ム、心なき人は何とも言はど言へ、身をも惜しまじ名をも惜しませぬ」豊後「スリヤいよく御謀反の思、立てござるよな」と、言はせもあへず豊後が首、討つてかたむる謀叛の首途、光秀「ハ、適々、此上は軍の手配、ホ、いで出陣の用意をせよ」「ハア」所存の程こそ。

同二日の段

下郎「何と三助、暑くて堪へられぬぢやないかい」下郎「ア、サ此下郎には何が成る、朝疾くから手桶の切り水、暮れ方も又此様に、汗水に成てのはき掃除、俺も後の世には大將に生れて來べいと思ふが、如何であらうなア」下郎「されば此本能寺を假殿にしてござる春長様は、前生は鬼だといへば、奴が大將にならぬ事も有まいわさ」と、いへば傍から珍内が、珍内「ハテ扱二人ながら何を言ふぞい、死での先は片便り、奴から大將に生きながらなられた真柴殿、それを知りつつ、ほんにやれく來芝の事は由男にして、山村程今をため、里虹者ぢやといはると市紅が肝心だ」と、どつと笑ひの折こそあれ、下郎「ア、コリヤく、あれに見ゆる御先供、南無三、春忠様の御入だ」と、猫に鼠の奴共、己が部屋へと逃て入る。程なく近付く鉄乗物、數多の武士が前後を圍ひ、築地御門に昇据うれば、斯くと知らせに森の蘭丸、禮儀正しく出向ひ、蘭丸「阿野の御局御苦勞に存じ奉る」と、詞の内に乗物の、戸を開かせて阿野の局、三法師君を抱まらせ、しづと立出で、局「春忠様の御名代と此君の御入故、祖父君春長公より御迎ひとして、自が守りまして参りしに、殊なう御機嫌も宜しく、お嬉しう存じまする」とのたまひければ、蘭丸「ホ、それは一段、さぞ祖父君にもお待かね、いざさせ給へ」と蘭丸が、案内につれて付くくも、門内さして三重入にけり。ウツヒ鹿の音蟲の音もかれくの契、あらよしなや、形見の扇よりく、

猶裏表ある物は、人心なりけるぞや。あふぎとは空言や、あはでぞ戀はそふものをく。春長「局が一曲出來たく。悴春忠が名代孫殿へ御馳走に、何と面白いか。サ、つけく」と大盃、はつと心得しのぶがお酌、「蘭丸へさす所なれ共、阿野の局が舞の一手、勞を謝する其爲に、局へ盃さし申す」局「是はく不束なる一奏、御意に叶うて此上もなき身の冥加」と、言ひつゝ局は御盃、少し引受け差置けば、春長公笑壺に入り、春長「ナニ蘭丸、局が間を仕れ」と、重き御説も、諂なく、蘭丸「コハ仰に候へ共、一滴も及ばぬ某、此義は偏に御高免を」春長「ハテ扱吞ぬ所を吞すが興、香は汝が望次第」蘭丸「すりや御香を下されうとな」春長「ホ、六十餘州を手に握る此春長、サ、何なり共望め、く」蘭丸「ハア然らば何とぞ此蘭丸に、軍勢を四五千計下し給はらば有難からん」と相述べ、春長「ム、心得ぬ汝が望、もし軍勢を與へなば」蘭丸「さん候、丹州龜山へ押寄せ、只一戦に光秀が首討取つて、君の災を避け申さん」春長「成程尤なる願なれ共、いらざる心配無用々々。左様な事に骨折らすと、早く一盞を傾けて、暑を凌ぐが身の養生」ウタヒ「飛立計り有明の、夜晝となき樂しみの、春長「榮花にも榮耀にも、此春長に及ばぬく」蘭丸「我君の御説には候へ共、安土の無念を散ぜんと一度は謀叛の旗を上げ、窮鼠却て御身の大事」春長「ア遺は若氣、北國には柴田勝家、西國には眞柴久吉、龍に翼の尾田春長」局「君の御説は去事ながら、蘭丸殿の詞の如

く油斷大敵」春長「ハテサテ局迄が同じ様にいらざる此場の長詮議、御客人が嘸ふらく眠り、身もほつと退屈、イデー一睡の夢の間の、契りはいざ」と戯れて、座を立給へば阿野の局、若君誘ひしづくくと帳臺深く入給ふ。跡にうつとり蘭丸が、心一つにとつ置つ、思ひは同じ女氣の、人目しのぶが寄添ひて、しのぶ「申し蘭丸様、もう何時でござりませうなア」蘭丸「これはしのぶ殿、そもじはまだ奥へ行かずか」しのぶ「アイ」蘭丸「ハテ扱それは不埒千萬、御用もあらん早奥へ」と、いふ顔じつと打詠め、しのぶ「ほんにまあ女の心と男とは、それ程迄違ふものか。只齋藤藏之助殿にお頼み申して、春長様の奥勤も、あなたのお傍に居たいばかり。今更いふも恥かしながら、去年の初春洛東の、地主のお庭の花盛り、妣共誘はれ、願ひかけまく初戀の、色も香もある殿御ぶり、觀音様のお仲立、互の胸の下帯も、とけて嬉しい新枕、變るまいぞのお詞が、直に心の誓紙ごと、片時忘れぬ女房が、お傍に居るがお厭なら、いつそ手にかけ給はれ」と、ひんと拗木の絲櫻、花も亂るゝ風情なり。さしにも猛き蘭丸も、心の外の曲者に、取擗がれて背撫さすり、蘭丸「イヤもう何事なう申せしが、お心に障らば眞平々々。百萬の強敵にもびくともせぬ某が、斯の通り」と手をつけば、しのぶ「エ、又人を術ながらすのかいなア。春長様も大方に、班女が閨のお睦言、お局様の取楯で、出船の相伴、サア、ござんせ」と手を取れば、

蘭丸「ハテ扱たしなみや。人目を忍ぶ二人が中、殊に今宵は君の宿直又の首尾を」と振切るを、無理に引立て奥の間へ、入やいるさの月影に、しのぶの亂れみだれあふ、わりなき夢や結ぶらん。早更渡る夏の夜の、そよ吹く風も物凄く、寐られぬ儘に御大將、手づから障子押開き、何心なく茂みの方、見やり給へばさはくくと、驚き騒ぐ埒の鳥、春長「ハテ訝かしや、まだ明やらぬ夏の夜に、庭木を離れ騒ぐ群鳥、合點行かじ」ときつと目を付け、怪み給ふ時しもあれ、遠音に響く鐘太鼓。春長つよ立ち耳そば立、春長「アレく次第に近付く人馬の物音、宿直の者はあらざるか、急ぎ物見を仕れ」と仰の下より阿野の局、長刀かい込み走出で、局「君の大事に候ぞや、蘭丸殿は何所にある、早く物見を致されよ、妾も俱に」と表の方、呼びくかけり行く。聞くに蘭丸一間より飛で出れば春長聲かけ、春長「ヤアく蘭丸、反逆有と覺えたり、急ぎ物見を仕れ」と、上意にはつと蘭丸は、振返り見る廊下の高欄、「是幸の物見ぞ」といふより早く駈上り、四方を急度打見やり、蘭丸「物の黑白はわからねど、此本能寺を目ざし押寄するは、察する所武智光秀」春長「スリヤ光秀が反逆とな。今こそ後悔汝が諫、聞入れざるも傾むく運命。只此上は防の用意」蘭丸「ハア委細承知仕る。が縦一致に防共院内僅三百餘人。思へばく主君と俱に」春長「蘭丸」蘭丸「我君様、チエ、口惜や」と主従が、怒りの齒がみ逆立つ髪、無念涙の折からに、表の方よ

り森の力丸、廣庭に大息つき、カ丸「御油斷あるな兄者人、武智光秀我君に、多年の恨を散せんと、手勢選つて四千餘騎、左馬五郎を始とし、或は齋藤藏之助築地間近く押寄せて候」と、いふ間もあらず蘭丸は、其儘ひらりと、飛下りて、蘭丸「我君には恐れながら防ぎ矢の御用意有つて然るべし。イデ某が彼處に向ひ、一當あてて眠りを覺さん。力丸來れ」と兄弟は、飛ぶが如くに駈行く。跡打見やり春長公、春長「この上は防ぎの一矢、まづ差當つて一大事は三法師。ヤアく宗祇、若を誘ひ早くく御誂の下にかひなくしく、しのぶ諸共茶道の宗祇、若君抱き參らせて、足もわなく胸振ひ。しのぶも俱に狼狽付く所へ、多勢を切抜け阿野の局、其身は數ヶ所の痛手ながら、血に染む長刀かい込で心も強に立戻り、局「申しく我君様、最早敵は込入て候へば、君に代つて一軍、御身を遁れ下さるべし」と、口には言へど御名殘、涙彌増計なり。春長「ヤア愚愚、なまなか身を遁れんと、却つて名もなき奴原に、首を渡さば死後の恥辱。汝は我に成かはり、宗祇引連れ三法師を、何とぞ守護し落延びて、此旗諸共久吉が手に渡し、我存念を晴させよ、猶豫は却つて不忠の至り」と、仰にわつと泣崩れ、局「たとへ不忠になるとも、君の御最期外になし、何と此儘落られう、此儀はお赦し下さりませ。是を思へば自が、宵の酒宴の其時に、班女が閨の嘆言、其一さしの扇とは、別れを告げし前兆かと、思ひ廻せばいと猶、悲しいわいの」

とどうと伏し、歎沈めばお道理と、心を汲んで諸袖を、絞るしのぶが俱涙、泣音を添ふる計なり。數多の切首片手に引提げ庭先へ、立歸つたる森の蘭丸、それと見るより春長公、春長「ホ、今に始めぬ汝が働き。シテく、様子は如何にくく」蘭丸「されば候、二條の御所へは明智光安立向ひ、當手の寄せ手は左馬五郎光俊、采配取て嚴しき下知、なれ共味方は必死の勇者、御覽の如く首討取り、一泡吹かせ候へ共、始終の勝利は」春長「成程々々、只此上は潔く、死出三途も主從俱に。サア今聞く通り我覺悟、早く此場を落延ぬか、但し三世の縁切うや」局「サア其儀はなア」春長「縁切が悲しくば、一時も早く落延よ」蘭丸「コレサお局、君の先途を見届くるは此蘭丸、片時急ぎ裏門より。宗祇坊は何を茫然」宗祇「ナット合點。イヤもう最前から落ちたうてく、氣は上つり。コレくしのぶ殿もお供の用意」といへど遺に忍夫、云ひたい事も面伏、萎れ泣くく立上れば、蘭丸聲かけ、蘭丸「しのぶは君の御供叶はぬ」と聞て恟り驚くしのぶ、しのぶ「エ、そりや何故」蘭丸「ホ、汝にお咎なけれ共、そちが兄齋藤藏之助、光秀に一味の反逆、敵の末は根を斷て葉を枯す、命を助け其儘歸すは是迄、サア是迄君への宮仕」と明て言はねど妹と脊の、中を隔の垣となる、しのぶが憂身詮方も、涙ながらに用意の懐劍、咽にがばと突立れば、コハ何故と驚く人々、大將春長感じ給ひ、春長「ホ、女ながらも適の生害、兄とひとつでない潔白、今日只今春長が仲

人し、蘭丸が宿の妻、心残さず成佛せよ」と、仰に手負蘭丸も、はつと計に有難涙、顔に紅葉の唐紅、血汐に染る兩の手を、合すも二世の名残ごと、物言ひたけに夫の方、御大將を伏拜み、笑顔顔を沙婆の置土産、あへなく息は絶えにけり。歎を外に御大將、勇を付んと、春長「ヤアく蘭丸、我は是にて討手を引受け、此場を去らず討死せん。汝は是より馳向ひ、敵の奴原一泡吹かせ、名を萬天に輝かせよ」と勇め給へば、蘭丸「ハアくハ、ハ、ハ、ハ、仰にや及ぶべき、たとへ光秀何萬騎にて寄する共、片端撫切り捲立て、君の御供仕らん。早おさらば」と立上れば、涙を拭ひ宗祇坊、局を諫め勸むれば、是非も涙に袖の浪、漂ひながら若君を、宗祇が背に確乎と、是ぞあふぎの憂別れ、見かへる名残見送る名残、又立戻るを蘭丸が、中を隔つる鯨波、早亂れ入る諸軍勢、切立て確立て女武者、其名も高く假名書の、筆に留めて末の世の、美談とこそは 三重成にける。寺中は合戦真最中、力丸蘭丸一同に、一進一退離散して、或は討たれ或は討ち、續く新手も有らばこそ、堅甲利兵の大軍を防ぎ戦ひ、流る汗と湧出る血汐、唐紅に水くよる、龍田の川に楓葉の、落て流ると如くなり。寄手の從將安田作兵衛、春長を討取らんと、堀際にさし寄れど、味方の勢に隔られ、たやすく内へ寄付かれず。得たりと鑊を力杖、えいと一撥高堀に、飛上りたる早業早速、目覺かりける次第なり。さしも名高き靈場も、修羅の蒼と鳴る鐘の、天地に響く陣

太鼓、亂調に打立てく、先に進みし田島の頭、手勢引具し一同に、喚き叫んで攻かくれば、春長公一越調、春長「反逆光秀は何所に有る、主に背く天罰思ひ知らせて呉んず」と、弓杖ついて、響る大音、さしも勇ある武智勢、恐れて思はず進みかね、避易際に差詰引詰め、射給ふ矢先に先手の軍兵、はたくくと射斃され、仇矢は更になかりける。此虚に乗て坊丸丸、鎧を捻つて八方へ、突立て薙立て阿修羅の如く、廣庭さして追て行く。客殿には春長主従、膝を並べてどつかと坐し、力丸無念の齒がみをなし、カ丸エ、口惜や、往昔天文年中より、今天正十年迄、四海の内を横行して、武威を以て天下の兵亂を切しづめ、民の塗炭の中に救ひ、四方の敵國君の英名を、鬼神の如く恐れふるひ、正二位右大臣に昇進し、大業既に成就せしに、逆臣惟任が爲に空しくならせ給ふとは、天魔の所爲か口惜や」と、血汐に注ぐ血の涙、止めかねたる計なり。春長一言の詞もなく、御佩刀を脇腹へ、がばと突立て引廻す。俱に冥途の御供と、カ丸坊丸殉死の切腹、無慙といふも餘りある、御身の果ぞ 三重哀なり。

同三日の段

董阜は漢室を焼捨て、伯知は水を以て趙を浸す、例を爰に眞柴が軍師 名に高松の城廓も、水死

の合戦、強勇も手に汗握る計なり。武家の家でも 姦き妣共は寄擧り、妣「何とあけは、毎日々々降る雨で、水の増るが癩の種、是といふも尾田勢の皆仕事、中でも憎いは眞柴とやら松葉とやら、突さがしてやりたいわいなう」あけは「サ、コレく、其突序にお痛しいは、妹御の玉露様、浦邊山三郎様に強い惚様、大方埒の明く時分に成つて、山三郎様の爺御奎之進様、ア、林丈左衛門めにお討れなされた故、此程はふらくと戀病ひ」妣「ヲ、左様かいなう、此方も覺の有る事、どうぞ首尾して上げましたい」と、遠柔しき女の情、打連れ一間へ入にける。思ひ内に有れば、其色眼中にすよむとかや。父の最期に亂れ髪、無念の仇を角額、浦邊山三郎利氏は、主の留守を窺うて、林を一太刀恨んと、屋敷へ入込む生死の境。斯と白齒の玉露が、出合頭に見合す顔、はつと驚き引返す、袂に縋り、玉露「コレ待て給へ浦邊様、お前は深いお望が、有てのお越と、見たに違はぬ形かたち、其お姿に戀ひこがれ、送る千束の返事さへ、ないは無情いお心ぞ。せめて一夜の添臥を、赦して給へ」と取付いて、じつと締めたる手の内に、心餘つて見えにける。山三「コレく、聲が高い。推量の上は包むに及ばず、隠まい置かるゝ敵丈左衛門、何卒今日中に手引して、勝負を遂げさせ下さらば、此方の心も無息にせじ。サ、何と」と急いたる面色、玉露も胸を据ゑ、玉露「成程々々、わたしが爲にも舅御の敵、折を見合せアノ垣越に御案内申ましょ」山三「ホ、其詞

に違ひなくば、まだ云聞す仔細も有り、此方の部屋へ」玉露「そんならかう」と手を取て、顔は上氣にちる花の、玉露姫は情の露、濡に彼所へ入りける。折もこそ有れ立歸る、館の主清水長左衛門宗治、智勇を兼し其骨柄、跡に従ふ女房は、まだ十九二十二つ三つ、雪の白粉やり梅が、紅花色添ふ嬰子を、抱き痛はり立歸る。宗治は眉をしわめ、宗治「ヤイヤり梅、晩春の末より三家へ人質、悴諸共遣はせし處、いまだ合戦の勝利も決せず、敵に圍まれたる此城中へ、歸されしは仔細があらう。何とく」紅梅「ハア、尤のお尋、此度三家御加勢に向ひ給ふといへ共、手を空しくして日を送り、水の手一つ切る事叶はず、無念さは夫逆も同じ事、もし討死致されては大事と成る、手立を以て一時の合戦は遠からじ。それ迄は英氣を養ひ置かるゝ様、憂を晴すはコレ此若、随分々々やり梅も、心を付けよとはけしき御説。此子の顔も見せたさ見たさ」と盥に受持つやり梅が、色ぞ籠りて見えにける。義に張詰し宗治は、指折りて日を數へ 宗治「今日は早六月三日、皐月の末より敵方に、大變有る凶星を見極め置きつるに、土俵を突上優長なる仕方、間者を以て敵方の様子、聞出さんと思へ共、是ぞといふ謀なく、空しく入水する時は、後々諸人の物笑ひ、降参するは家名の恥辱、是迄度々の合戦に、不覺をとらぬ宗治が、猿冠者如きの計略、斯口惜き籠城も、天より我を責給ふか」何とせんかとせんと、名に秀たる武士も、傾く運と突息も、天を睨んで

居たりける。慌しく庭先へ、士卒一人駈來り、士卒「何か談する筋ありと、郡家よりの使として、安德寺和尚只今本陣へ参著せり。殿にも早く御越」と云捨て家來は引返す。長左「ム、汝が歸城の上安德寺の使の様子聞捨難し。是より諸士に對面致し、事の仔細を申聞ん。其方は郡より預り有る丈左衛門、囚人同前なれば、萬事心を付よ。サ行けく」ヤリ梅「心得ました」と立上り、奥と表へ引別れ、二の丸さして出て行く。雨吹拂ふ松風の、夏山籠し蟲の音を、しるべに漂ふ浦傳ひ振も小稜も甲斐々々しく、夫を導く健氣の玉露、花も木草も落花狼藉、互に切合ふ穂先と穂先、汗に浸する計なり。いらつて切込む太刀先を、しつかと受止め丈左衛門、丈左「ヤア小賢い浦邊山三、儂が親の空之進、評議の席にて某に悪口吐し入耳蟲、討て捨てたを恨に思ひ、刃向立は及ばぬ事」山三「ヤアぬかしたり丈左衛門、さいふ儂は、冠山の落城を外に見て、當城へ逃込し人畜生、父の怨旁の恨、思ひ知れよ」と刎かへす、刃尖き雙方が、受つ流しつ烈しき争ひ、見る玉露は心も空、山三が念力通じけん、林は刀打落され、逃んとするを切伏せく、父の敵覺えよと、のつ懸つてとどめの刀、首引切つて大地に打付け、山三「ハ、ア嬉しやく、コレ玉露殿、禮は未來で」おさらばと、腹搔切らんとする所、戻りかよりし長左衛門、やり梅諸共走出で、宗治「ヤレ死るとは狼狽者、赦しもなき敵を討ちし言譯の切腹ならば、某が計ひを用ひ、まさかの時の討死こそ武士の道。

城外の水を潜り、久吉の陣所へ馳込、偽りならざる次第を頼み、隠まひ貰ふが術の第一、敵の空
虚變の次第、相圖を以て知らされよ。折も有らば眞柴を討取り、名を末代に残されよ。サ、
一時も早うくと急き立つ清水、山三「ハア、コハ有難し、武士の數にも入べき大功、命を的に
仕果せて立歸らん」と、駈出す。やり梅「ヤレ山三様お待なされ、玉露様とのわりなき中、最前ちらり
と、ナ、イヤ申し宗治様、お妹御と浦邊様との二世の御縁」宗治「ホ、好き合うた二人が中、門出を
祝する」扇も時の島臺土器、松は元來常磐木の、繪にはあらざる松竹梅、末廣びると夫婦の固め」
山三「ハア、重々の御惠、玉露殿も随分無事で」玉露「お前もお怪我のない様に」と、立派に言へど
なま中に、馴し枕の糾れ髪、離れがたなき兩人を、わざと制する宗治夫婦、扇屏風やあふぎの別
れ、心定めて城外へ、飛ぶが如くに三馬、駈り行く。囊沙背水の謀を廻らし、見ぬ唐土の元帥も舌を
巻べき奇代の軍術、水嵩増さる大河の流、堰止たる土俵岩石、大木運ぶ地車の、木やり音頭も跛
馬、揃はぬ肩も降參の、空腹武士と知られける。加藤は土手の高みに上り、正清「ヤア者共、汝
等はことごとく降參の者共なるに、此度の勤功、大將始め某迄満足せり。此合戦終りなば、急度御
扶持有べきぞよ。ソレ兵糧を遣ひ終らば、暫時は休息致すべし」と、下知を傳ふる其内に、向ふに
何か騒ぎし人聲、正清きつと打詠め、正清「ハテ合點の行かぬ、高松の城外に怪しき取合ひ、何に

もせよ心得ず」と瞬もせず見渡す向ふに、我組止んと數多の軍兵、小船に打乗り、右往左往に追廻
せば、山三郎は水中を、潜つつ抜つ働けば、鵜よりも早き水練水魚、そこよ爰よと組子共、うろ付
中に舳先を持ち、えいやうんと打返せば、水は漫々小船の組子、浪の藻屑と成りにける。此有様に
残りの兵船、進みかねてぞ見えにけり。此方の岸には正清が、何者なるぞ心得ずと、手ぐすね引き
引き待つ所へ、血氣の浦邊は抜手を切り、忠孝二つを額に當て、飛鳥の如く遙の堤一聲諸共飛上れ
ば、何者なるぞと取巻く雜兵目もかけず、加藤が前に兩手を突き、山三「某は郡家の家臣浦邊山三
郎利氏と申者、高松の城内に於て親の敵を討取り、立退んとせし所、城中より討手かより手話の
難儀、何卒武士のお情に、御隠まい下さらば、生々世々の御厚恩」と、敬ひ入てぞ願ひける。加藤正
清聲を荒げ、正清「ヤア紛らはしき願の筋、誠親の敵を討たば、武門の譽と郡家より、恩賞も有べき
筈、返つて搦捕んとする高松勢、紛らはしき御邊の偽り、眞直に申されよ」と、疑ふ詞に、山三「ハ、
ア御尤なる御仰、某が討取し親の敵と申は、冠の城を拔出し、林丈左衛門と申者、我父空之進と
聊の論により、父を欺し討に討たる奴、其無念止事を得ず、何とぞ怨を報せんと、主人へ敵討を願
へ共、軍中とて取あへなく、剩へ敵丈左衛門は、清水宗治殿に預けとなれば心に任せず、空しく月
日を送る内、此度の合戦に付、久吉の計略にて、一城諸共兎の如く、水底の藻屑とならんは治定、

然れば父の鬱憤を散ぜん時節なしと、透を窺ひ本望は達したれ共、御赦しなき敵討、いかなる咎あらんも知れず。惜むべき命にはあらね共、亡兩親の跡をも營み、其上にて切腹致す我存念。暫しが程の御惠、御聞届下さらば、忘れ置かじ」と手を掲て、頼めば正清嬌乎と笑ひ、正清、ホ、事明白なる汝が願ひ、尤其理なきにはあらね共、敵々たる此時節、諸卒の疑念も如何なり。萬事は主人の賢慮に有らん。日も早西に傾けば、イザ同道」と正清が、深き心の計らひや、士卒來れと夕映の、下知の詞にハ、はつと、立上れども内心は、久吉討ん血氣の若者、毒蛇の口の水筋を、伴ひてこそ行過ぐる。向ふ遙に漕渡る、主は誰共白浪を、振と衣の戀無常、急ぐ船路や行く空も、浮世なりける次第なり。

同四日の段

東魚來つて四海を呑む、西鳥來つて東魚を喰ひ、四海既に穩ならざる戦場の、地の理を窺ふ山傳ひ、近習召連れ隆景は、しづく谷間に立休らひ、隆景「ヤア、此度の合戦誠に武門の晴軍、郡の枝城尾田が爲に悉く落城に及びし上、軍慮に賢き清水が城廓、久吉が謀に乗せられ、入水と成たる高松の味方を助ん其爲に、遙々此土に陣を取れ共、敵の要害強くして、味方を救ん術な

く、三家の心もまうくたるに、三澤久代が非道の企、隆景が見察違はず白狀の上、國元へはつ返し、禁籠申付し上は、敵方へ裏切なさん妨なければ、先此山の頂に柵を結び敵陣を見つもあり、明日中には攻かより、敵の勇氣を試んは、サア、いかに」近習「ハ、仰迄も候はず、我共は先手を乞請け、雌雄の合戦、一命は風前の塵義は金鐵、千變萬化とかけ破り、さしも名を得し久吉が、頭を取んな隣く内、御心安く思召せ」と實勇しく見えにける。遙向ふに人音は、何者成るかと思ゆる内、現世未來を一寺に納め、大地の僧頭安德寺、清水が妹玉露姫、伴ひ歩む一本の影、それと見るより手をつかへ、安德寺「ハア隆景公には御健勝の體恐悦至極。拙僧今日清水長左衛門様へ御陣見舞に参りし處、妹御玉露様を以て何か密談の御使、味方の諸士にも心置く籠城、幸なる安德寺誘ひくれよとの御頼、委しき仔細は存せね共、是迄同道仕る」と、申上れば玉露も、面はゆけなる顔を上げ、玉露「女のあらぬ事ながら、敵の陣所へ使の役、隆景様の御賢慮を、伺ひました其上と、兄上の差圖故、安德寺様諸共に、御見舞かたぐ参りし」と、差出す文箱小梅川、手に取上げて讀下し、隆景「ム、一旦和議を相調へ、事を計らん計略有と、先達て申遣はせし所、此使に惠瓊老、清水が妹玉露を、差越んとは面白し。去ながら大寺の住職、敵陣への使者とは憚り有れど、他聞を恐れる密事の大役、足下ならでは叶ひ難し。先々陣屋へ入らせられ、

暫時の休息あるべし」と、詞の折もこなたなる、茂みの枝に飛違ふ、數多の鳩が争ふ餌ばみ、隆景屹度打詠め、隆景「ハアあれ見よ、只今鳥類の餌ばみの争ひ、思ひ合すは昨夜の夢、我陣中へ飛來る村鳥、色めきたる草葉を嚼へ、塵塚山をなしたると見えて夢散ぜしに、目前人を恐れず餌による鳩の嘴先にて、責つよきたるアレあの蔓物、瓜は春長の紋所、三つ五つは五體を表し、其身を包む衣服こそ敵の城廓、鳩は源家の臣鳥、我は清和の末孫たり。此蔓物の瓜によりし、尾田春長を一戦に、討取べき神の告か、但しは既に變ある告か。ハテ怪しや」と明慮の大將、尾田を討たる光秀が、京都の大變神鳩の、不思議は後にぞ知られたり。安徳寺進出で、安徳寺「ハ、智人の仰至極せり。唐土周の世に當つて、赤色の鳥武王の陣に泊る、人々怪しみ迷ふといへども、大公望是を吉なりと悦す。果して其詞違はず、周武の正に天下と成る。君に眞其如く、今陣前に鳩の集りきたるといふは常家の吉瑞、愚僧もそぐはぬ戦場の、役目もやはり此姿、赤色ならざる此衣の、頭ごかしに取入つて、強氣の尾田方取挫ぐも、國家の御爲天下の爲、玉露様にも御油斷有るな」玉露「ホ、御念に及ばぬお僧様、わたしも名にあふ清水が妹、見馴れ聞なれ軍學軍術、夫に迫り力を合せ、味方の怒り兄様の、無念を晴らすは敵の大將久吉が、首討取て立歸らん、やはか仕損じ申べき」と、詞涼しき玉露が、怯める色なき武家育、さも勇しく見えにける。かよる所

へ味方の郎等片山藤太、水に浸せる惣身の、汗諸共に押拭ひ、藤太「仰の如く水中を潜つて敵の陣所に近付き、事の様子を窺ふ處、猶も流るゝ水筋を、堰き切る手當の石槽、或は土俵蛇籠の用意、是を支ふる清水が郎等、忍び入て水筋を、切らんとあせれど敵陣の、備は名に負ふ加藤正清、近寄る軍兵事共せず、右と左に薙立て追立て切伏られ、水の哀れと流行く清水が勢の敗軍は、目も當てられぬ無慚の有様、斯くて空しく時日を送らば、底の水層と成行く城兵、御賢慮有て然るべし」と、息繼ぎあへず訴ふれば、隆景は打點頭き、隆景「かく迄敵に取切られ、拔駈けして高名せんとは、自殺を招く清水が城兵、只此上は惠瓊老、宗治と申談せし如く、玉露諸共久吉が陣所へ立越え、兩家和睦の計略こそ肝要ならん」と、隆景が詞にはつと頭を下け、安徳寺「修羅の巷へ出家の身の入べき筈はなけれ共、危急を救ふも教の道、玉露様には御用意有」と勇み進めば、隆景「神妙、兩將へも此趣具に某言上せん。イザ兩人も本陣へ、同道申さん來られよ」と物に馴れたる小梅川、其名薫し武士の、刃切れ尖き直焼刃、鍛ひに鍛ふ隆景が、譽れは世々に顯はせり。

同五日の段

聞鱗山揮一同して、風雨烈しき中國の、物騒しき蛙が鼻、久吉公の陣館、亂杭高垣幕結ひ廻し、

兵具犇と竝べしは、事嚴重に見えにける。太郎兵衛治郎兵衛と呼集め、落葉枯枝を掻き寄せて、濕氣を拂ふ雑兵共、一つ所に寄集り、雑兵何と斯した所は、かんしやうゆうの煙と出かけた」
 雑兵「チ、サク、今にも合戦というたら、戦場の切合、集銭出しの呑喰、軍場の小商人の手目上させてやらうもの、何をいうても長の籠城、我身で我身の儘ならぬ」と、重き口から空ぞめき、珍紛勘六智慧あり顔、雑兵「へ、尤なり勇しよ、某進も戦場に出立ちなば、彼唐土のあほす東六が奇計を以て、鎗先尖き餅田樂、串ざしながら掴喰、鬼殺しと見るならば、あたり次第に呑乾て、代物といふ大敵には喰逃吞逝、早いが勝」と惣々が、咄しの耳を突抜く鐘、雑兵「スリヤこそ軍が始まる」と、達者な物は口計、足もしどろに立て行く。スハ事こそと加藤正清、一間を出る庭先へ、雑兵一人駈來り、雑兵「只今遠見いたせし處、怪しの兩人陣中さして參るよし、引捉へて詮議に及び候處、郡高松兩城より使者として、女一人僧一人。通しませうや」と伺へば、正清ホホ使者と有れば捨も置れず、案内致せ」と追立やり、待つ間程なく取次に、従ひ來る葉月の使者は二人の品形、振の袂に名香の、高き寺僧諸共に、使者の座にこそ著きにける。正清威儀を繕ひて、正清「是はく郡高松兩城よりの使と有て珍事の御兩人、お使者の趣承はり、加藤取次仕らん、様子いかど」と正清が、尋ねに受持つ玉露が、玉露「ハア、正清様とやら、お取次の段御苦勞に

存じます、自らは高松の城將清水宗治が使玉露と申者、清水申越るよ趣は、此方の家中浦邊山三郎と申すお若衆様、サア其山三郎不慮に城内を抜出たる不忠者、御隠の由承はり、早々使者を以て所望に及ぶと雖も、御歸し下されざる段、我々共不審暗れず。もしや使の不念不骨なる事ばし有て、武士の意地を立ぬき御歸し下されんも計り難し、此度は汝參つて御機嫌の窺ひ、同道して立歸れと有る使の口上、御前宜しく御披露」と、詞のあやも玉露が、詳に相述る。安徳寺詞を正し、安徳「玉露の申さると通り、浦邊山三郎は郡の家人同前故、此方よりも使を立つると雖も、御承引なきによつて、頭役に愚僧が使、兎にも角にも貴所の御執成偏に頼み存する」と、頭を下れば加藤正清、正清「何事かと存せしに、浦邊に付て昨日といひ今日といひ、何か事も有さうなる三家の胸中、軍は脇へ取置て、福原梶田の勇將等馬を出さるとは、此虎之助一切合點參らね共、女儀の使出家たる御方を、追返すも大人氣なし。取次は致し申さんが暫時隙入事も有らん。あれなら一間に相待れよ」「然らば後刻」と式禮目禮、玉露引連れ安徳寺、左右へこそは別れ行く。朱明の空も一面の、雲かけ隔つ浮草の、浪に漂ふ山三郎、又降雨に足音の、紛れ出るもしめくと、いと憂さをや重ぬらん。後の此方に玉露が、物音窺ひ立出る襖もそつと人目の關、盡ぬ縁の顔と顔、なうなつかしの山三様、御身にお怪我はなかりしかと、縫付いたる振袖の、竝ぶ翼や連理の

縁、妹脊わりなく見えにける。山三「是は思ひがけもなき玉露殿、何故爰へは來られしな」玉露「サ
 イナ、此城中へ入込しも、兄様の深き御思案、お前に逢うて力を合せ、眞柴を討てと吳々の仰、
 首尾能く仕果せ立歸らば、誰憚らぬ夫婦中、手柄を見せて下さんせ」と、夫頼みの女房は、胸
 に遣瀬ぞなかりける。山三「ホ、我も矢竹とはやれども、一かたならぬ名大將、猿冠者の猿智慧
 と、聞きしに違ふ眞柴久吉、此軍配に我々式が及ばんや。所詮すごとく高松殿へは歸られず、清
 水殿への申譯、只今腹切り相果る。其方は立歸り此通り、傳へて給べ」さらばと計柄に手を、か
 くる夫に繩付き、玉露「マア待つて下さんせ、姉御前の身で敵城へ、お使者に來るも何故ぞ、お
 前に逢ひたさ顔見たさ、死なば一所と語らひし、私を振捨て死なうとは、聞えぬわいな胴欲な、わ
 たしを先へ手にかけて、殺してやいの我夫」と、命惜まぬ武家育、涙色めく婉戀の、袂は戀の淵
 ならん。涙隠して山三郎、山三「ヤアいらざる縁言嗜まれよ。敵へ漏ては互の恥辱、そこ放され
 よ」と突き退る。玉露「イヤくくくわたしも俱に」と争ふ後、久吉「ヤレ早まるな」と聲をかけ、
 立出る眞柴筑前守久吉、久吉「高松より使者に來りし玉露へ、山三郎を返し與ふる。又浦邊へは
 此書面、久吉が心を込めし清水殿への送り物、此役目仕果せなば拔群の高名手柄、早々小船に
 て歸城せよ」と、差出し給ふ情の賜、其文章は知らね共、一先城へ立歸り、其上生死を決せんと、

心定めて押し戴き、足早にこそ駈出づれば、夫の跡に引添うて、命の親の久吉様と、悦び足も地
 に付かず、飛が如くに立歸る。又も聞ゆる陣鐘につれて駈來る女武者、金石ならねど湯王鏝萬
 葉を亂し都より、夜を日に繼たる阿野の局、局「久吉公に御見參」と支へる組子事共せず、廣庭
 傳ひ歩みくる。久吉「ヤア者共、某に逢んと有る女武者、曲者なり共何程の事やあらん、對面して
 取らせんず。者共引け」と御下知の、聲聞取て阿野の局、局「ヤ、久吉殿か」といふを押へて四邊を
 見廻し、久吉「音高しく、御自分の形相一方ならず、一大事の注進ならば、敵へ漏ては味方の非
 運、心を付て物語られよ」腹帯確乎と、即座の氣付。久吉「サ、サ、様子は如何、何とく」局「ハ
 ア、されば候、春長公には安土を出立ましく、都本能寺に入らせ給ひ、中國加勢の御心配、
 諸軍を催す時こそ有れ、逆臣武智が夜討の企」久吉「フウ何、光秀が謀叛とや。シテく勝利は如
 何にく」局「ハア、明れば二日子の下刻、水さへ音なき眞の闇、早洛陽に亂入り、夢驚かす俄
 の戰場、太刀よ具足も乏しき寺内、數萬の敵は甲冑に、身を固めたる小手脚當、味方は薄衣綾
 錦、濃紅の玉襷、自始め蘭丸兄弟、死地に入たる働に、庫裏方丈も忽に、血汐隈取る修羅道の、
 蒼に迷ふ築山蔭、射つ射られつ切つ切られつ劍の山、八寒地獄となる鐘は、五臟を射抜く君の弓
 勢、先手の軍兵一筋の、體につらなる三人五人恐をなして引退く」久吉「シテく君には御安體に

てましますか、氣を付られよ阿野の局」局「ハツア」久吉「君には御安體にて座ますか、心元なし、如何にく」局「ハツア申すも便なき事ながら、運の盡きとて蘭丸殿、田島が手鎗に無念の最期、勝に乗たる光秀方、味方は残らず討死し、春長公にも御腹召され」久吉「シテ三法師君は」局「若君様は細川殿へ落し參らせ、二條の御所も一時に亡び、火中の煙と失せ給ふ。是ぞ筐のお家の御旗。此上は久吉殿の智略にて、武智を討取り、亡我君の亡魂に、手向て給べや真柴殿」と、死る今端の際迄も、君を大事と張詰し心の花もがつくりと、折れて散行く貞心貞死、義女の鑑を残しける。始終の大變聞く久吉、身體忽ち壊敗に苦しみ、途方に暮て居たりしが、つゝ立上り大音上げ、久吉「ヤア、く、旁我を謀る女が不敵、只今某切捨たり」と、諸軍の心迷はさぬ遺智人の名大將、先立つ主君亡人の生死は同じ梓弓、弔ひにこそ入にける。無常に傾く夕陽は、坊主頭も伸び欠び、時刻移ると安德寺、エヘン惠瓊は咳拂ひ徐々歩み獨言、安德「ハレヤレ此永の日中待せて置き、返答もせぬ上に、鷹爪はまだな事、鼓屑一服志さへなき大將、主腹計肥すと見ゆる。餘りな釣付様、佛の顔も三家の使、歸つて此由申上げん」と行かんとす。久吉「ヤア、く、安德寺惠瓊和尚、何所へござる、久吉對面仕らん」と聲かけられ、安德「ハ、ハ、ハ、いや愚僧は生れ付いたる近飢、餘りの隙入に甚だ腹中窮困に迫り、一鉢の御芳志に預り度、勝手へ參る」といふを打消し、久吉「ハテ扱久吉が

志の供養ある事を、眼前見捨て歸られるお僧の心底訝かし、そこ動くな」と眞柴久吉、障子をさつと押開き、上段に飭置いたる金鴨の、煙も薫する手向草、心憎しと尻目にかけて、安德「ヤア大將の詞とも覺えず、出家たる我を訝り動かすとは、物を知らざる今の一言」久吉「ヤアいふな惠瓊、都の大變立聞して、郡へ注進せんす心底、隠しても隠されまじ、軍勢を引入れ、修羅を導く悪僧、寺領が望か知行が望か、返答聞かん」と未前の眞柴。屈せぬ惠瓊、大口開て高笑ひ、安德「ハ、ハ、ハ、ヤアぬかしたり猿冠者、愚僧を捉へ悪僧とは何の癡言、儂が主たる春長は、伊吹山の鬼の再來、諸寺諸山迄責苦しめ、佛敵遁れず本能寺の、庭に於て野仆死したる尾田の幕下、主に劣らぬ暴れ者、五畿七道で喰ひ足らず、此中國迄攻下り、民家を苦しめ人種を絶さんとする魔王の根元、亡し絶すが佛の役、奇代の名劔請取れ」と、はつしと打ば確乎と止め、久吉「ハ、ハ、ハ、出家に似合ぬ好い嗜、童劣の坊主が悪口、久吉が耳には入らぬ。誠相手に成りたくば、天地の道理、成佛の明らかなる事を悟りし上、相手に成りて取らせん」と、飽迄厳しき嘲哂に、奥齒碎くる無念の眼中、つかくと立寄り、眼尻逆立て息をつぎ、安德「ヤア威勢に募り人も無けなる今の悪言、當時安德寺の大寺を踏へる此惠瓊、童劣りとは何をいふや久吉」久吉「ホ、たとへ大寺の名僧たり共、心中に六道の迷ひ有ては、成佛の道思ひも寄らず、汝が目より魔王と見拔し某が、

天地の道理を知らせんす」と、惠瓊を目がけ打かけ給ふ以前の蓮花衣、是は如何にとためつすがめつ見て悔り、覺の袈裟は矢剝の橋にて、天下を得ると見付置いたる奴殿かと、鞆れ果たる計なり。久吉莞爾と笑はせ給ひ、久吉如何に惠瓊老、其時は臺無しの一文奴、算木書物も當にはならぬと貴僧の詞、後の證と其時に、申請たるッレ其袈裟、矢剝の橋にて我相面、見付し貴僧の天眼通、此久吉が望む出世にあらね共、天より生ずる惠なれば、悪くな思ひそ惠瓊殿。此上は尾田と郡の和を結ばるとが出家の役、よもや違變は有るまじ」と、名智の詞に安徳寺、頭を摺付摺付て、安徳ハア、理非明白たる御仰、訓狐といへる物は、夜は微塵の蟲をも見れ共、晝は大山さへ見る事能はず、此坊主も眞其如く、御身黒どんたる日蔭の、其時はよく奇相を見分れど、天下に名を得、武威白晝に輝く時は相見あたはず、見損ぜし訓狐に等しき此坊主に、和議の御説は冥加至極、仰に従ひ和談整へ奉らん」久吉ホ、早速の會得は道の名僧、一刻も早く急がれよ」と、仁者の詞にハ、はつと、天より照す久吉の、威勢に恐れ引かへす。道は道なり明らかな、心照して立歸る。跡見送つて久吉公、心を凝す軍慮の庭先、見越の松が枝はつしと射たる、矢文はいかにと立寄りて、かなぐり披けば返書の實名、清水が自筆一紙の血判、つらくと讀終つて表に向ひ、久吉ホ、高松の城主清水氏、眞柴久吉が一書の胸中、射抜しは適々、此上は三流を切落し

諸人を助けあたふべし。いざ〜是へ」に清水長左衛門宗治、兼て期したる討死の、弓矢打捨て庭上にどつかと坐し、長左エ、天運強き久吉殿、只今射込みし矢文の返書、いよく御承知下さる上は、味方の助命頼み入る」と、鏝脱捨て腹一文字に引切る苦痛、夫の跡を慕ひ來る、妻は手負と見るよりも、マリ梅なう痛はしや悲しやな、斯した御最期させまい爲、郡一家の人々より、わたしを以ての御教訓、無になすのみかいたいな、此子は可愛うないかいな」と夫に縋り伏轉び、前後もわかす泣居たる。宗治苦しき目を見開き、宗治ヤア愚や女房何繰言、郡三家の人々は、某が胸中をよく御存知、そち達親子に今生の、暇乞をさせんす爲の御情。ハア冥加なや有がたや、一才の時よりも喰ひ込んだる大祿の、恩義はいつか謝すべきぞ。それに引かへ小知の銘々、主恩に命を捨る、數萬人の最期をば助けん爲の此切腹、玉露山三が密書の使、心を込めし久吉の書中、味方に取ては盲龜の浮木、悦べ女房何吠える。氣を張詰めて悴をばよき武士に仕立上げ、主君に忠義を怠るな」と、高松の良將も、子故に暗む深手の苦痛、見るに付ても彌増る夫の最期稚子の、行末思ひやり梅は、一女の浅い心から、大守の仰誠ぞと、斯した別れ知らずして、お跡を慕ひきたものを、暇乞さへろく〜に、云たい事の數々を、いつの世いつの添ふしに、語らう物ぞ情なや、アレ〜何にも知らぬ稚子さへ、蟲が教へる寐覺の愛、てうち〜は父上の、今端を拜む合

掌ぞや」と、抱きしめく、伏轉びたる女氣を、不便と察する久吉公、こたへこたゆる宗治が、恩愛一度に持ちかね、清水涌來るはらく、涙、血水川邊に浪越て土砂吹飛す如くなり。哀を見捨て眞柴久吉、彼所を屹度打見やり、久吉「アレくく見られよ兩人、相圖を以て川筋の土俵岩石嫌ひなく、切て落せばありく」と、平地とをさまり城外へ、遁れ出たる老若の、悦びの聲鯨波、コレ見物あれ」と大將の、教にはつと心付き、長左「エ、幸ひなるかな是に物見」と、蹠ばひく、腹帶しつかと白布の、高見を傳ひ攀登り、見開く眸に高笑ひ、宗治「ハ、ハ、ハ、女房悦べ、死後の思ひ出此上なし。浮世の夢も今日限り、昨日の敵は群るる白鷗、鯨波と覺えしは、浦風とこそ聞えけり。我は朝の露と消え、清水流るる柳蔭、しばしが程の世の中に、心残さぬおさらば」と、白布解んとする所へ、隆景「ヤアく、宗治暫しく、小梅川隆景、安徳寺が理解によつて、尾田家一體水魚の因、見届けて成佛あれ」と、聲諸共に大將隆景、衣服改めしづくくと入來る跡に安徳寺、手に捧たる白臺は、神文とこそ見えにけり。互に和議を取納め、惠瓊は神文押戴き、安徳「ハア、目出度相談整なふ上は、拙僧はお先へ歸り、久吉公の御神文、兩家へさし上奉らん」と、禮儀も足も勇み立ち、衣しほつて歸らるよ。久吉は詞を改め、久吉「兩家和順に及ぶ上は、何をか包まん、主君尾田殿都本能寺に於て、武智が爲に御落命」と、聲搔曇る一雫、萬里にみちて袖しほる。驚く人々制

する眞柴、弛みを見せじとつつ立上り、久吉主人の敵武智光秀、都に登り弔ひ軍、三家の助力あるや如何に」と、聞くより隆景嬌乎と笑ひ、隆景「ホ、軍の備有りながら、手を空しくせし味方の若者、研ぎたて置たる弓矢の手前、願うてもなき後詰の加勢、隆景采をなし申さん」久吉「ホ、ホ、頼もしく。早上京の用意をなさん、者ども早く」と御下知に、加藤正清始とし、人馬狭しと居竝んだり。憂ひに沈むやり梅を、諫め宥めて隆景公、隆景「父に劣らぬ武士と、小梅川が成人させん、心残さず旅立て」と、籠る情に嬌乎と笑ふが暇乞ひ、此世の念も宗治が、忠義の家名稚子を、守育つる仁者の道、雲きれ空も青々と、天王山の晴いくさ、名をとる射とる弓矢とる、天下を鳥の聲につれ、いざや武智を討んずと、いさむ正清兩將も、都をさして出てゆく。

同六日の段

扱も逆賊武智光秀、多年の恨一戦に、春長父子を討ち奉り、妙心寺に砦を構へ、勝誇つたる諸軍の勢ひ、俱に威風を顯して、備へ厳しく守りある。中央には光秀の母臯月、褥の上に座をしめて、さつき「イヤナウ四王天、何事も見ざる聞かざる云はざるに、咄しが有らば嫁女庚申待、緩りと聞かう、ドリヤ奥へ行て夢でも見ましょ」と、立つを引止め田島頭、四王天「後室様の御立

腹、其理なきには有らね共、夫は一途の思召し、幕下となつて春長へ、身を寄せ給ひし御大將、時を得て其機に臨むは、天の時を知るといふ。何卒御機嫌直されて、光秀公に御對顔、偏に頼み奉る」と、願へば俱に嫁操、「只幾重にも」と手を突て願ふ心の夫思ひ、道理にも又殊勝なり。臯月は少し面を和らけ、「夫程に迄皆の衆が、頼みを聞かぬも年寄の片意地、そんなら息子殿の歸り次第奥へ知らしや。コリヤ女共は來て腰を打て、ヤアエイ」と老の立居も重々と、嫁が介抱四王天、引添てこそ入にける。斯たる世にも花開く、色香もしるき初菊が、奥の透間を立出て、初菊「ほんにマア此十次郎様は、辛氣なお方では有るわいなア、こちの思ふ様にもない、間がな透かな軍學とやら、色の道には疎いので、一倍心を痛める」と、女心の物思ひ。後に立聞く十次郎、十次「初菊殿是にか」といふ聲聞いて、初菊「ヤア十次郎様か、エ、聞えぬわいな」と計りにて、跡は得云はぬおほこさは、赤らむ顔に顯はせり。十次「是は又嗜みやいなう、又してもく、顔さへ見れば恨のたらく、親々の赦しを受け、コレ未來永々かはらぬ女夫、少しも隔はないわいの」初菊「ア、イエく、づんともうアタ辛氣な、永々とやら未來とやら、其さきの世は知ね共、縁を結ぶの神様が、御苦勞なされ髻髮子の、振分鬘の其中から、あれと是との結び合、親の赦しもあるものを、つひに一度の逢瀬さへ、ないは餘り胸欲な、お情ない」と娘氣の、胸の有りたけかき

口説き、恨み嘆つぞ道理なり。思ひは同じ十次郎、十次「ハテもう今迄は不調法、以後は急度嗜む程に、コレ赦してたもく」初菊「そんなら願ひを」十次「ハテ誰憚らぬ云號、世間廣う遠慮はいらぬ」初菊「エ、忝や嬉しや」と、ひつたり抱付く妹と脊に、わりなく見えし縁なり。折から轟く轡の音、「光秀公のお歸り」と、しらせに悔り飛退く二人、所體繕ふこなたより、妻の操も出で向ひ、待つ間程なく立ち歸る。武智十兵衛光秀、武威轟かす強將の、常にかはりし屈詫顔、席を改め詞を正し、光秀「ホ、三人共出向ひ大儀、シテ母人には御機嫌よくお渡りなさるか」操「サアイナア先程も田島頭と自が、わつつ口説つ、どうやら斯やらお口が和らぎ、母公様とも睦じう」光秀「ム、ホ夫は重疊出かしたく、左あらば直様御對面」さつき「イ、ヤ夫には及ばぬ、母が直直參らん」と、聲うちかけを引かへて、木綿布子に風呂敷包、背にちよつこり賤の女の、姿見るより驚く人々、操は傍に摺寄つて、操「系圖正しき武智の御家、殊更四海の武將とも、仰がれ給ふ夫光秀、天下の御母公様共云はると御身が、淺ましきお姿は、若やお心違ひしか」と、尋ねに嬌乎と打笑ひ、さつき「ホ、忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系圖、元より武勇の家柄なれば、誰に恥べき謂なし。老は寄れども心は鐵石、渴しても盗泉の水を吞まずとは、お身達もよう知つてゐるや、心穢れた我子の傍、片時も座を同じうせんは我日本の神明へ、恐れ有りく、伯夷

叔齊を習ひ、只雲水に従うて出行く母、是が此世の別ぞ」と、義強い母も恩愛の涙紛らす有様は、いと哀れぞ増りける。光秀は黙然とさし俯いてるたりしが、操の方は涙ながら、操「コレ申し我夫、母様の只お一人、いづくを當てと長の旅、なぜお止めなされませぬぞ」光秀「ホ、不忠不孝との御輕蔑、今更申す詫もなく、せめては母のお心に逆はぬが寸志の孝、四海の内は此光秀が掌にある、お止め申な其儘々々」さつさ「ヲ、道は悪人程有つて根強い魂、チエ、云はん方なき人外め」と、睨む目元にはらくくと、涙かくして立出る、心の張弓強弓の、引ぞ煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が、初菊「是なう申し祖母様」と控へる手先振拂ひ、見返りもせず出て行く。わつと泣出す人々を、制し止めて、光秀「ヤア〜者共、母人の御行方いづく迄も見届けよ、御手道具の用意々々」と光秀が、鶴の一聲許多の軍卒、箆筒長持挾箱、其外雜具鉞乗物、御母公様のお姿を見失ふなど足早に、跡を幕うて急ぎ行く。影見送りて光秀は、何角心に打うなづき、光秀「奥操助十次郎、嫁初菊諸とも次ぎへ立ちやれ、用事有らば手を鳴す」と、心有りけな詞の端、アイとはいへど立ち兼る。光秀「ヤアぐづく〜と何を猶豫、早く立てよ」ときめ付けられ、心は跡に残れ共、親子三人打連れて、是非なく次へ入相の、鐘が無常を告渡る、實物凄き庭の面、忍び出たる四王天、主君の様子如何ぞと、身を潜めてぞ窺ひるる。それとは知らぬ光秀が、有合ふ硯引き寄せて、

筆喰し唐紙の、表に何やらさら〜、かくと見るより、十次郎 瞬もせず物陰に、守りる共白書院、只一心に書認め、筆投捨てむんづと坐し、諸肌窺け指添を、抜くや玉散る氷の刃、やと打詠め兩眼に、はらく〜涙喰締め、既に斯よと見えければ、主従小影を走出で、十次「ヤレ早まり給ふな父上」と、取付く十次郎四王天、鏡の如き兩眼を、くわつと見開き聲震はし、四王天「コレ我君、コリヤこなた狂氣召されたの。今朝より始終の様子、心得がたく思ふ故、萬事心を付る某、物陰より窺へば、出かし顔に辭世の一句、順逆二門なし、大道心深に徹す、五十五年の夢、覺來て一元に歸すとは何の癡言。君臣を見る事塵芥の如くせば、臣君を見る事怨敵の如しと。春長猛威に増長して、神社佛閣を焼失し、萬民の苦しむる暴惡、神明是を誅するに、光秀の御手をもつて討し給ふ。天の與ふるを取らざれば、災ひ其身に歸す。左程の事を申さず共、よく御合點のこなた様、切腹とは馬鹿々々しい、人は知らず此四王天田島頭、殺す事罷りならぬ」と居丈高。十次「ヲ、さうぢやく〜、父の命は我々始め萬卒に至る迄、御一身に及ぶ御命、臣義を守る共、君是を補助せざるは、それ將とは申されず。只生害はとどまり給ひ、下萬民の苦しみを救ひ給へ」と右左、涙と俱に諫めの詞。光秀はたと横手を打ち、光秀「ハ、誤つたり〜、一天の君の御爲には、惜しからざりし此命、暫しは永らへ事を計らん。先は綸旨を乞受て、猶

も背かん者共を、悉く誅戮せん。急ぎ是より我は参内、汝等二人は久吉が、都へ登るを半途に待受け、一戦にほつ返せよ。イデ装束を」と立上がれば、近習小姓が心得て、運ぶ大紋立烏帽子、立派に著なす骨柄は邊輝く其粧ひ、早引出す栗毛の駒、光秀ゆらりと打乗つて、光秀「ヤア〜十次郎、田島頭諸共に西國へ馳向ひ、必ず共に油断なく軍功を顯はせよ」と、詞にはつと四王天、四王天「ハ、、、君御出陣には及ばず共、某彼地に向ひなば、猿冠者めが素頭を、討ち取るは手裏に有り」光秀「ア、イヤ〜、彼もしれ物、定めて遠き計略有らん」十次「コハ親人の詞共覺えず、父に代つて某が、軍配取つて一戦に、敵の首を實檢に備へん、コレ氣づかひ有るな」と、勇み進みし我子の骨柄、光秀「ホ、、、天晴々々潔よし〜。我も跡より出陣」と、手綱がいくりしと〜、乗出す駿足馬上の達者、轡の音は秋の野の、蟲には有らでりん〜、綸旨をやがて頭に戴き、刃向ふ奴原打立て追立て切散し、追付け四海に羽を伸さん。いそふれやつと一散に、大内山へと 三重急ぎ行く。

同七日の段

攝化隨緣眞實に、無量の惠み洩されども、佛敵猛威の春長に、世を狭られ鱸重成、無念ながらも杉の森、砦を構へゆとしくも、寄手を防ぐ唯一心、矢叫びの音関の聲、天地に滿て動搖せり。かゝる險しき其中に、媚き集ふ虓共、軍に馴て氣は張弓、轡鉢巻腰刀、追ゆとしく身の備へ、中に小笹が才發顔、小笹「イヤなう浪江、なんとマア騒がしい世界ではないかいの、切つたく〜と切つとはつつを世渡りに、まだ仕足らいで春長殿、慶覺様を相人に取り憎てらしい軍事」浪江「サイナウ追付け如來様の罰が當り、首がころりと飛ぶであろ」と、いへば兵卒口々に、兵卒「チ、サ飛ぶとも〜」。一向一心に固つたる我々、殊更御主人喜多の頭様の軍配、石山に於ても度々の勝軍、ヤモ負る事はけんによもない事。残り多いは王様の御挨拶、頭の役でお温順しく丸う納めて慶覺様が、石山の砦を引拂ひ、此杉の森へ御陣更へ、性懲もなく又寄せかけた尾田の大軍、どつと寄せても不可思議光如來のお力にや叶ひませぬぢやないかいな「威」あいなアあいな」兵卒「オット待つたり、叶はぬ次手においとしいは若旦那孫市様、尾田と和睦が破れた計りに、御使の越度ちやと爺御様の御勘當、なんと可内、御詫の願ひを一統に、して見る心はないかいやい」と、おろ〜涙惣々が、噉上げたる水涕も、忠義のはしと殊勝なり。斯と漏聞く一間より、孫市が妻の雪の谷、我子の手を引きしとやかに、出る姿もおのづから、思ひ有る身の打萎れ 雪の谷「ほんに主なり家來なりと、思うて誰しい其方達が志、聞く嬉しさにいと猶、悲しき夫のお身の末、

どうなる事と、自^{みづから}が、心の内を推量して給^{たま}やいなう」と有りければ、娘^{こしも}始め士卒共、顔見合せて詞なし。娘松代は母の顔、打詠めく、松代「コレ申し母様、おまへは何をむつかるぞ、同じ様に皆迄も、何を泣きやる、早う父様や弟の重若^{しげわか}を呼びまして来てくれやい。此間の清書^{せいしよ}をお目にかけて、譽めて貰^{もら}ひたいわいなう」雪の谷「チ、譽めて貰^{もら}ひたからう、そなたより此母が逢^あひたさは山々、暫しが間も母の傍^{そば}、得放れぬあの重若、定めて泣いてばつかりあるで有る、可愛^{かほい}いの者や」と喰^くひ縮^{ひぢ}り、泣く音を包む雪の谷が、心の内ぞせつなけれ。襖^{ふすま}の彼方に重成が、高らかに咳^{せき}拂^{はら}ひ、扱^しは舅君のお出なるぞと、いふに心得、娘が席を下^{さが}れば雑兵共、地に鼻付けてかつ跪^{つひ}ひ、待つ間程なく悠然と、立出る鱸喜多の頭、不興^{ふきよう}氣に四邊を見廻し、重成「ヤイ女原、此所に用事はな
 い次へ立て。軍卒共も何をうつかり、要害を頼みに搦^{から}手の守り怠^{おこ}るは一大事、早く罷^まつて心を付けよ、サ、行けく」と追立^{おっだて}やり、重成「イヤナニ嫁女、そなたにも云ひ聞かし、悦^{よろこ}ばす事が有るてや」雪の谷「アノ私に悦ばす事が有ると御意遊^{ごい}すは、ム、夫孫市殿の」喜多「ハテ扱、又しても不吉^{ふきつもの}者の悴^せが事、左様の事でをりない。當月二日の曉に、天文の考^{かん}みし所、東に當つて白氣自^{はくき}然^たと立登^たる、是則敵の大將、春長が腹身^{はらみ}と頼^{たの}む勇者の内に變^{へん}心の者有つて、事を破^{やぶ}るの前表^{ぜんべう}、今日迄口外せざれ共數日の籠城^{かうじやう}、お身も定めて心勞^{しんらう}と思ふから、安堵^{あんず}させん爲申し聞かす、見

よ見よ追つ付け世を廣う、足利の正統^{しょうとう}たる慶覺君の御代となさん、何と此上もなき悦びではをりないか」と、未前^{みぜん}の察^{めい}す明智^{めい}の眼力^{がんりき}。こなたは一途^{いつづ}に夫思^{むを}ひ、よき折からと摺寄^{すりよ}て、雪の谷「イヤもうお嬉^{うれ}しい段^{だん}ぢやござりませぬ、が、どうぞ成らう事なら、其白氣とやらが立ちました、孫市殿の御勘當^{ごかんたう}が赦^{ゆる}りますといふ知らせなら、ほんにどの様に嬉しう存^{ぞん}じませうぞ。憚^{はた}りながら慶覺様と御一所に、どうぞ世に出られます様に、親御のお慈悲^{じひ}お情で」と、いふを打消し、喜多「アレまだしつこい、かゝる目出^{めで}たき折からに、よしなき癡言^{たはご}聞きたくない。お身も孫を連れて部屋へ行きやれ、エ、何をぐづく、早く立ちやれ」と嚙^かみ付^{つけ}られ、何とせん方投^{なひくひ}首し、娘松代を伴^たひて、しをく立つて入にける。跡に重成^{しげなり}只一人、立上つて通路の鈴^{すず}、引ならせば一間の御簾^{ごれん}、さつと小姓^{せうじやう}がかよぐれば、念珠^{ねんじゆ}他事なき慶覺君、慶覺「重成が音づれ何事か有るやらん」と、仰^{おほ}はつと頭^{かぶ}を上げ、重成「今朝^{けさ}より御機嫌^{ごきげん}を窺^{うかが}ひ奉^{ほう}らんと存^{ぞん}ずれども、敵の朝駈^{あさかけ}短兵急^{たんべいきう}に寄せたれば、軍配^{ぐんぱい}に暇^{いとま}なく、一泡吹^いせ味方^{あほう}の勝利、攻口^{せうぐち}を退^ひき候へば、一息^{ひといき}の間と漸^{やう}只今御前^{ごぜん}へ伺候^{しこう}、不禮^{ぶらい}の段は御高免^{ごたかめん}」と敬^{うや}まひ深く述べれば、慶覺「誠忠^{まことちゆう}俊又^{しゆんご}の一人時に合はねば、此程^{このほど}よりの心勞^{しんらう}推察^{すいさつ}せり。兄義輝^{あにぎみ}君は、三好^{みやう}松永^{しょうえい}が爲^{ため}に亡^なび給^{たま}ひ、今又我は春長^{はるなが}が爲^{ため}に斯^{かく}のごとし。よしなき命^{いのち}永^{なが}らへて、萬民^{ばんにん}塗^ぬ炭^{たん}の苦^{くるしみ}と云ひ、諸卒^{しよそ}の命^{いのち}を失^うはんより、早く我が一命^{ひといのち}を斷^たち、萬死^{ばんじ}を救

ひ得させよ」と、御目を閉て稱名を、唱へ給へば重成も、君の惠の有がた涙、胸に押へて氣色を變へ、重成詞「チエ、云ひ甲斐なき御仰、それ軍は和に有つて衆にあらず、馬洗厩養に等しき尾田の弱兵何程の事や有らん、凱歌を上るは瞬く内。君にも知召す如く、國大なるといへども戦を好めば必ず亡ぶと、近くは武田勝頼、父信立まで其威隣國に併ぶ者なく、猛虎の如く諸侯も恐れ候へども、勇に誇り武に慢じたる太郎勝頼、累代の武名も一時に朽ちぬ。春長迎も先其如く、御心弱くて叶はじ」と諫め申せば慶覺法師、打領かせ給ひつゝ、慶覺「重成來れ」と御座をば立せ給へる其所へ、大息ついで鷺森八郎、御注進と手を突けば、人々いかにと仰の下、驚森されば候、軍は味方の勝利なれ共、力責には叶はじと、數千の車に燒草を積載て、櫓々の其下へ、山の如くに積み重ね、たゞ燒打に」と云はせも立す、喜多の頭はつたと睨付け、成重「ヤア馬鹿々々しい、何の癡言、其刈柴こそ身が申付けたる一つの計策、御大將の御前なるぞ、麓忽の注進。早く立て」とわざと怒りの一言も、知らで鷺森八郎は、拍子抜け引かへせば、いざ御入りと八方に、心を配る重成が、底意を汲みて慶覺君、奥殿さして三重入給ふ。夏の日長きも我を恨むなる、物思へとや夕暮の、空を待らけり孫市が、肩にしつかり鎧櫃、人目を忍ぶ陣笠の、歩にやつしたる佛は、昔に變る勘當の、身は猶更に心の隔て、なんとせんかた切戸口、竹むこな

たの茂みより、忍び出たる大の男、あたりうそく窺ひ足、奥を目かけて忍び行く。後の方より孫市が、曲者やらぬと、廉を、むんづと組んで引き戻す。大の男「シヤ猪口才すな」と振り解き、直に抜討ち刃の光、かい潛つて抜合はし、手練の切先はつしく、打合ふ刃音何事と、手燭片手に立出る雪の谷、火影を覆ひ物蔭に、息をひめてぞ守り居る。庭には一人が上段下段、飛鳥の働き孫市が、難なく曲者切り倒し、乗懸つてとどめの刀、血押し拭ひ刀を鞘、納める丈夫死骸の懷中、探る手先に取出す一書、扱はと月に透し見て、孫市「ム、スリヤ常月二日に春長父子、光秀が爲に亡びしとな。チエ、心地好や嬉しや」と、悦び勇む後には、紛ふ方なき夫の聲、飛立つ計り走寄り、逢ひたかつたと緋付き、嬉し涙ぞ先立てり。夫も遺夫婦の愛情、やと打潤む目をしばたとき、孫市「誠や飽ぬ夫婦が銘々に、盼を連れて思はぬ離別、父の勘氣を蒙りしも、暴悪非道の尾田春長、約を變ぜし故なれば、何卒彼奴が首討取り、親人の實檢に備へなば、勘當詫の綱にもと、心は矢竹にはやれ共、悴重若召連れては、足手纏ひと未練にも、子に引かされて送る月日、鐵砲疵にて脚さへも、思ふに任せぬ畸人者、武運に盡きし我が身の上、せめて御主君親人の、お役に立つて死なんものと、覺悟極る今日只今、死後に頼むは二人の子供、心得たるか」と夫の詞、聞くに女房が泣出す、其口押さへて、孫市「コリヤ親人のお耳に入らば却つて妨げ、イデ

悴を手渡し」と、かたへに直せし鎧櫃、蓋取退くれば重若が、母様なうと走出で、縋り歎けば母親も、胸に涙の満汐の、引くや血脈と奥よりも、姉の松代が聲聞き付け、松代「お父様のお歸りか、重若も戻つてか、嬉しいく、早う遊ほ」と手を叩き、悦ぶ姉弟雪の谷が、膝に引き寄せ聲曇らせ、雪の谷「ヲ、嬉しいかろく、何ほう其様に悦びやつても、久しぶりでお目にかよた父様は、腹を切らねばならぬといなう。コレ孫市殿、是を見てかいなう、なんにも知らぬ二人の子供、お前は可愛うござんせぬか。此姉弟をふり向けて、死ぬる覺悟を極めたとは、餘り氣強い胸欲な、武士が立つても捨たつても、死なさぬく死なさぬ」と、かき口説の忍び音に、奥へ憚るうき涙、道理と知れど聲に角立て、孫市「ヤア未練至極の其吠頬、弓矢取る身の切腹は此身の本懐、今計らずも寄手の大將、是角六郎を討つて捨て、懐中の一書を見れば、都本能寺に於て春長父子、光秀が爲に討死と、春孝よりの報知の密書、此騒動に寄手の奴原、一旦圍みは開く共、再び寄せんは必定たり。危急を救ふは此孫市、君と父との命にかはり、首を則ち久吉が、陣所に送り和を乞はど、元より寛仁大度の眞柴、よもや違背は致すまじ。使は悴重若丸、兼て認め置いたる一書、斯迄思ひ込んだる某、妨げなす不所存者。コリヤく二人の子供爰へ來よ、兄弟ともに父が子か又母が子か、云うて聞かさば賢い者」と、撫つさすりつ尋るも、胸に無量の思ひ有る、心

は知らで弟の重若、重若「コレ父様、私はお前の子でござるわいの」孫市「何ぢや父が子ぢや、ヲよく云た出かしたなア。サ、姉の松代はどうぢやく」と、問へど年だけうじくと、母に氣兼ねの云兼れば、孫市「ム、返事のないは母が子か、我が子でなくば出てうせう」と、呵り付けられ泣くくも、松代「何の母様の子ぢやござりませぬ、とと様の子でござります」孫市「スリヤ其方も我が子とな、ヲ、よく云た出かしたなア。父が子ならば、身が云ひ付る事背きはせまい」松代「アノ親の云ふ事聞かぬ者は不孝者ぢやと、母様が常々からのお呵り、どんな事でも聞きます」孫市「なう重若、そなたも云ふ事聞きやるかや」重若「アイ、よう云ふ事を聞くわいなう」孫市「ヲ、扱々ういやつ、然らば申付る役目が有る、今父が此短刀を腹へ突立つたらばな、コ、此刀と脇差にて身が首を引切り、此一書を添て久吉殿へ持參せば、此上もなき孝行者、合點がいたか」と細かに、云教ふれば驚く母、睨付られくひしばる、親の心は知らぬ子の、譯も七つ子重若丸、重若「夫なら父様の首を此脇差で切ると、孝行になりますかや」孫市「ヲ、なる共く、日本一の大孝心」重若「コレ姉様も合點かや、サア早う腹切て下され」と、いふに堪らず母親が、我子引退け、雪の谷「エ、忌はしい子供では有るわいなう。コレ孫市殿、いかに望が立たい迎、何辨へない此子供に、親を殺せと教る人が、又と世界に有うかいなう。夫や我子を安穩に置きたい計に兎角と心を

盡す女房を、思はぬ仕方情ない。親の別れも身の科も辨へ知らぬ佛様、鬼にせうとは胸欲な、せめて此子が生先を、見届る迄生て居て、下さりませんが親の慈悲、頼むわいの」と計にて、譯も詞も涙川、膝に漲る風情なり。孫市「ヤア益なき諄聞きたくない、三千世界に子を思はぬ、親が有らうか白癡者。左程盼に此首を討し難く思ひなば、子供にかはつて介錯せよ」雪の谷「サア夫は」孫市「得心なくば縁切うか」雪の谷「ぢやというて是がマア」孫市「ヤア未練至極の其吠類、所詮介錯思ひも寄らず、見下け果たる女め」と、取て引寄せ提緒の早繩、庭木の杉に確乎と、結ぶ妹脊の亂れ口、こがるよ其身は梢の猿、腸を斷つ憂思ひ。母の有様見るよりも、二人の子供はおろく顔、雪の谷「コレ松代、重若も、父様の兩の手に取付て居やや、必ず放して給るな」と、あせれど夢か現なき、夫は今を最期ぞと、諸肌脱は弟の重若、重若「父様もつかや」孫市「ヲ、サ今が親への孝行時」と、云つと短刀我腹へ、ぐつと立てばはつと散る、唐紅に目も眩み、心も消る雪の谷が、闇路を辿る思ひにて、正體もなく伏沈む、歎の折も一間より、喜多「ヤレ躬其刀引廻すな云ふ事有り」と父重成、しづくと立出で、喜多「ホ、適忠臣よくしたり、今こそ勘當赦してくれる。是を此世の思出に、心静に最期をとけよ。とは云ながら二人の孫、親の死別も夢現、嘸成人の其後は、歎くで有らう悔み居らうと、思へば不便彌増して、我は老木の末近く、便とするは母の親、むごい祖父ぢやとコ

リや恨んでばしくれるなよ。我とても骨肉の盼を見殺す胸の内、どのやうに有らうと思ふぞいやい。チエ、是非もなき次第や」と、胸に湯玉の涌返る、親の思の有難涙、見上見下す一世の別れ、手負は涙押し止め、孫市「ハ、有難き父の恵、忠孝全く望は足りぬ。サア重若松代、最前父が申し付たる役目は只今、サ早くく」雪の谷「コレく必ず切るまい、切つたらば母が灸を据ゑるぞや」と脅せば遺子心に、ひかふる手先。孫市「ヤア詞背くと子でないぞ」松代「エ、父様の御用を聞くと母様が呵らつしやる、其母様はあの様に縛られて居やつしやる。コレ重若、かゝ様のアノ繩を解いて上げて給いなう」重若「サア夫でもあの様に白眼しやるもの」雪の谷「ヲ、何ほう呵らしやつても大事ない、此繩解いて給ひなう。コレ申舅御様、同じ様に脇見せずと、なぜとめて下さりませぬぞ。現在孫を親殺しにするが、情か慈悲かいなう。此繩といて下され」と、頼む嫁より頼まると、舅が胸の苦しさを、堪ふる辛さ皺面は、涙に増る思なり。斯ては果じと孫市は、我子の腕先持添へて、しつかと當れば頑是なく、ともに力身て、重若「とゝ様斯かや」孫市「ヲ、そうちや」出かすくも一世の別れ、二世の名残と雪の谷が、消ゆる間を待つ夫の命、神も佛もない事かと、亂ると心亂れ髪、血汐争ふ血の涙、上には父が稱名、聲諸共に鈴の音、慶覺君は他念なく、南無阿彌陀佛く、南無阿彌陀佛の回向の恩徳、廣大不思議にて、往相回向の利益

には、還相回向に回入せり。聲は如來の迎ひぞと、ゑい／＼と孫市が、首は前にぞ落にけり。わつと恐れて飛退く子供、母は其儘打倒れ、前後不覺に泣き叫ぶ。始終見届け重成が、目に持つ涙押拭ひ、重成「ハ、生者必滅の理、今日の前の見るも夢。せめて夫の切首に、暇乞を」と立上がり、繩解ほどけば雪の谷は、其儘首にしがみ付き、雪の谷「覺悟故とは云ひながら、いとし可愛い姉弟に、嘸や心が残るである。魂魄去らずば今一度、物云うて給へ孫市殿、我夫なう」と押し動かし、盡きぬ名残の百千行、聲を限りに泣き叫べば、重成「チ、其歎きは理ながら、主君へ忠死の勲が功、出かしをつたと譽そやす、親が心を推量せよ」不便と計り詞數、云はぬ心のせつなさ、思ひやつたる雪の谷が、正體涙の聲を上げ、雪の谷「家を忘れ身を忘れ、討死するは武士の、習ひと覺悟しながらも、得諦ぬは女だけ、お赦しなされて下さりませ。長い別れと知らぬ子の、常の遊びか何ぞの様に、親の首をばむごらしい、切るが手柄になるといふ、教は外に情ない、如何なる宿世の報いぞ」と、口説き立てたる恩愛の、心は一つ重成も、瞬き繁くはらはら、涙は雨か夕雨の、車軸を飛す如くなり。折しも吹來る風に連れ、響く貝鐘攻鼓、又も敵や寄するかと、驚く雪の谷騒がぬ老人、思ひがけなく彼所より、清秀「足利の正統たる慶覺君を御迎ひの爲、中川清秀參上せり」と、呼はり／＼入來る清秀、喜多の頭はくわつとせき立ち、重成「ヤア

和議を破りし無道の春長、其祿を喰む中川瀬平、納め過ぎたる上下衣服、御迎ひとは何の癡言」清秀「ホ、一旦の憤りは尤も至極、此度の合戦は御舍弟春孝殿、事を計り禮を亂す、去るによつて眞柴久吉、内意をもつて立越しは、密に都へ供奉せん爲、早御用意」と云はせも立てず、重成「逆賊光秀が爲に自滅せし春長父子、知るまいと思ふかや。石山方に名を得たる鱸喜多の頭重成、眼は日月、及ばぬ事を」ときめつくれば、清秀猶も詞を盡し、清秀「成程推量の如く當月二日、都本能寺に於て主君の横死、愁ひに沈む我々、偽りの有るべきや。取り分け子息孫市殿、死を以て久吉殿へ願ひの一條、今より一子重若丸、父の忠義を頭に戴き、二代の鱸孫市と、名も改まる。兩家の和睦、慶覺君の御本願照すも法の道廣く、やがて目出たき榮えを」と、情の詞に疑念も散じ、重成「ハ、誤つたり／＼、斯程厚志の眞柴中川、勲が願ひ我君の、法の門出一時に開け、此上もなき我が悦び、コレ／＼嫁女、孫が手柄は二代の忠臣」歎きの中の悦びと、舅の詞聞くにつけ、いと涙に雪の谷が、應答も更に泣く計、早御立の刻限と、追々警固の諸軍勢、見るより重成手を打つて、重成「萬事に馴し清秀殿、イデ我が君へ此様子申し上げん」と立ち上れば、慶覺「イ、ヤ聞く迄もなし、とくより慶覺是にあり」と、しづ／＼と立出給へば、はつと恐るゝ二人の勇士。慶覺君は御衣の袖しほり給ひて、慶覺「いかに旁、孫市が忠死により、萬死を出しも佛

の恵、久吉が情の計ひ、又清秀とやらんが志、過分至極」とのたまへば、清秀なほも敬ひ深く、研秀「コハ有がたき君の御詫、此上は御心置なく、早鷄鳴に程近し、いざ御發駕」と勸に君は下立ち給へば、重成「ヤレ暫く、御門出を壽きの、孫めが一さし、御上覽に入れ奉らん。嫁女、常々教へし扇の一手、早くく」と舅の詞、涙ながらに取上ぐる、鼓の調べ重若が、重若「祖父様謠をうたうてや」と、扇をしやんと、身の備へ、舞あら目出たや末廣の、君の榮えは、諸萬萬歳と祝しけり。拍子につれて稚子の、奏で祝する末廣の、其一曲は末の世に、名を止めたる鱸が踊り、因縁斯と知られたり。「いざ御立ち」と清秀が、詞にふり出す行列の、おさへは二代の鱸孫市、武士の鑑となる鐘の、音もろともにあけて行く、夜もしらぐと白鷺の、森を離れて飛び交ふも、君の榮えを白鳥の、神の擁護と勇み立ち、都の空へと三重供奉しけり。

同八日の段

憫むべし英雄の武將、刃の霜と消えて行く、内大臣春長公、今日一七日の大法事、と老若男女別なく、參詣群集を當にして、見せ物輕業力持、戰國の世も下々の、身過にかはりなかりける。所の百姓引連て、のさく来る陣張甚助、茶やが床几に腰打かけ、甚助「ヤレ庄や太郎作とやら、此度尾

田春長の法事は、主人武智左馬之介様の御差圖、情を以て萬事御宥免有れば、付上がりのした百姓共、誰が赦して輕業ぢやの、イヤ曲持のと、仰々しい振舞ひ、外は格別、當村は此陣張甚助が支配、立てうと臥せうと身共次第、小家掛茶屋に至る迄、今日中に取拂へ」と、主の威光に肩臂張り、さも横柄に罵れば、庄や太郎作頭を掻き、太郎「其お腹立は御尤でござりますれど、又してもく、エイくわあで村々は亂が騒、此頃武智光秀様、將軍とやらにお成りなされ、少しこゝら近邊は穩、其悦びの參詣群集、せめて四五日御用捨を」と、言ひつゝ腰の早道より、取出す小錢茶碗にうつし、「マアお一つ」と差出せば、手に取上げて悔りし、睨んだ眼は何所へやら、ぐわらりと變る機動的、甚助「へ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、イヤ何庄屋、ソリヤ何かいやい、主人光秀公が天下を知召し、其御悦びとあれば苦しうない。輕業なりと、唐の芝居なりと勝手次第。拙者元來茶が好だが、大服にして換てくれる氣はないか」と、肩からはえた爪長代官。百姓共は口揃へ、百姓「何が扱々、何杯なりと御遠慮なしに、お換なされて下さりませ」甚助「然らばどうぞ今一ぱい所望々々」と差出され、めいめい紙入巾着を、浚へて漸八分目、些少ながらと差出せば、甚助「是はく重々の御馳走、いやもう此お茶さへ下さらば、少々は拙者の天窓で、土佐踊なされても苦しからず。用事あらば承らん、必ず心置かれな」と、欲に目のないにこく笑

顔。サアしてやつたと百姓共、庄屋を先に立上り、又もや御意の變らぬ内、代官様へ差上る、出端の錢を儲けうと、挨拶そこく立歸る。あとに甚助只一人、燻らす煙草の煙より、胸に思ひの絶間なき、おこぶは後にもぢくうぢく。「ドリヤまからう」と立上り、歩みかよればこらへ兼、「申し」と呼かくれば、甚助四邊を見廻して、甚助「ハテ心得ぬ、柳の小蔭より申し」と呼懸るは、夜鷹さんかいな「アイナあいな」と走出で、恥しさに縄付き、いはんとすれど赤らむ顔、甚助は擦つすがめつ、おこぶが姿を眺め入り、甚助見れば本肉の仕事盛り、身共に取付きこだれるは、仔細であらん物語れ、つひに見えぬ街妻殿」と、いはれて漸顔を上げ、おこぶ「エ、つひに見ぬとは聞えませぬ、去年の五月の夕まぐれ、道頓堀の奈良茶屋で、思ひ初たが縁のはし、丸寝の盆屋は丸清の二階、千年も萬年も、變らぬ契り龜竹の、節々までが萎る程、心好かつた床の海、音はぎしく、岸本や、人の噂に鳴戸屋を、ほんに嬉しの森新で、私や悦んでゐるものを、夫におまへは揚物屋の、荷箱か大正の鰻の様に、ぬらくらとしたぬめた様、忘れるるとは餘りな、聞えぬはいな」と取り付て、恨の尺を口説立て、啜上げたる有様は、達磨の畫像に野良猫の、傍へかよりし如くなり。甚助道理と背撫さすり、甚助「一々心に覺の合紋、顔見忘れたは悪かつた。幸ひおれも徒然の砌、アノ水茶屋へサアおぢや」と、いはれておこぶもぞつく、渡り

に船と帆柱を、かよへて戀の港入、打つれ立て歩み行く。流るゝ水の音さへも、物騒がしき戦國に、行儀亂さぬ生立は、武智が一子十次郎、人目を忍ぶ深編笠、松原傳ひに歩み來て、有合ふ床几に腰打かけ 十次「ハア思ひ廻せば恐ろしき世の亂、昨日の君臣は今日の怨敵、親は子を討ち子は親に、刃を合す修羅の巷、是非もなき世の有様」と暫し思に悩みけり。漸心取直し、父光秀が刃にかより、空しくならせ給うたる、春長公の靈前へ、御許容なく共後世の爲、イテ拜せんとさしかよる、道を遮ぎる陣張甚助、家來引具し大音上げ、甚助「ヤア主殺しの武智が悴そこ動かぬ。汝が家來と偽りし某こそ眞柴方、久吉様への奉公始、腕を廻せ」と犇めけば、重次「ハ、ハ、ハ、久吉方へ裏切のふた股武士の甚助め、腕立して怪我まくるな」と、股立取て身構へたり。甚助「ヤア猪口才な小童め、物な言はせず討取れ」と、いふより早く一同に、切てかよりし刃の稻妻、暫し時をぞ移しける。いらつて切込む甚助が、刃物からりと打落し、付入るさそく十次郎、切伏せくとどめの刀、相人なければ是迄と、衣紋繕ひ刀を鞘、納る不敵の十次郎、是より直に婆様の、御隠居所へ發足し、此身の出陣お願ひ申し、敵の奴原駈立て、寄手を惱まし、骸は修羅の巷に曝し、武士の本意を達せんと、勇立たる若木の花、あたら盛りの春も見ず、憂を都の假住居跡に見なして。

同九日の段

徳は咎徹に勝ち、仁は凶邪を除くとかや。されば眞柴久吉中國の大敵を攻討んと、水をもつて手をぬらさず忽ち和睦相調ひ、大物の浦に著陣ある武名の程ぞ類なき。加藤正清進出で、正清信長と云ふ鬼の再來と、おぢ恐れし春長公を、討取つたる逆賊の武智光秀、一時も早く都に攻入り、捻り殺すが君へ追善、早御用意」とせり立れば、久吉莞爾と打笑ひ、久吉「今に始め正清が勇言、ヲ心地よし。去りながら此久吉中國に發向せば、都に足を入れぬ内、伏勢を以て討取らんと、武智が結構顯然たり。迂濶に上京なす時は、過つて死地に入らん、必油斷致すな」と、軍慮に敏き久吉が、詞にあつと諸軍勢、英智を感じる計なり。折節ひよかく、濱傳ひ、藁番片手に百姓長兵衛、旅僧一人引連れて、咄し交くり行過る。軍兵共は聲をかけ、軍兵「ヤア、土民蛸坊主、眞紫筑前守久吉様の御前とも憚らず、のさばり歩く横道者控へをらう」と咎められ、長兵「ア、そんなら久吉様はそこにござるか、お坊爰ぢやとやい。ヤレ、嬉しや、マア一服しませう」と藁番どつさり高胡坐。軍兵「ヤア、まだぞんざいな蛆蟲めら」長兵「ア、コレ、其様にけん、云んすな、久吉様のお目に掛つたら、さつぱり譯が分るものぢや、ノウお坊」

程左様、大阪今里村の長兵衛、江州の観音寺の僧獻穴が参りましたと、おつしやつて下さりませ」軍兵「ヤア長兵衛でもけれん穴でも、對面なさる用事はない、きりく立て」と争ふ軍卒、眞柴久吉御聲かけ、久吉「某に對面せんとは仔細ぞ有らん、是へ通せ」と御仰、ハツと恐れて兩人を、君の御前に誘へば、久吉一人を見下し給ひ、久吉「終に見馴ぬ其方達、仔細如何に」と有りければ、長兵「ハ、テモ扱も物覺の悪いお人、わたしを見違へてござるか。ソレ、ア、いつやらの事得有た、今川とやら庭訓とやらいふ大將に負さつしやつて、春長様と二人連で、こちの内へ逃込ましやつたを、お世話申した今里の長兵衛でござりますはいの」獻穴「ハイ、愚僧は前方江州の山寺観音寺の住職致居りました時、岸田村の百姓の息子、岸田太吉といふ者を、私が小姓にして置ました時に、あなたがお立寄遊ばし、其小姓に御茶を汲したらお目にとまり、綺麗な小姓ぢや此方へおこせとおつしやる故、一言となしに若衆を獻じた、獻穴と申者、様子有て只今は今里村に侘住居、あまりお懐かしいやら、又はお願ひの筋も有り、わざく、是なる長兵衛殿と同道で参りし」と、高座馴たるしら聲はり上げ、汗押拭ひ語りける。久吉は打領き、久吉「成程聞けば一々覺の有る事、兩人とも無事で重疊シテ汝達が願ひの筋は」長兵「アイヤ外でもござりませぬ、知ての通り本能寺で、春長様をころりといはした武智光秀、昨日から俺が在所へ陣を取り、先

手の衆は京街道に出張して、お前様を殺すとの謀、憎さも憎し、お馴染のお前様、武智に討すは残念なと此お坊との咄し合、そこで俺が一生にない智慧を振出し、お前様をそつとおらが在所へ連れて逝で、思ひがけなう光秀めを、ころりと云してこまさうと、わざく迎ひに來ましてごんす。サアくく一時も早う用意して、武智を討取る魂膽さしやませ。ほんに又忘れた事が有わい、久しぶりでお目にかよつた土産は是」と菓番より、こてく取出す瓜二つ、長兵「コレ是は俺が空地に出來た真桑瓜、切てあがつて下さりませ」と、自慢らしけにさし出せば、久吉「チ明地に出來しを切て喰へとは幸先よし満足々々。殊更汝が光秀を手引して討せんとは、天晴忠臣出かしたく。恩賞褒美は兩人共、望に任せ得さすべし」と仰に悦ぶ兩人より、勝色見する味方のどよみ、皆勢ひを添へにける。かよる折しもかたへに竝ぶ稻村より、関を作つて武智の軍卒、久吉やらぬと切てかよれば、加藤正清、正清「シヤ猪口才な虻蠅共、目に物見せん」と大太刀抜て切りかくるを、受けつ流しつ亂軍の、互に鎧を削合ひ、濱手の方へ戦ひ行く。兩人は立つて居つ、長兵「こりやえらい大騒動、怪我のない内久吉様、サアくござれ」と先に立ち、歩む兩人明智の久吉、出行く僧を引戻し、ぐつと一締かたへに投退け、久吉「百姓長兵衛とは偽り、誠は武智光秀の舊臣四王天田島頭止れやつ」と聲掛られ、頭巾搔投りぐつと詰かけ、四天王「追の久吉よく察した、

汝を偽り誘き寄せ、討取んと計りしに、見顯はされて残念至極」といふより早く菓苞に、隠せし業物抜放し、久吉目がけ切付くれば、ソリヤ遁すなと軍兵共、群り寄て突かよる。鎧の穂先は篠薄、薙立てく切結ぶ、勇猛不敵の四王天、乾達婆王の荒れたる如く、突伏せ切伏せ駈上れば、あしらひ兼たる真柴方、胴を失うて見えにける。久吉も心を配り、味方の勝利覺束なしと、有合ふ僧の袈裟衣、手早に取て我身に著し、馬にひらりと飛來て、濱手の方へ只一騎、駈出す向ふへ四王天、夫と見るより繰出す穂先、得たりとかはし一散に、駒を早めてかけり行く。四天王「ヤア汚し返せ猿冠者め」と跡を慕うて追て行く。田畑畔道嫌ひなく追驅追詰四王天、額に無念の息煙立て、勢ひ込んで駈迫る。遙に夫と加藤正清、踊上つて田島頭、觀念せよと切込む太刀、心得たりと渡合ひ、雙方劣らぬ勇猛力、火花を散して戦ひしが、いらつて打込む正清が、凡人ならぬ希代の切先、あしらひ兼て四王天、漂ふ所を切伏せく、主人の安否氣遣ひと、跡に見なして走行く。さしも勇氣の田島頭、數ヶ所の深手に躓ひく、四天王「チエ、残念や、斯迄手に入る真柴久吉討洩し夫のみならずむざくと、名有勇者の首をも取らず、討死するが口惜やな。思ひ廻せば廻す程、運の強き猿冠者め、此土をはづれいつか又、彼奴を討取る期や有らん、無念々々」と云死に、爰に名のみを残したる、田島頭が身の果の哀なりける。

同十日の段

「南無妙法蓮華經」御法の聲も媚きし尼が崎の片邊、誰住む家とのふ顔も、おのが儘なる軒の袂、四邊近所の百姓共、茶碗片手に高咄し、百姓「なう婆様、こな様も見た所が、上方で歴々のお衆さうなが、何の爲に面白うもない此在所へはござつたぞいの」さつき「ア、コレ、甚作、そりや言やんな、京の町は武智といふ悪人が、春長様を殺して大騒動、大かた又下へ下つてゐるやしやる久吉殿が戻つて来て、武智と是非に一合戦、なけりや濟ぬはいなう」百姓「そんなら年寄はうかく、京の町には居られぬ、兎角危げのない様にこんな在所へ来てゐるか、大出来々々々。時に近付がてら妙見講を勤るとはよい手廻し、大な馳走に逢ひました。是から随分お互にお心安う致しませう。サア、逝う」と口々に、云たい事をたくしかけ、喋り廻つて歸りける。老母はつどく、門送り、庭の千草に打水も、たもつ葉毎に風かをる、軒を目當に來る人は、武智が閨に咲く花の、操の前は家來を遠ざけ、嫁の初菊伴うて、窺ふ切戸の庭先に、花に心を養ふ老女、夫と見るより手をつかへ、後室様の見舞として、只今參上いたせし」と、慇懃に相述る、詞に老女は打笑み、さつき「ア、珍らしい嫁女孫嫁、遙々の道ようこそ。去なが

ら悴光秀、當月二日本能寺にて、主君を害せし無法者、同じ館に膝並ぶるも、先祖の恥辱身の汚と、館を捨てて此在所へ、身退きし此婆を、見舞とはをこがましい。善にもせよ悪にもせよ、夫に付くが女の道、操の前は武智十兵衛光秀か妻、そなたは又孫の十次郎光慶が嫁でないか。生死分らぬ戰場へ赴く夫を打捨てて、浮世を捨てた姑に、孝行盡すは道が違ふ。妻城に留まつて、留守を守るが肝要ぞや。モウ寡婦暮しの楽しみには、夕顔棚の下涼捨つべき物は弓矢ぞ」と、云ひ放したる老女の一徹、跡は詞もなかりけり。常の氣質と逆はず、如何様後室様の仰やる通り、此様に只お一人ござつたら、何もかも氣散じて、マア第一はお身の養生、今から私も初菊も、後室様のお傍に居て、飯も焚たり茶も沸し、お宮仕へをせうぞいの」と、有合ふ前垂襦の、上に引締め茶釜の傍、端香の籠る姑の、しぶく機嫌を取兼る、娘心に初菊も、マどう濟む事か濁り井の、深き奇縁の釣瓶繩、水汲み上げんと立寄れば、さつき「コレ、嫁達、シテ孫十次郎は城に残つて居召さるか」操「さればでござります、十次郎が願ひには、何卒けふの軍に、高名手柄が顯はしたいと、父上迄は願ひしかど、婆様のお赦しなきに出陣するも本意でなし、母に取次してくれと、くれぐれの願ひ故餘り健氣さ、祖母様に御機嫌の程いかどぞと、窺ひに參りました」と語る内、老母は涙をはらくと流し、さつき「ア、煩さの嫁が物語り、主を討たる逆賊の邪非

道の軍の評定、聞くが厭さの此住居、が又孫を譽るではなけれ共、非道な悴光秀が子に、十次郎といふ武士が、生れて來るとは是も因縁、悔んで返らず、戦場の事聞きたうない、ア厭々情なの浮世や」と無量の思ひ百八の數珠爪繰て居たりけり。折節表へ草鞋かけ、風呂敷背にいつきせき、蛙飛込む道の邊の、清水結ばん夏の旅、西行もどきの僧一人、門口に立ち休らひ、僧實は久吉、諸國修行の一人旅、近頃申兼たれど、御宿の報謝に預りたし、押し付けながら」と云入れる、聲を老母が聞取つて、さつき「見苦しうござりますれど、お心置きなう御一宿」僧實は久吉、夫は千萬忝い、左様ならば御遠慮なしに、御免々々」とあがり口腰打かくれば二人の女、草鞋の紐を解かくれば、僧實は久吉、ア、勿體ないく、構うて下さりますな。旅仕付けた坊主の氣散じ、木納屋の隅でもついでこり、蚊屋も蒲團も入ませぬ、お心遣ひ御無用」と、詞半へ表口、人目を忍び只一騎、窺ひ立聞く武智光秀、心得がたき旅僧と、生垣押分け差覗き、思はず見合す母の顔。老母は何か心に點き、さつき「ア、わしとした事が心の付かぬ、コレ御出家様、此板圍ひが則ち風呂場、水は幸ひ汲んで有り、ついほやくと燃して、暑い時分ぢや行水して休んで下さりませ、婆も跡で相伴しませう」僧實は久吉、ア、イヤ夫には及びませぬど、相伴と有れば沸しませう。そんなら御免なされませ」と、包引提げ氣散じに、湯殿をさして入にける。味方の軍卒兩手をつき、軍卒御子息十

次郎光慶様、後室様に御願ひの筋有りと、只今是へ御越」と、いふ間程なく靜々と、家來に持せし鎧櫃、昇入させて打通り、十次「コリヤ〜者共、其方達に用事はない、陣所へ早く」と追つ立てやり、威儀を正して兩手をつき、十次「母様を以て御願ひ申せし出陣、御聞届下されなば、武士の本意」と十次郎思ひ込でぞ願ひける。老母は見るより機嫌顔　　「さつき、珍らしい十次郎、出陣の願ひとな。悴を見限り此所へ身退きしに、丁寧な願ひの筋、最前嫁女に詳しう聞きました。逆も出陣仕やるなら、祖母が願ひは此初菊、今宵此家で祝言の、盃仕てから門出仕や。何と嫁女嬉しいか」と老の詞に初菊は、飛立計り氣もいそぐ、心の悦び穂に出る、顔は上氣の夏楓、色も媚く計りなり。只默然と十次郎、今日初陣に討死と、覺悟極めし此體、お暇乞に参りしと、知らせ給はぬ悲しやと、涙吞込み忍び泣。操の前も立上がり、「祖母様の御機嫌の變らぬ内に固の盃、さつき「ア、それ、孫も大かた心せき、操は九獻の用意仕や、十次郎が初陣の、鎧の役はすぐ花嫁」三國一の悲しみと、知らぬ白齒の孫嫁が、手を引連れて、三人は奥の一間へ入りにけり。残る蒼の花一つ、水上かねし風情にて、思案投首萎るゝ計り。漸涙押し止め、十次「母様も祖母様にも、是今生の暇乞、此身の願ひ叶うたれば、思置く事更になし。十八年が其間、御恩は海山かへがたし。討死するは武士の習ひと思召し分けられて、さき立つ不孝は赦して給へ。

二つには又初菊殿、まだ祝言の盃を、せぬが互の身の仕合せ、わしが事は思切り、他家へ縁付して下され」討死と聞くならば、さこそ歎かん不便やと、孝と戀との思の海、隔つ一間に初菊が、立聞涙轉出で、わつと計に泣出せば、はつと驚き口に手を當て、十次「ア、コレく」聲が高い初菊殿、扱は様子」初菊「アイ残らず聞いて居りました、夫の討死遊ばすを、妻が知らいで何とせう。二世も三世も女夫ぢやと、思うてゐるに情ない、盃せぬが仕合せとは、餘り聞えぬ光慶様、祝言さへも濟ぬ内、討死とは曲がない。わしや何ほうでも殺しはせぬ、思ひ止つて給はれ」と、絶りの歎けば、十次「ア、コレ此方も武士の娘ぢやないか、十次郎が討死は兼ての覺悟、祖母様に泣顔見せ、もし悟られたら未來永々縁切るぞや」初菊「エ、」十次「サアとかういふ内時刻が延びる、其鎧櫃爰へく」初菊「アイく」十次「サ早う、時延る程不覺の元、聞分けな」と呵られて、「いとしい夫が討死の、首途の物具付るのが、どう急がるよものぞい」と、泣くく取出す緋緘の、鎧の袖に降かよる、雨か涙の母親は、白木に土器白髪の婆長柄の銚子蝶花形、首途を祝ふ鬘斗昆布、結ぶは親と小手脚當、六具固むる三々九度、此世の縁や割小札、猪首に著なす蹴形の、あたり眩ゆき出立は、夾なりし其骨柄、「ナ、適武者振勇ましと、高名手柄を見る様な、祝言と出陣を一緒の盃、サアく早うと、目出たいく」嫁御寮」と、悦ぶ程猶彌増す名残、こんな殿御を持ながら

是が別れの盃かと、悲しさ隠す笑ひ顔、「随分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」と、跡は得いはず喰締る、胸は八千代の玉椿、散りて果なき心根を、察しやつたる十次郎、包む涙の忍びの緒、しほりかねたる計なり。哀れを爰に吹送る、風が持てくる攻太鼓、氣を取り直し突立上り、十次「いづれもさらば」と云ひ捨てて、思ひ切つたる鎧の袖、行方知らずなりにけり。「ナウ悲しや」と泣入る初菊、母も操も顔見合せ、「ばよ様、嫁女、可愛やあつたら武士を、むざく殺しにやりました」十次「ナウ初菊、十次郎が討死の出陣とは知りながら、なま中止て主殺しの憂死恥を曝さうより、健氣な討死させん爲、祝言によそへて盃をさしたのは、暇乞やら二つには、心残りのないやうと、思ひ餘つた三々九度、ばよが心のせつなさを、推量仕や」と計にて、始めて明す老母の節義。聞く初菊も母親も、一度にどうと伏まるび、前後不覺に泣叫ぶ。襖押明け何氣なう、つかく出る以前の旅僧、僧實は久吉「コレく」かみ様、風呂の湯が沸きました、どなたぞおはいりなされませ」と、いふに此方は泣顔隠し、十次「ナ、夫は御苦勞ながら、年寄に新湯は毒、跡は若い女子共、マアお先へ御出家から」僧實は久吉「いかさま湯の辭儀は水とやら、左様ならば御遠慮なし、お先へ參る」と立上れば、三人は涙押包み、奥の佛間と湯殿口、入るや月漏る片庇。爰にかり取る眞柴垣、夕顔棚の此方より、顯れ出たる武智光秀、必定久吉此内に、忍び居るこそ究竟

一、只一討と氣は張弓、心は矢竹藪垣の、見越の竹を引そぎ、小田の蛙の啼音をば、止めて敵に悟られじと、差足拔足窺ひ寄り、聞ゆる物音心得たりと、突込む手練の鎧先に、わつと玉ぎる女の泣聲、合點行かすと引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒。光秀「ヤアこは母人か、しなしたり。残念至極」と計にて、追の武智も仰天し、只茫然たる計なり。聲聞付けて断出る操、初菊諸共走出で「ナウ母様か情ない、此有様は何事」と、縋り歎けば目を見開き、さつき「歎くまい歎くまい、内大臣春長といふ、主君を害せし武智が人類、斯成果つるは理の當然。系圖正しき我家を、逆賊非道の名に穢す、不孝者共惡人共、譬がたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲。主君を討つて高名顔、天子將軍に成た逆、野末の小家の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立ば、盛相飯の切米も、百萬石に優るぞや。儂が心只一つで、驗は目前是を見よ。武士の命を断つ、刃も多に此様な、引そぎ竹の猪突鎧、主を殺した天罰の、報は親にも此通り」と、鎧の穂先に手をかけて、抉り苦しむ氣丈の手負。妻は涙に咽返り、強「コレ見給へ光秀殿、軍の首途にくれぐも、お諫め申た其時に、思ひ止つて給はらば、斯した歎きは有まいに、知らぬ事とは云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞ。せめて母御の御最期に、善心に立歸ると、たつた一言聞かして給へ拜むわいの」と手を合し、諫めつ泣つ一筋に、夫

を思ふ恨泣、操の鏡曇りなき、涙に誠あらはせり。光秀は聲あらよけ、光秀「ヤア猪口ざいな諫言立、無益の舌の根動かすな。遺恨を重ぬる尾田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我が諫を用ひずして、神社佛閣を破却し、惡逆日々に増長すれば、武門のならひ天下の爲、討取つたるは我器量。武王は殷の紂王を討ち、北條義時は帝を流し奉る、和漢俱に無道の君を弑するは、民を安むる英傑の志、女童の知る事ならず、退り居らう」と光秀が、一心變ぜぬ勇氣の眼色、取付く島もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓、耳を貫ぬく金鼓の響、あはやと見やる表口、數ヶ所の手疵に血は瀧津瀬、刀を杖に踰ほひく、立歸つたる武智が一子、庭先に大息つき、十次「親人是におはするや」といふも苦しき斷末魔、見るに驚く母親より、娘は傍に走寄り、「なう痛はしや十次郎様、ばゝ様といひお前迄、此有様は情ない。お心慥に持つて給へやいの」と取付いて、介抱如才泣く計。光秀わざと聲荒らけ、光秀「ヤア不覺なり十次郎、仔細は何と、様子はいかに、具に語れ」と呼ばれば、はつと心を取直し、十次「親人の差圖に任せ、手勢すぐつて三千餘騎、濱手の方に陣所をかため、今や歸國と相待つ所に、敵はそれ共白浪の、櫓を押切て陸地に漕付け、追ひ追ひ都へ馳登る、眞柴の軍勢ござんなれと、関をつくつて味方の軍兵、縦横無盡になぎ立つれば、不意を打たれて敵は廢亡、狼狽騒ぐを追立て、追詰め、爰を先途と戦ふ内、後の方より大音上げ、

眞柴筑前守久吉の家臣加藤正清是に有り、逆賊武智が小童共目に物見せてくれんと、いふより早く太刀拔かざし、四角八面に切立てられ、瞬く間に味方の軍卒、残らず討死仕り、無念ながらも只一騎、立歸つて候」と息繼ぎ、あへず物語れば、光秀怒の髪逆立て、光秀「ヤア云甲斐なき味方の奴原。シテ四王天田島頭は」十次「さん候、四王天は、目ざすは久吉一人と、昨朝よりの一騎がけ、亂軍なれば生死の程も、慥にそれと承はらず。親人の御身の上心にかより候故、未練にも敵を切抜け、是迄落延歸りしぞや。此所に御座有ては危ふしく、一時も早く本國へ、引取り給へ、サ早く」と、深手を屈せず爺親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞くに老母はせき兼て、さつき「アレあれを聞きや嫁女、其身の手疵は苦にもせず、極悪人の悴めを、大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀、子は不便にないか、可愛とは思はぬかやい。儂が心只一つで、いとし可愛の初孫を、忠と義心に健氣なる、討死でもさす事か、逆賊不道の名を穢し、殺すは何の因果ぞ」と、せぐり苦しき老の身の、聲聞き付けて十次郎、十次「ヤアそんなら祖母様には、御生害遊ばしたか、今生のお暇乞、今一度お顔が見たけれど、もう目が見えぬ。父上、母様、初菊殿名残惜や」と手を取て、妹脊の別れ愛著の、道に引るよいぢらしさ。母は涙に正體なく、操「討死するも武士の慣といへど、情ない、十八年の春秋を刃の中に人と成り、いつ樂しみの隙もなう弓矢の道に目をゆだね、今朝

の首途の其時にも、母様今日の初陣に、適高名手柄して、父上や祖母様に譽らるよのが樂しきと、につと笑うた其顔が、わしや幻にちら付いて、得忘れぬ」と口説立て、口説立れば初菊も、「ほんに思へば此身程、はかない者が世に有らうか。とけてあふ夜のきぬぐも、永き名残の云號、二世を結ぶの枕さへ、かはす間もなう此様な、悲しい別れをする事は、マどうした罪か情ない。わたしも一所に殺してたべ、死たいわいな」と身を悶え、互に手に手を取かはし名残涙の暇乞、見るに目もくれ心消え、母も老母も聲を上げ、わつと計に取亂せば、遺勇氣の光秀も、親の慈悲心子故の闇、輪廻の紐に締め付けられ、堪へ兼てはらくく、雨か涙の汐境、浪立騒ぐ如くなり。又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲、喧く、手に取る如く聞ゆれば、光秀聞より突立上り、光秀「アノ物音は敵か味方か勝利如何に」と庭先の、すね木の松が枝踏しめく、よち登り、眼下の村手を屹度見下し、光秀「和田の御崎の弓手より、追々つづく數多の兵船、間近く立たる魚鱗の備、千生瓢の馬印は、疑もなき眞柴久吉、風を喰つて此家を逃延ひ、手勢引具し光秀を、討取る術と覺えたり」といふより早くひらりと飛下り、「草履摺の猿面冠者、いで一挫ぎ」と身繕ひ、勢ひ込んでかけ出せば、久吉「ヤアく、武智光秀暫く待て、眞柴筑前守久吉對面せん」と呼はつて、三衣にかはる陣羽織、小手脚當も優美の骨柄、悠然として立出れば、光秀見るより仰天し、駈戻つては

つたと睨み、光秀「ヤア珍らしと眞柴久吉、武智十兵衛光秀か、此世の引導渡してくれん、觀念せよ」と詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の、子故に手紙屈せぬ老女、さつき「なう久吉様、我子に代る此母も、天命遁れぬ引そぎ鐘、作りし罪の萬分一、亡ぶる事も有らうかと、思餘つた此最期。武智が母は逆礫に、かよつて無慙の死を遂しと、末世の記録に残して給へ。それもやつぱり悴めが、可愛さ故の罪亡し。うるさの娑婆に残らんより、孫と一緒に死出三途、ハアわたしもお供致しまする、いづれもさらば。おさらば」と、未練残さぬ武士の、花も實も有る此世の別れ、今ぞ果なく成りにけり。操の前も初菊も、更に詞も出でばこそ、あへなき骸を推動かし、天にあこがれ地に伏して、歎く心ぞいぢらしき。哀を餘所に眞柴久吉、光秀に打向ひ、久吉「俱に天を戴かぬ亡君の弔ひ軍、今此所で討取ては、義有て勇を失ふ道理、諸國の武士に久吉が、軍功をしらさん爲、時日移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべし、がいかにく」光秀「チ、遺の久吉よくいうたり、我も惟任將軍と勅許を請し身の本懐、一先都に立歸り、京洛中の者共へ、地子を赦すも母への追善、互の運は天王山、洞が峠に陣所を構へ、只一戦にかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ」久吉「ホ、ホ、何さく、たとへ項羽が勇あり共、我又孫吳が秘術をふるひ、千變萬化にかけ惱まし、勝鬨上るは隣内」と久吉が、詞は揺がぬ大磐石、忽ち廻り小栗栖の、土

に哀を残すとは、知らず知られぬ敵味方、睨み別るよ二人の勇者、二世をかためた別の涙、かかれとてしも烏羽玉の、其黒髪をあへなくも、切拂うたる尼が崎、菩提の種と夕顔の、軒にきらめく千生瓢箪、駒の嘶迎ひの軍卒、見渡す沖は中國より、追ひ追ひ入來る數萬の兵船、威風凛々凜然たる、眞柴が武名假名書に、うつす繪本の太功記と、末の世までも 三重残しけり。

同十一日の段

與三家來共やい、彌明日は山崎にて晴軍、時に抜目ないは久吉殿、敵方の間者、又怪しき曲者も有らんかと、此赤山與三兵衛へ密々の申付、汝等もぬかりなく、若や怪しき者も有らば、男女に限らず搦取つて本陣へ差出せよ、褒美は急度後日に御沙汰、必ずぬかるな合點か」と、示し合せて主従は、左右へこそは別れ行く。身は世を忍ぶ簑笠に、やつす姿も柵が、夫の詞守立し、主君の種の音壽丸、いたはり傳き參らせて、心ならずも夜の道、流に傳ふ淀堤、竝木の蔭に立休らひ、柵ナウ和子遙の西に旗の手の、月に映じてきらめくは、山崎の御本陣、父上の御座所、妾が夫政道殿も主君の御供、翌は早々光秀様に御對面、お嬉しうござりまするかへ「音壽「チ、嬉しいく、早う父様に逢ひたいけれど、どうやら眠たい」と、詞の内に、ふらく

眠り。柵ヲ、道理でございます、大切の密事を受けた俄の旅立、若や敵の間者に出合ひ、御身の御難儀有りもやせんと、心は千々に誰有らう、江州丹州兩國の御主、今では四海の御大將、惟任將軍の御公達、あまたの從者に引かへて、從ふ者は此柵、支柱とも思召し、御心根がおいとほしい。是といふのも父上の、道に背きし御企、たとへ望は叶うても、勿體ない御主君の、春長様に刃を合し、主殺しの大罪と、世の口の端に情ない。夫に連れたる我夫も、俱に汚名を下すかと、思へば悲しい」と、人目なければ聲上げて、わつと計に泣沈む、心ぞ思ひやられたり。立戻りたる赤山が、夫と見るより相圖の呼子、友呼ぶ千鳥はらくと、顯れ出し以前の組子、與三女遣らぬ」と追取巻く。驚きながら遺の柵、音壽を圍うてすつくと立ち、柵「ヤア心得ぬ人々の舉動、何者なるぞ」と咎むれば、赤山は大口明き、與三「ヤア何者とは舌長し、主殺しの光秀が一子音壽丸、軍の幸先久吉公へ差出す、早く渡せ」と罵つたりの柵「ホ、ホ、事可笑しや、光秀公のお内にて、人も知たる松田太郎左衛門が女房柵、主なしの久吉殿、夫に隨ふそち達か、及ばぬ事を」と言はせも立す、「ソレ者共」と赤山が、下知に従ひ一度に切てかゝるを事ともせず、右と左に薙立れば、口程にもなき雜人原、むらくと逃散つたり。透を窺ひ後より、切込む赤山、そくの柵、ひらりとかはせば赤山が、首は前にぞ落ちにけり。柵「サア、サア、此際に音壽様、此場を早う」と甲斐

甲斐しく、忠義一途の女氣に、主君の若を伴ひて、定めなく、短夜に、心せかれて辿り行く。

同十二日の段

誰を乞ふ鳴くや梢に唐衣、ほつてふ蟬の音を友と、世を厭うたる浪人の、風雅を好む一構、谷の流も水無月の、空半なる夕暮時、遠寺の鐘のかうくと、兼ての願ひあり磯海、深き思ひに柵が、縁に寄邊の舅の住家、そこ爰と辿りくるく、長嶮、稚子連て夜の道、漸尋あたりにも、家居なければ爰ならんと、柴の軒端に佇みて、柵「イヤなう音壽様、夫松田太郎左衛門殿の差圖を請て來る事は來ても、つひに是迄音信もせぬ親御の所、どうやら敷居が高うなり、閃にくう思ひます」と、言へば音壽が打點頭き、音壽「そなたが得閃らば俺から先へ閃つてやらう」と、何の頑是も上口、「ア、コレ申」をしばにして、閃る物音何やらんと、納戸を出る妻の眞弓、顔見合して柵が、手をもぢくと、柵「ホ、ホ、ほんに私とした事が、いかに舅君の所ちや逆、案内なしに不作法千萬、お赦しなされて下さりませ」と、いへど此方は不審顔、眞弓「夜に入て若い女中の子供をつれ、舅の所へ來たと、此母は覺えはござらぬ」柵「成程々々、委細の譯を申さねばさう思し召すも理りながら、私事は十三の時家出致されました、御子息宗太郎殿の女房柵と申者、夫も今

は歴きとした侍、名も改て松田太郎左衛門と申まして、夫はく、適の武士、どうぞ是迄の事は川へ流し、元の親子に」眞弓「チ、そりや云しやれいても知れた事、元より氣に違うて家出したと云ふでもなし、生れ付ての力強、草深い住居を嫌ひ、我と我手に家出した宗太郎、わしは明暮焦れて居ます。そして連てわせたは、夫婦の中に出來た子か。マアく、此方へ」と嬉しさの、子には目のなき母親が、悦ぶ中へ宗左衛門、刀片手に歩出で、宗左「お婆何をべりくお言やるぞ、親を見捨てた不孝の躬、夫に連添此女郎、嫁なんぞとは穢らはしい、早立ち歸れ」とつかふどに、言ふを押へて、眞弓「ア、コレ夫は一途な思ひ様、毎日々々壁訴訟、願ひの折も幸と、初めて逢うた嫁の手前、どうぞ了簡し中直りして下され」といふも涙の種ならん。宗左「エ、又してもく役に立ぬ悴が訴訟聞きたくないぞ。よい年をして女房去るも世間の笑、暇の代りぢや向後物は言はんず、早く奥へお行きやれ」と、常の氣質の情剛に、詞はなくてしをくと、心残して立て入る。柵は氣の毒の、中に願ひも言ひ兼て、俄に作る輕薄笑、眞「ホ、ホ、ほんにまあよしない事から御夫婦のお争ひ、もうお腹立は重々の御尤ぢやが、どうぞ夫の願ひ、則ち此子は主人と仰ぐ光秀公の御公達音壽丸様、夫に付ての御訴訟」と何か様子は白紙に、書き認めし願ひの一書、舅の前にさし置けば、遺骨肉同胞の、我子の手跡と澁々ながら、手に取上て押開けば、様子いか

がと氣遣ふ嫁。舅は猶も眉を擧め、つぶく讀むも口の中、卷納めて嬌乎と笑ひ、宗左「何事ならんと思ひしに、少し計は侍、臭い所も有り出かすく」眞「そんなら夫の願ひと申すは」宗左「成程大切の密事、其方は知るまいく。悴が我への願ひといふは、コ、此小兒。光秀此度當山崎に於て合戦の挑むといへ共無名の軍、元より主殺しといふ大罪、天何ぞ是を赦さん、然らば十が九つ負軍と押計つたる悴太郎、去によつて光秀が一子音壽、我に養育を頼み、成長の後には出家ともなしくれよとの願書、又柵事は敵方森尾茂助が妹に候へば、是も親が手より返置しくれよと有る悴が文面」と聞て恠り柵は、膝摺寄つて、眞「ム、スリヤ主君の若殿お預申さん其爲に、お詫の使と、一には私が身の上兄様へ返してくれとは何の事、さういふ事とは露知らず、舅御様へお詫して、嫁よ如何せい斯せいの、お詞受て歸りなば、夫の悦び此身の手柄と悦んでるものを、科もない身を去ふとは聞えぬ夫の心や」と、口説き歎くぞ道理なり。宗左「ハア、折々は久吉殿の招に預り咄の伽、弓も引き方眞柴へ心通はず某、大惡無道の光秀が種と有れば、願うてもないよき得物、首打放し久吉公へ獻するならば嘸悦び、ハテ飛んで火に入る夏の蟲とは是ならん」と、舅の一言柵が、聞くより又も二度恠り、眞「ほんにく親子とて餘りな情知ら

す、獵人さへ懐へ入る鳥は助けるもの、縦令此身は去られても、夫に立る心の潔白、女でこそあれ松田が女兵、主人の若殿滅多にお首は得渡さぬ。斯いふ内に片時も、置きます事はなりませぬ。申し若殿様、いざさせ給へ」と立寄るを、突退けく音壽丸小脇に引抱きはつたと睨み、宗左「ヤア龍の腮にかよりし小悴、連歸らんとは叶はぬ事、悪く妨げひろぐや否や、身の爲にならぬがや」無「チ、元より夫に去られし此身、生て詮なき我命、ちつ共厭はぬ」と、又立かよるを「シヤ面倒な」と眞の當、呷と倒るゝ其隙に、奥の間さして駈入たり。跡には一人柵が、苦痛堪へて起直り、無「チエ、胴欲とも惨い共、何に譬へん舅君、何辨へも七つ子の、首を敵に渡さうとは、心は鬼か蛇かいなう。たとへ此身はひしぐほに成る逆も、取返さいで置べきか」と心を配る縁先に、落散る一書は夫の手跡、柵殿へ光高より。「スリヤ最前の文の中に封込めたる此一書、心ならず」と封押切り。「書残す一書の事。ヤアくそんなら夫太郎左衛門殿は、討死の覺悟で有るか。ハア何にもせよ」と又取上げ、無「ナニく今度の合戦、主君光秀公主殺しといふ悪名、其罪遁るゝ事有るまじく覺え候故、其方を頼み親人へ若殿の儀くれぐれ相頼む事に候、又々明朝の戦ひに向ひ候敵は、其方が兄森尾茂助春久に候よし、元より討死の覺悟に候へば我等が首は春久へ遣し候。なれ共妹の縁につれ用捨も候はゞ、武門の中恥づべき事に候へば、是非なく暇遣し候段、

必ず恨有るまじく候」と、讀みも終す立上り、無「こりや斯しては居られぬわいなう。夫の最期は此曉、若殿の御身の程、奥へ踏込み取返さうか、イヤくく、あれくあの鐘は八つの鐘、天王山へは一里の餘、夫の命も助けたし、こりやマアどうせう」と、主と夫の身の上を、我身一人に柵が、立たり居たり詮方も、涙ながらに氣を取直し、無「何にもせよ是より直に天王山へ駈付け、夫に一言、さうぢやく」と帶引締め、常には弱き女氣も、夫に立る貞心の、曇らぬ鏡照る月に、照す道筋一散に、仆つ轉びつ慕ひ行く。山は血汐の唐紅、敵も味方も入亂れ、戦ひ挑む其中に、森尾松田が雌雄の争ひ、人混もせずはつしく、切結びたる電光の、刃の光飛鳥のごとく、鎧を削る其折しも、夫の生死如何ぞと、氣は張弓の女房柵、武家の育の甲斐々々しく、夫を思ふ一心に、木の根岩角獣ひなく、登る嶮岨も力草、足踏しめて難なくも、此方の岡に攀登り、夫と見るより分入て、無「マアく待て」も、身を惜まず支ふる女房突退けて、猶も付入る太郎左衛門、互に劣らぬ勇將猛將、中にうろく詮方も、渚の小舟柵が、浪に漂ふ其風情、心も切に有合ふ楯、切結びたる白刃のしづ、しつかたとどめ、無「マアく待て下さんせ、コレ兄様茂介殿、必ず早まつて下さんすな。元より知た敵味方、討ちうたるゝは武士の身の、常とは知て居ますれど、相手も多いに姫同士、切つはつゝの争ひを、何と見捨て置かれうぞ、思止つて」と、歎き唧つを耳にも

かけず、太郎「ヤア義晴何を猶豫、内證の縁は縁、親子兄弟敵々と、鎬を削るは武門の常、早く勝負を決せよ」と、云せも果す嬌乎と笑ひ、義晴「死人同前の政道、我相手には不足なり、光秀が先途を見届け死る共遅かるまじ、妹が止るを幸ひ、此場を早く退け」と聞くよりくわつと急立ち、太郎「ヤア奇怪なる一言、弓矢取ては誰に恥べき事や有らん、女房が兄とは云さぬ、首討取て修羅の奴となしくれんに、死人同前とは案外なり」と居丈高、義晴「イヤモ如何様に陳するとも、死色を顯す汝が骨格、我に討れん心の覺悟、死人と云しが誤りか」と、明察違はぬ一言は、胸に磐石現とも、心は暗の柵が、聲も涙に搔曇り、無兄様のあの心なら、どの様に思はしやんしても、所詮死れぬお前の命、どうぞ死すに濟む事なら、千年も萬年も長生して、二人の中の、サア二人が中に預かつた、主人のお種音壽様の、行末も御無事な様に、思案して下さりませ、コレ申し、夫婦と成て以來に願ひといふは是一つ、聞届けて給へ我夫」と、妹が歎き遺にも、血脈の糸の亂れ口、涙呑込む義晴が、心の内ぞ切なけれ。何思ひけん太郎左衛門、鎧脱捨てどつかと坐し、太郎「實や名將の下に弱兵なしと、適眼力森尾義晴、主家の無道を見限りて、死出三途の先陣と、覺悟極めし心は鐵石、死後に頼むは此女。又是迄音信せされ共、實父松田利休殿へ預置たる彼若殿、心を添へてよき様に、頼置は貴殿一人。最早浮世に望なし急ぎ首討ち我存心、立さしくるよも武士の情、猶豫

は返つて恨むぞ」と、言ふより早く持たる刀、腹にがはと突立れば、なう悲しやと取継り、歎く女房を取て引据ゑ、太郎「サア森尾、名もなき士卒の手に掛んより、武士の情に我首を、受取くれよ」とさし付れば、春久「ハ、世の有様とは言ひながら、かばかり惜き弓取も、主家の悪事は其身の不幸、残念至極」と義晴が、是非も涙に立廻れば、太郎「ヤア愚かく、死に臨むは勇者の本義、骸は廣野に曝す共、名は千歳に留まるこそ、死しての悦び此上なし、早く」と唱名の、聲は此世の別かと、身を揉む妻を動かさず、膝に引敷く強氣の手負。義晴いざと潔き、勇者の最期あへなくも、首は前にぞ落にけり。わつと計に柵は、其儘死骸にいだき付き、聲も惜まず泣叫ぶ。心を察し諸袖を、絞るも血筋恩愛の、涙に變りなかりける。義晴は涙を拂ひ、義晴「ヤア、妹、歎いて反らぬ松田が最期、遺言守るは音壽が身の上。又此首はそち持歸り、佛事もよきに」と詞の中、籠の方を、響き靡ける兩陣の、入亂れたる鬨の聲、身にぞこたふる柵が、涙ながらに亡夫の、しるしの筐、上帯に、包むも涙雨やさめ、ふり行末の末迄も、思ひつゞけし敵味方、兄の忠臣妹が、貞心くもり泣く、籠の方へ、三重辿り行く。短夜の、風吹拂ふ庭の面、隈なき月も哀添へ、涙の露かいたいに、無慚なるかや稚子の、目は泣はらし袖摺の、其松が枝に絡まるよ、妻の眞弓は差寄て、眞弓「ナウ利休殿、尤武智光秀といふ逆賊の子とは云ながら、我子の爲にお主の若殿、

手にかけてとは胸欲な、どうぞお命助ける様、思案仕變て下さりませ」と、いへども更に答へなく、おのが好める薄茶の手前。稚子は座をしめて、音壽「おりや侍の子ぢやによつて何ともない、早う殺して下され」と云ひ放したる健氣さを、聞くに眞弓は堪兼て、眞弓「ア、道は武士の育がら、聞分よい程尙不便な。コレいぢらしうはござらぬか、敵と味方と分登る、道は一つにかはれ共、同じ雲井に照る月の、分隔なき恩愛と、情の道を辨へて、どうぞ命を助るやう、思案して給へ我夫」と詞を盡し理を責て、涙ながらに泣詫る。山手は修羅の攻鼓、時しも遙に飢して、「松田太郎左衛門政道を、森尾義晴討取り」と聞くより思はずつくつくと立ち、「スリヤ悴宗太郎は、早討死を遂しとな、此上は生け置いて詮なき音壽、此世の暇取らせん」と、解く縛め悦んで、手そよぶりする有様を、見るに心は弱れ共、四海の怨敵根を断て、枯す枝葉と抜放す。「なう痛はしや」と支ふる眞弓寄るを寄せじと引戻し、争ふ折も柵が、背に夫の切首を、結ぶ妹脊の別れ道、脛もあらはにかけ戻り、此體見るより、稚子を後に圍ひ、「マア待て」と、言はせも立てず聲荒らけ、宗左「ヤア此期に及び聞く事ない、悴討死せし上は、天王山を取切れ、光秀が敗軍も目下、妨げせずとそこ退け」と、突き刀振翳す、其手に取付聲震はし、眞弓「コレ親父殿、慈悲も情も辨へながら、初て逢た嫁の思はく、生としいける身ではなし、先立老木若木の荅、どうぞ助けて進せて」と、涙に誠姑が、情の詞

身に餘り、有難涙欄が、夫の首を抱上げ「なき我夫も諸共に、命のお詫」とさし付られ、遠剛氣の利休も、親子の輪廻に引かされて、撓む心を取直し、じりよくと付廻す、地獄の呵嘖三惡道、シヤ面倒なと突退け蹴退け、エイと一聲稚首、水もたまらず打落せば、二人はわつと泣倒れ、正體もなく伏沈む。宗左「主殺しの大罪報いも早き此死さま、いで久吉の本陣へ」と、駈出す裾を止むる嫁、はつたと蹴飛し駈行く向ふへ許多の軍卒、高挑灯に威風を照し、静々入來る眞柴久吉、あたり輝く陣裝束、思ひ寄らねば宗左衛門、遙退つて平伏し、「コハ存じ寄らざる公の御入來、只今陣所へ推參の所、願ふてもなき對顔」と、敬ひ深く相述べ、久吉莞爾と打笑て、久吉逆賊光秀が一子音壽丸、足下扶助致さる由、家臣森尾が密事の注進、急ぎ討手と申すも餘り仰々敷く、久吉密に向うたり。いかに〜と嚴然たる、詞に猶も恐入り、宗左「ハ、計らず手に入る武智が悴、討取たるは某が、信義を忘れぬ兼ての交り、イザ御改め下さるべし」と、血汐を清め差出せば、久吉とつくと實檢有り、久吉「父光秀も此如く、やがて討取る主君の怨敵」とは云物の稚者、不便の最期遂たるよな。イヤナニ宗左衛門、云ば小兒の此切首、梟木にさらすにも及ぶまじ、由縁の方へ、サ葬り召され。御邊への恩賞は、風雅を好める別業へ、思ひ寄つたる寸志の一品、それ〜者共、早是へ」と仰の下に雜兵共、庭にどつさり一つの居石、久吉何と宗左見られしか、亡君

春長公の御自服とも思されて、お請有らば拙者が悦び」宗左「スリヤ其石を某へ」久吉「いかにも小袖代の小袖石、菖蒲にも、あらぬ真菰を引かけし、かりの淀野の、忘れぬかな。ヲ、さらばさらば」と一禮し、従者引連れ久吉は、本陣さして歸らる。跡見送つて宗左衛門、ほつと吐息も突詰し、女心の柵は、何思ひけん表の方、駈出す戸口立切る利休、宗左「ヤレ待て女、音壽丸が身代りに、二人が中の駈を殺し、夫が最期の忠義も立ち、嘸本望で有らうな」と、聞て恠り、冊ムウそんなら此子を初めから、あなたの孫といふ事を」宗左「ヲ、十六年が其間、對面せざる我が勲、たとへ幾年経る逆も、骨肉分けし此親が、見忘れてよい物か。音壽丸に出立たせ、連れ來りし稚子の、面ざし目元鼻筋迄、悴に其儘生寫し、其時孫とは知つたるぞや。とは云ひながら、現在の、祖父が手にかけ一刀の、下に消行く不便さを、こらふ心四苦八苦、コリヤ推量せよ」と大聲上げ、取亂したる溜涙、眠れる如き死首を、右と左に打守り、宗左「コリヤ悴、久々にてよく來たなア。十六年が夢の内、忠孝全き親子が最期、ヲ、出かしをつた」と一言が、夫子の爲の經陀羅尼と、有りがた涙欄が、袖に露置く嘆言、冊「さうしたあなたのお心と、知らで恨みし不孝の罪、お赦しなされて下さりませ」眞弓「ア、其詮言は此母が、云はねばならぬ此場の時宜、孫と我子の死ぬるのを、夫と白髮の身の因果、慘い者ぢやとさけしんで、給もるなやいの」と姑が、

詫ぶるも涙聞く涙、冊「ア、勿體ない事おつしやつて下さりますな、嫁とは名計是迄に、お宮仕へもする事か、逆様事を見せまする、不孝の罪が恐ろしい。とはいふ物の味氣ない、二世と契りし我が夫の、最期の場所に居ながらも、止める事さへ情ない、いとし可愛の千石迄、人も多に祖父様の、お手にかけうと親の身で、連れて來事は何事ぞ」と、歎けば遺利休も、恩愛死別の憂涙二つの首を見つ見せつ、取亂したる三人が、涙の雨に水嵩の、いとど増りて淀川の、堤も崩るゝ如くなり。利休漸涙を押へ、宗左「悴が忠義を立させんと、信義を失ふ我が計ひ、天地を見抜く久吉殿、賜も有るべきに、小袖にかへて遣はすと、心得ぬ庭の居石、其上猶も不審なるは、金葉集に載せられし相摸が詠歌、菖蒲にも、あらぬ真菰を引かけしと、引きぞ煩ふ頼政が、深意を取るは千石が、最期を花によそへし謎。駈が子袖千石と、心を込めし我への賜、今こそ思ひ當つたり」と悟るも遺久吉の、名智を感じる計りなり。柵は膝摺寄せ、冊「スリヤ身代りといふ事を」眞弓「そんなら孫の千石が、身代りに立たたのも、水の泡になりますかいなう」宗左「ヤアかねがね、敵を恵む寛仁大度、猶も願ひを立んと思はど、此利休が皴腹一つ、必ず止な」と指添を、既に抜かんとする所、取付き歎き止むる二人、放せくと争ひの、折もこそあれ一間より、久吉「ヤア、松田宗左衛門利休殿、狼狽ての犬死なるか、早まられな」と聲をかけ、障子をさつと眞柴久吉、し

づしづ立出れば、思寄らねど騒がぬ利休、宗左「ヤア犬死とは事をかしゃ、誠眞の失せし某が、既に報ふ此切腹」久吉「ホ、遺は老體、斯も有らんと察せし故、陣所へ歸る體に見せ、とくより忍び窺ひ聞く。西國の探題たる眞柴久吉、實檢遂けし光秀が一子、天地廣しといへ共、今一人と有るべきか。主君を弑せし武智光秀、夫に引かへ子息政道、討死遂しは適勇者。せめては死したる人の、菩提の爲に此所へ、庵を結び利休殿、久吉「好める道の茶を以て、往來の人に施さば、死するに増る節義ならん」と情の一句は則ち悟道、死をとどまつて松田利休、宗左「ハ、惠も厚き御仰、教の心は即菩提、心の濁墨染の、衣がはりはコレ此居士衣、くもりを拂ふ誓ひぞ」と誓ふつよと押し切つて、宗左「妾心も變る世に、我は茶道の道廣く、孫が其名の一字を取り、利休を其儘に、千の利休と改名し、浮世の塵に交はる共、只本覺の佛性たらん」久吉「ホ、ホ、天性備はる千の利休、今よりは久吉が、則ち茶道の師と頼まん」と、約束かたき小袖石、庭に哀れは稚子の、涙の種か袖すり松、古跡となりて末の代に、殘る其名の因縁は、此時よりと知られたり。かかる折しも眞柴の郎等、庭上に大息つき、御注進と呼ばれば、久吉「ホ、堀本義太夫、味方の勝利は何んとく」義太「ハア、仰の如く備へを立て、兩陣互に鎬を削り、爰を先途と戦ふ中、敵の勇將蟹江才藏、陣頭に踊出で、味方の諸軍を手玉のごとく、打付け投付け駈廻る、其勢ひに

怯恐れ、少したゆみて見えたる所に、福島の中より、至つて小兵の桂市兵衛、斯と見るより飛かより、互に組み合ふ金剛力者、六尺豊の才藏を、難なく生捕、古今の手柄、勝つ色見する間もなく、川を隔てし筒井順慶、時分はよしと光秀が、陣所を目がけ無二無三、一手に成つて攻かくれば、敵は廢亡狼狽騒ぎ、崩立つたる其虛に乗つて、追つ立てほつ詰め攻付ければ、是迄なりと光秀も、馬を飛ばして只一騎、小栗栖さして落延しを、追々駈行く味方の勝利、御歸陣有つて然るべし」と、悦び勇み訴ふれば、久吉「ヲ潔しく。イザ小栗栖へ後詰せん、旁用意」と久吉の、詞にはつと迎ひの軍兵いざ御歸陣と引居る、駒にゆらりと法の縁、結ぶ一世と二世の縁、切つて捨てたる亡魂の、しるしを直に野邊送り、又思ひ出す女氣に、涙の袖や鎧の袖、旭に映じきら／＼、綺羅一天に刈取る眞柴、仁徳なりや風雅の徳、忠孝全き其徳を、世々に傳へて 三重美嘆せり。

同十三日の段

神力勇者に勝すといへ共、天遂に是を罰す。されば武智十兵衛光秀、筒井順慶が裏切りによつて、山崎の一戦破れ、漸遁れ小栗栖の、藪蔭近くさしかよれば、追々駈來る眞柴方、「ソリヤ落人

よ遁がすな」と、喚き叫んで切りかゝれば、光秀「シヤ猪口才な蛆蟲共、冥途の導きしてくれん」と、振かざしたる刀の稻妻、瞬く内に先手の軍兵、十二三騎切て落せし勇猛力、叶はぬ赦せと一同に、嵐に誘ふ端武者共、むらくばつと逸失たり。相人なければ光秀は、太刀のいきりをさまさんと、藪の小蔭に手綱を控へ、傾く運の口惜涙、鎧の袖にはらくらく、降かゝりたる夕立の、空も哀や添ぬらん。折ふし藪の此方より、たゆみ佇む光秀が、鎧の透間を見極めて、ぐつと突込む猪突鎧、驚きながら切拂ふ、間もなく突出す竹鎧の、穂先は風の篠薄、なぎ立突立切拂ひ、暫し時をぞ移しける。梢にすだく蟬の經、手向となりし武智光秀、小手定まらぬ竹鎧を、身のごとく刺通され、流るゝ血汐に夏草を、花と染なす紅の、田畑畔道刀を杖、蹠ひ蹠ほふ無慙の有様、ほつと一息撞出す鐘、寂滅爲樂攻太鼓、修羅の迎ひの百姓共、集り寄つたる一むら雀、又突かゝる上段下段、一世の瀬戸と受流し、爰を先途と切防ぐ、手練の鋒先百姓共、叶はぬ赦せと我先に、跡をも見ずして逸散たり。遁さじものと駈出し、心は矢猛とはやれ共、身體勞れどつかと坐し、拳貫く無念の齒がみ、弱る心を取直し、光秀「一元に歸す此世の暇」刀逆手に我腹へがはと突立引廻す。程なく來たる眞柴久吉、萬里に羽うつ大鵬の威勢は旭の登るが如く、悠悠然と歩寄り、久吉「いかに光秀、主を討たる天罰の、報を思知つたるか」と、太刀拔放し光秀が、首をは

つしと打落し、諸軍に向ひ聲高く、久吉「ヤア、者共、此虚に乗つて敵の殘黨左馬助光俊、齋藤内藏助が備へを暫時に攻崩し、名に近江路の湖へ、一騎も残らず追沈めん。旁來れ」と先に立ち、勇み進んで凱歌の聲、箠を叩き凱陣の、其悦びを今爰に、うつすも勸善懲惡の端ともなれとまさな言、書き納めたる君が代の、萬々歳の壽は、中々申すも愚なれ。

繪本太功記終

近江源氏先陣館

あら玉の春立そめて御園には、木々の緑も四方の波、しづけき君が御代とかや。されば右大將頼朝公、驕る平家を西海に切鎖め、源氏一統の御威風、野邊ふす草の鎌倉御所、太平の地を占め給ふ。時は建仁三年正月元旦の御壽、二代の君右大臣實朝公、立烏帽子に緋の御装束、白書院に出給へば、上段には龍頭の兜を飾り、御母公政子の御方、武將の祖父北條相摸守時政公、先君らいてうより天下の執權を預り、孫君の御後見、御年ばいも六十餘州、自然と握る三つ鱗、其外關八州の大小名、烏帽子素袍もさごめきて、袖を列る大廣間、御盃の大流小流、縁側には猿樂の役人、祝儀の開口相勤め、諺は老松梅が枝に、弓矢立合ひ弓取の、列を正して出勤有る。ことに近江源氏の嫡流佐々木三郎兵衛盛綱、御前近く召出され、實朝仰せける様は、實朝其方儀は、親源藏秀義より二代の家人、ことに近年忠勤を擢んで、勳功他に超えたり。従つて近江の國は、元其方が故郷なれば、一國をあて行ふ間、江州へ赴き、一圓に領知致すべし」と御詔の趣承り

謹んで平伏し、盛綱不幸の某身に餘る御恩賞、有難く存じ奉る。但し一つの御願ひ、某が弟
 佐々木四郎左衛門高綱、兄弟共に先陣を相勤めしに、弟高綱に御恩賞なかりしかば、一轍の生れ
 付き、恐れながら先君を怨み奉り、且は兄の某にも遺恨をばさみ、十箇年以前鎌倉を出奔して
 行方知れず。あはれ此度の序に、弟高綱が在所をもとめ召出され、江州の内にて分地拜領なし下
 され候はゞ、猶この上の君恩に候はん」と恐れ入つて言上す。北條殿莞爾と打笑み、北條、尤の
 申條、去ながら、此度御邊を江州へ遣すは、謀あつての事、其故は先君頼朝薨去の後、嫡男な
 がら在中將頼家卿、懦弱の生れ付故に、舍弟實朝に武將を超えられしを心外に思ひ、鎌倉を立去
 つて、京都へ引こみ早三年。この頃聞けば謀叛の催ありとの風聞、江州は京都五畿七道の堺、
 關を固めて東國の軍勢を防ぐ用意ありと様々の噂、御邊の器量を見立て江州へ發向さするは、
 此方より先を取つて、京都を抑ふる。謀、中にも其方が弟佐々木高綱は、軍法の奥義を極め、
 陳平張良にも劣らぬ勇士、行方を尋ね、佐々木兄弟江州を固める用意肝要なり」とありけれ
 ば、盛綱「ハ、ア、畏り奉る、弟高綱兄弟心を一致にせば、たとへ如何なる大敵も、暫時のうちに
 取挫くは方寸のうちにある、御賢慮安く思さるべし」とお受の詞に政子の方、御墨付を給ひけ
 れば、盛綱二度頂戴し、時の面目身に施し、御前を立つて退出す。折ふし廣間に案内して、「京都

頼家公より御禮の使者參上」と相述べれば「それ待ち兼ねつ、早これへ」と仰次第に言ひ傳へ、
 鎌倉の附家老片岡造酒正春久、京都の近習比企の判官能員、遙か下つて小姓立の若侍三浦之助
 義村、十八歳の角前髪、諸士に式禮衣紋の著振、怯ず臆せぬ一器量、人に優れて見えにける。時
 政御覽じ、時政年頭の祝儀早速の參著満足せり。然しながらこの比、心得ぬ人の取沙汰、殊に
 頼朝御他界の後、京都へ退き、度々使を以て鎌倉へ招待すれども、今に於いて下向なく、酒宴
 遊興に日を送らるゝ放埒の振舞、片岡を附け置く上は、など諫言致さずや。是なる武將實朝は
 我が孫、祖父時政天下を後見する上は、武將同然の時政を侮り輕んじ申さるゝ頼家の心腹、それ
 に従ふ諸士の胸中、旁以て心得ず」と凜然たる嚴命に、恐入りたる造酒正。心を察し政子の方、
 政子一人の尊を取上れば、天道の事迄も恨み譏るは下々の習ひ、わけて頼家は自らと繼しき中、
 故殿頼朝様の愛妾、宇治殿の腹に生れ給へば、妾に隔もある様に人の云ひなし、鎌倉を狙ふ
 の、御謀叛のと、由無言を聞きたびに、自らが胸の苦しき、推量せよ片岡」と、仰にはつと頭をあけ
 造酒正「我等儀は鎌倉より、京都に添置かるゝ附家老、何れに詔ひ、何れに偽を申上ぐべき様も
 なし。頼家公鎌倉に御下向なきは、もとより多病の御生付、御殿を離れ御他行だに稀なれば、
 御疎遠の段はさして趣意ある事にあらず、實朝公時政公兩將に對して、恨み給ふ御心毛頭なし。

御謀叛などの雑説恐ろしく。身持放埒の御咎、噂に違はぬはこれ一つ。若狹と申す白拍子を殊の外御寵愛なされ、愛妾に引上げられ、夜晝わかす酒宴の興、たつて御諫め申せども、一切御用ひこれなき故、人の悪説を重ぬるも、元は好色の御過、これとても若氣の習、御齡だに長じ給はど、自ら改らん。この儀は我等に御預け、冀ひ上げ奉る」と事を飾らぬ申條、比企の判官進み出で、比企「イヤ〜」頼家公に御謀叛の心、全くないと言はれまい、正しく頼朝の御惣領を指置き、時政公指圖として、孫の實朝公を武將に立て、祖父君の後見は、自然と四海を手に握る、北條殿の計ひと疑、かよりし宇治の方、頼家公御親子の心餘り無理とも存ぜぬ」と舌三寸で内はから、比企が底意ぞ訝しき。聞兼ねて造酒正造酒正「御前をも憚らず尾籠の詞、アレ見よ、上段に飾置かれし兜こそ、源家の重寶、龍頭に蹴形打たるは、大將軍の御印、この兜を實朝公に譲り置き給ひしこそ、頼朝の明智の眼、それを今更僻事と御謀叛あるべき様はなし。御邊如きの佞人が、御側に徘徊する故、頼家公のあの御身持」比企「イヤいふまい、御身持の善惡は附家老の御邊こそ知る筈、夫さへ知らぬ造酒正、頼家公に御謀叛の心、若しあつたら何とする」と争ひ募る無道の判官、末座に控へし三浦之助つと出で、三浦之助「御前なるぞ、靜まられよ。最前より兩人とも何の詮なき争ひ、頼家公に御別心の有無は申すに及ばぬ事、凡そ謀叛とは下

より上を討たんと圖る、これを謀叛人といふ。若けれども頼家公は、正しく先君頼朝様の御惣領、時政公今武將の祖父君にもせよ、元御家來には相違なし。頼家公「憤り思召すことあらば、時政公に切腹あれと仰せられても濟む事、何が恐うて御謀叛なざるべき。下から思ふ私量見、控へ召され判官殿」と一句に靜める三浦が才智、人々感ずるばかりなり。時政御機嫌斜ならず。時政「三浦之助これへ參れ」と御座近く、時政「その方いまだ面を見知らず、若年に似合はぬハテ器量の若者よな。今よりしては造酒正同前、心置なく往來せよ、對面のしるし、それ〜」と三浦之助が名に寄せて、義弘の一腰、引出物に給びてける、誠に當座の眉目なり。政子の方しとやかに政子「御心解けて自らも、此上の悦びなし。人の噂も取々なる、互に縁の遠さがる故なれば、縁に縁を重ねる爲、幸ひ時政公御局楨の方の腹に出生、の末の娘時姫を、頼家の北の方にそなへなば、京鎌倉の和順の印この上なし。これ自らが御願ひ」と、仰に時政打領き、時政「政子の發明は太平の瑞相、さあれば頼家が寵愛の、若狹とやらんを追出し、其後時姫を送るべし、媒介は造酒正」春久「ハア畏り奉る」と領承すれば實朝公、實朝「今年則頼朝の三回忌、なんと東大寺にて追善供養取行へば、政子御前も宇治殿も、此の靈場にて對面の上、婚姻の契約あらば、靈魂も御悦び、供養の催し諸大名相心得よ」と御上意に、皆退出の谷七郷、松倉郷の拜領も

郷に入つては吉村が、心々の三つ鱗、北條殿の智慧の海、底はかりなき鎌倉山、御代の榮えぞ三重久方の。

第二

八重櫻散りしく法の東大寺、總追捕使の御菩提を、弔ふ結構工を盡し、金銀瑠璃玻璃錦の帷、廻廊石垣悉く、五色の織絹幾重に包み、照る日に輝く装ひは、これ彌陀境をうつされたり。さてまた千僧萬僧の、御經の聲澄みわたり、三尊ごよに來迎かと、殊勝なりける事どもなり。此度の導師建長寺の前往榮西和尚、朱の衣もいと貴く兩人に打向ひ、榮西「今日は御兩所共、警固の御役目さぞ御大儀。しかし天氣快晴にて愚僧も甚だ満足」と、挨拶あれば造酒正、造酒正「誠に今日は御苦勞千萬、上々にも御悦び、則ち御寶筵に御出座もあるべくなれ共、女儀の事、不淨も如何、御遠慮あり、某よきに計らふ」旨慇懃に相述ぶる、詞にいがむ比企の判官、比企「たとへ何の様な弔も、亡君何のお悦び、何故と仰れ、先君御逝去の跡目は當時實朝公、こりやこれ政子の方の若殿、又宇治のお局は御部屋なれども、頼家卿といふ惣領を生み落されたが修羅の種、弟に天下を乗取られ、何の快からう。それに何ぞや、縁組の祝言のと様々の御戲言、役柄も打

忘れ、媒人の取持顔、見るも中々腹筋」と、取つても付かぬあてこすり、耳にもかけず和尚に向ひ、造酒正「近頃仔細あつて京鎌倉の御縁組、御取持仕るも、何卒國家の無事を祈る某、御推量下され」と、事を破らぬ一言に、尤もなりと感ずる智識、判官はえせ笑ひ、比企「鎖繩も言へば言はると、自體、鎌倉の附人風が、お局の御氣に入らぬ、イヤモ彼方へも此方へも、塗廻すねれけ武士」造酒正「ヤア傍若無人の雜言、さ言ふ和主が不忠の臣」比企「何が何と」造酒正「チ、サ、主人に諫も奉らず、毒を吹きこむ邪非道」比企「ヤア舌長なり、聞捨ならず、おと骨切て切さぐる」造酒正「シヤ小癩な」と立かよる。こは何事と榮西和尚中を隔て、榮西「大切の供養の場所、若し刃傷にも及びなば、後日の言分如何なさると、短慮至極」と押鎖め、榮西「供養の時刻は間もあり、暫くは御休み、いざ先々」と勸むれば、互にすれ合ふ大紋の、袖揺直し兩人は、和尚の詞に従ひて、休息所へと入りにける。供養の御幕打はへしは、北條家の乙の君時姫御寮、頼朝の後室に姉の名はあれど、御腹がはり末の子に、後れて咲きし姫躑躅、造らぬ木なり手入れずは、何所へ枝のふりの袖、都まばゆき姿なり。お側女中多き中、片岡が娘住の江、住の江「御覽遊ばせお姫様、京鎌倉の大名方、此の廣い境内も埋るとばかりの賑ひ、殊に御父時政様の仰出され、お前を都へ御縁組遊ばすとやら、今日はお約束が定まる筈、さぞお悦びでござりませう」とほのめけば、

時姫「ナウうたての縁定や。頼家様には若狭殿とて御寵愛の愛妾、その中へ嫁入は、戀路の中を割きに行き、人の恨妬を受け、何たのしみがあらうぞいの」と仰せにお側の瀧浪が、瀧浪「エ、住の江殿まだな事、頼家様は都の殿様、あんな堅苦しい大將はお嫌ひ、今度御使者の其の中で、極上吉粹角前髪、都への嫁人より、疾からあなたのお心は、三浦の方へ走り舟、ひよんな事は、状文の、船でも權でも行きにくい、荒磯の岩侍」住の江「ム、堅い程お姫様の思の増すは御尤」瀧浪「サイナ、その堅みを打砕いてお手に入れたら、敵の城を落したより大きな手柄。住の江殿は片岡の娘御、よい謀はないかいな」住の江「サアどうしたらよからう」と三人小首傾けて、戀の評定しどけなし。住の江「コレ斯うぢやわいの、其の堅藏の三浦殿、お姫様と云うては、お主様の許嫁のと、猶以てむづかしがる。その惚手に私になつて、堅い所を砕いたら、それからとはお姫様の、御威光ごかしにやり付ける、天の川にも中立の、舟がなければ渡されぬ、そこで私が妹脊の舵取。したが、肝腎のその三浦殿、わしやつひに逢うた事が」瀧浪「チ、その逢はぬが丁度幸ひ、アレレ、向ふへ来る古文字の素袍は違はぬ三浦殿。サア急になつて来た、随分首尾よう生捕つて、高名見たい」と女中達、姫は猶しも恥かしの、森の木隠れ幕の内、かくとは知らぬ使者男、やさ風流の角髪は、三浦之助義村、のつし髪斗目にかけて烏帽子、素袍の袖に春風の、そよと音なふ内意

使者、三浦之助「宇治の政局より時姫様へ使として参上、誰ぞ御取次頼み入る」と云入るれば、幕よりも「暫くお控へめされよ」と、勿體つくるも戀の仕掛、とは知らずして三浦之助、素袍の角びし濫面つくり、待つ間なまめく住の江が、出合頭に義村を見ても見ぬ目の心意氣、これ戀知りの印なり。三浦之助謹んで三浦之助「宇治様の仰には、今度造酒正媒酌を以て、時姫様と主君頼家縁邊の御契約、まだ御輿は入れねども、嫁御といへば心安さ、たまに貰ひし儘、東大寺の名香、いと珍らかなる夢もがな、心計りの贈物、御慰み下されよとの御口上、御前よろしく御披露」と、袱紗包を取り出せば、住の江「これは、御丁寧な御口上と申し、御使者柄と申し、御持参の香よりも色香の深い戀知りの、いとらしい殿振りを見るに思ひの増さり草」三浦之助「ア、これ、御奏者、拙者への御挨拶より早く御上へ使者の趣」住の江「チ、せはしな。そしてアノ御元服遊ばさねば定まる御内方様はまだ御座りますまいな」三浦之助「左様部屋住同然の三浦之助、妻とては持ちませぬ」住の江「ママそんなら内證に云ひかはしなかつた、かはいらしいお方があるかへ」義村「かつ以てかつ以て。洒落仰しやらすと、先づお取次」と、取出す包みの手をじつと。村「ア、これ何なさる、無作法千萬、この三浦之助つひに女中と、手から手へ物取りかはしたこともない家中の格式、御座興も事による、放しめされ」と衝き退くれば、躓きそこに仆ながら、袂をひかへ、住の江「コレ申

し京家の御格式は知らず、女中方はまた女中の格式。此の幕の内は時姫様の御殿同然、女中御殿へ殿連が、御使者に御出なさるとからは、此方のあしらひにお付きなされにや成りますまい。それが御氣に入らば此の御取次は得申さぬ」三浦之助「それは迷惑、女中方の禮義は不案内な拙者、無骨の段は料簡あつて、御口上早く御傳へ下され」住の江「イエ、奏者を侮つたなされ方、私も武士の娘、此の様に突付されて、アイタ、持病の癩が」と苦しむ風情、拗ねて見ると知りながら、女子合手に短氣も出されず、三浦之助「御藥上げん」と用意の印籠、住の江「イエ、お氣の知れぬお前の藥、どうも私は」三浦之助「ハテ疑、深い、コレ此の通り」と、毒試の金打、住の江「ア、御心底見えしました」と、戴き、住の江「此の御藥御前の手から受けましたが祝言の盃同然、女夫ぢやいの」と抱付けば、義村「是は又きついおなぶり」住の江「イ、エ誓文三浦様、なんほ堅うなされても、もう斯うなつたら否とは云はさぬ」三浦之助「サア我とても岩木にはあらねども」住の江「そんなら應でござりますな」義村「サア」住の江「夫はいやと仰ら何時迄も、此の奏者が癩はなほらぬ」三浦之助「ハテむづかしく仕込んだ癩。堅う見せるは刀の手前、此方も變らぬ仲人は此の印籠の重々、情の御禮はかう」と、縮返す手の柔らぎ口、覗きこほれて腰元ども、腰元「よう、三浦様しつくりの長門印籠様、蓋があいた、サア御出」とつき出されて、雲間より松の葉越しの隈晴れて誘ひ申せば、吃驚

仰天、住の江「逃けても逃がさぬ正眞の、惚手は其方に覺のある、御姫様の御文の返事、サア、いやとは言はれまい」と押しやる色の門違、戀の身替り住の江が、あんまり具合が出来過ぎて、如何やらひよんな氣になれど、悋氣もならぬ辛氣顔。時姫はなほ面伏、時姫「住の江を頼んで、そなたの心を引き見るも、思ひつめた自らが、心を推して叶へて」と手を取り給へば飛び退り、三浦之助「頼家様と御縁組の御姫様、夫故只今お局より」時姫「サアその使こそ自らと、御縁のないといふ印、香の煙の色もなき、移り香うすき形見とも、縁の切れるといふ心、わしや嬉しい」とのたまへば、三浦之助「イヤ、く、く、たとへ御縁は切れる共、天下の後見北條家のお姫様、我等體に御心掛けられしとは世の人口勿體なし、思切り下されよ」と、低頭三指。住の江差出で、住の江「如何さま仰りやそこも有り、やつぱりあなたは頼家様へ御嫁入遊はして、いつそ私と三浦様、サア申し」と寄添へば、三浦之助「どこへ、住の江殿、さう得手勝手は此方がさよぬ」住の江「如何でも此うでもお姫様エ、もどかしい」と、兩方を無理に配劑匙加減、調子合せた目出度と、さどめく中へ御兩所御成と知らせの聲、驚きはつす三浦之助、姫は名残もをしどりの離れがたなき後影、見送り、是非なくも、御寺の方へ入り給ふ。案内も同じ東西の、幕絞らせて政子の方、宇治の局も氣高さは、吉野龍田か月雪の、光り合ひたる風情なり。宇治の局「是は、政子様、御佛前へ御焼香も相濟

みしか、誠に今日の追福も、あなたと自ら御一所に御弔ひ申す事、さぞ我君もお嬉しく思召さん」とありければ、こなたも左右御挨拶、政子「三年と過ぎる年月も果敢な浮世、懐かしの今日の其日」と計にて、互の袖に玉こほす、露こそ手向なりけらし。局はいとと萎れ入り、老少不定の憂きことも、誰が何時の世にはじめしぞ、我君此の世にましまさば、自らが事若が事、今の思ひはなきものを、一生埋れ果てなんと、悔み涙は妬みぞと、心に障る政子の方、政子「イヤなう宇治の方、アノ武藏野に見る月も、賤が伏屋の濁江に、宿りし月もも一つ、所々の風雅により眺めも違ふ、其時々を辨まへて、世上に付くが良ささうな物ではないか」との宣へば、宇治の局「これは御尤、さり乍ら、春の花咲き冬は雪、天道四季に私なし、時をのり順を越え、辭儀も作法もなき時節」政子「サアさう思すのが心の僻、尤も頼家殿も君の御胤と云ひながら、妾腹なれば是非なき不運」宇治の局「イヤ其の母々の品位はかはるとも、頼家は惣領ならずや。兄を差置き弟が、上に立つといふ事が」政子「ヲ、有るともく、たとへてに生れても君の妻たる自らが生落したる實朝を、世に立てるのが天下の掟。殊更子は母によつて貴し、そもじは誰そ、伊藤祐親の娘ならずや。現在我君と仇ある中、御敵の孫娘御咎もある筈を、却つて君の御情、活計、歡樂榮耀の餘り、源氏の跡を嗣がせんとは、鶴鷄の巢を梅が枝にかけるとより遙かのこと、中々及ばぬ叶はぬ」と云込の

められてくわつとせき立ち、宇治の局「エ、聞きにくい一言、女でこそあれ頼家を一度武將に立てて見せう」政子「ホ、くイヤそれや蟪蛄が斧同然。取らるよなら取つて見や」宇治の方「ヲ、取らな

いでは」と彌福ひらり、持たせし長刀互に搔込み、サアくくくと詰寄りしは、野分に騒ぐ萩萩の亂れあうたる如くにて、すは事こそと腰元下婢、手に汗握る寺中の騒動、佛の會座も忽に、修羅の巷へ駈來る片岡、「待たたく」と氣も狂亂、押隔ててどつかと坐し、造酒正「エ、情なき御有様、御兩所の御争は偏に天下亂れの端、此の御心付かざる事淺まし御所存や、殊更今は亡き御靈、祥月の御命日、其の御位牌の御前にて、かよるさかなき賤の女の、御争は何事ぞ。國家の爲を存する故、京都鎌倉御縁を結ばよ、自然と和らぐ御代の礎、さあれば草葉の亡君も、嗚な悦びまします、操の鑑思さずや。不肖の臣が胸廓を苦しめ砕くは千變萬化、九牛が一毛も聞召し分けられて、何卒和順なし給へ」と、わつと口説いつはらくく、涙は忠義隨一の、上に立つたる武夫の、諫に誠を現はせり。榮西和尚しづくくと、御弟子引連れ出給ひ。榮西「兩後室へ愚僧が御意見にて悟り下され」と持たせし一軸傍なる、松の小枝にさらりと懸け、榮西「なんと御覽なされしか。天の時正に到るといふ文字、兎角天下を治むるは天より自然其の人に與へ給ふにあらずんば、中々治まる事能はず、既にもつて今日追福し奉る右大將、蛭が小島の漂浪も、後には天の

時到り、六十餘州の總追捕使、御跡目の御しゆつくわい御互に遺恨とならば、いよく御代の爲ならず、熟と御合點なされしか」と、出家形氣の一行、和尚も名にし建長寺、すつぱりとした意見なり。政子の方理に服し、政子「先君の追善にはしたなき云平ひ妾が通り。イヤナウ宇治の方、必ず心にかけれな」宇治「何が扱只今の無禮はお許し下され」と、互に和らぐ御挨拶。造酒正頭を下け、造酒正「憚り多き諫言を御聞入下されしな。御恩は重き細石、巖となりし御代萬歳、見せ奉るがすぐ様追善佛事、終れば御前にもいざ御歸館」と勸むれば、解けぬ心を襦袢に、包む式禮政子の方、片岡和尚御見送り、館を指して歸らる。跡に局は張詰し心の怒止めかね、千々に碎くる思案の體、始終の様子三浦之助、さはらぬ體に手をつかへ、三浦之助「日も夕陽に斜なれば、御立ぞふ」と申すにぞ、しづくかたへに歩寄り、懸け奉る雌雄の名劍、小脇に手挟み、宇治の局「如何に義村、太平の印を見せんと頼朝様、この東大寺へ納め給ひしこの劍、雄劍は自ら、雌劍はその方、これを帶せん兩將を選び來らんそれ迄は、勘當なるぞ」と一口を、差出し給へば兩手に受け、三浦之助「四海太平なる時は、弓は袋にし太刀は鞘に納むると雖も、再び用をなすべき時節近きに有りとの御心候な」宇治の局「ヲ、言ふにや及ぶ、先君の御恩を忘れし北條一家の權柄我儘、鎌倉山の月影を他所に眺めて、頼家を日陰の花となし果つる、其の口惜しさは如何計り、たとへ浪路は干潟となり、巖は湯玉とかはるとも、恨は晴れじ我心、推量せよや三浦之助」三浦之助「ハ、實に御理、逐一に承知仕る」と、同じく寄て懸け置きし、弓矢追取り奉る。三浦之助「アレ、御覽せ、あの一軸、天の時正に到るといふ、中なる文字こそお恨の目當ならん、只一矢にて御鬱憤散じ給へ」と義村が的を外さぬ黒星に、宇治の局「ヲ、心得し」と打番ひ、きりくくと引絞り、手先上りに切つて放せば過たず、文字のたゞ中はつしと響く暮のかね、御立の行列主従が、別れ勇んで三重立歸る。

第三

實に治まれる例には、松に小松の生添ひて、枝に枝葉に葉の榮え、契り盡させぬ源や、御酒の機嫌も頼家卿、晝夜わかたぬ舞歌ひ、御側小姓が笛鼓、白拍子には若狭とて、容色も吉野櫻花、戀しき人は君様と、舞に事寄せ頼家の膝に凭ると品形、よう濡事の生粹めと、側からはやす囃子方、いやくどつと賞めにける。大將御機嫌斜ならず、頼家「何時見ても美しい容色につると扇の手、どうも堪らぬ若狭の前、この頼家が北の方」若狭「ハイその御願は私からいつく迄も其通り、必ず變り給ふな」と又濡れかよる一奏、比企の判官御前に出で、比企「君にも知し召さるゝ通り、片

岡諸共鎌倉へ下りし處、心得難き北條殿の所存、何時合戦あらんも知れず、まさかの爲の便にと、味方に招く諸浪人、中にも佐々木四郎左衛門高綱こそ、今の世の軍帥、彼が行方を詮議いたし、此方の大將とせば、此上やあるべきと母上の御説を受け、世を遁れ住む佐々木が在所、此程より尋ね捜す人衆の手配、殊に又造酒正が計らひにて、北條家の娘時姫殿と、御婚禮を取結び、追付け館へ参るは治定、御祝言とある時は若狭殿の爲にもならず、何と御思案はあるまいかと、聞くよりはつと若狭が顔色、見て取る頼家、頼家「コレく、だんないく、片岡が指圖でも、そ文字をのけて頼家が妻と定める者はない。イヤ何。判官、我が思ふ所存も有れば、片岡出仕いたす共、奥御殿へ通すなと侍中へ申付け、堅く禁制たるべき由、小姓共より申渡させ。コレ若狭、構はずと一獻酌み、さらりと流しや」と、大將の色に心も亂れ絲、縫れかよりし片岡が、難儀と更に白書院、取次の侍まかり出で、侍御召によつて佐々木四郎左衛門高綱御次に控へ罷在り、通し申さんや」と伺へば、頼家「チ、それ待ちかねし、是へ通せ、對面せん」と仰の下、御前間近く立出る佐々木四郎左衛門高綱、名にのみ聞きし武夫の行儀亂さず平伏す。判官佐々木に相向ひ、能員對面致すは始なれど、名は聞き及ぶ高綱殿、此程より貴殿の行方尋ね索めるその仔細は、軍法智略隠なき佐々木四郎左衛門へ、我君竊かに御頼ありたき一大事あつてのこ

と、よも違背は有るまじ」と探る詞につこと笑ひ、高綱「先君頼朝一天下を切治め、草木も動かぬ今の世に、軍術武邊も益なき事と、跡を晦し山林に引込んだる佐々木高綱、今改めて御召出しは太平の世に武を忘れぬ名將の御心掛、委細の儀御尋ね申すに及ばず、御頼みの一大事、高綱承知仕る、御心安かるべし」と淀まず濁らぬ辯舌は、水を流せるごとくなり。煙たい相手にさしもの大將、頼家「ア、いかう遊びが滅入つて来た、佐々木を母へ目見えさし、コレ若狭其の跡ではしつほりと、サアおぢやいの」と大將は、帳臺深く入り給へば、高綱「然らば後刻」と判官に目禮式禮高綱も、奥にお供し入りにける。又も奏者が聲として、侍御前様より仰せられし佐々木四郎左衛門高綱只今伺候致せし」と聞いて能員「比企能員「ソリヤ何の事、たつた今日見えた佐佐木四郎左衛門二人有らう筈はなし、ム、聞えた、名有る武士共召抱へある時節を考へ、匹夫下郎の騙事。何にもせよ仔細ぞあらん、是へ通せ、糺明さして實否を糺さん、用意あれ侍中」こやり戸口に身を潜め、握りつめたる柄の間も、心を配る高綱は、春待ちかねし鶯の、初音をうたふ心地してしづく」と入來り、高綱「召に應じて佐々木四郎左衛門只今參上仕る、取次頼み存ずる」と聞きもあへず判官が、ソレと指圖に雙方より取付く二人を引摺み、何の苦もなく投退れば、同じくかよるも右左、うんと云はして寄せ附けねば「比企、上意なり」と判官、聲に流石の高綱

も躊躇ふ所へ附け込む家來、腕を廻はせと追つ取り巻く。「ヤレ暫く」と御聲かけ立出で給ふ宇治の方、君に別れし玉櫛、まだ艶やかな色も香も觸らば落ちん袖の露。宇治の扇、ホ、豫て聞得し佐佐木四郎左衛門、自らこそは頼家が母宇治の方、顔あはずは初なれど、昔にかへる主従三世、今より頼家が力となり、偏に頼む味方の軍士」高綱「ハア畏つて候へども、さ程に迄某を懇望あるに引かはり御家來中の今のしだら」宇治の扇「ヲ、其の不審は道理なれど、味方の士卒を靡かす高綱、その手練を見やう爲」高綱「ハ、ハ、ハ、コハ御誂とも覺えず、身不肖の某なれども、まさかの時は軍士にも、御頼みなされんとの御心には引換へ、劍術柔術の業くれにて佐々木が器量御試し遊ばさるゝは、淺はかなる御計らひ、左様の武藝は一人に敵するは武者の技、軍帥の器量に足らず、憚ながら大將の御賢慮薄く候」と、武威を恐れぬ辯舌骨柄、割符を合す二人の佐々木、心一つに奥と口、きつと御目を付々に、わつて云はれぬ此の場の仕宜。宇治の扇「ヲ、一言一句に備りし軍帥の器量頼もしょく。此の上は頼家に目見させ、事ゆるやかに奥の間で主従の盃事。コリヤ腰元共、佐々木を早う伴へ」と、仰にはつと高綱も、威勢は雲に立上る龍に翼や虎の間の、御前を指して立つて行く。かゝる折しも御庭の内、下れくも柔らかな奴共が口々に、腰元「見れば花を商ふ人さうなが、此處をマア何處ぞと思ふ、忝くも源の頼家様の御殿とも憚らず、中間衆が

見付けたら、大抵の事ぢやあるまい、早う御門を出やしやれ」と叱る詞もなまめきし。「御免く」と手をつかへ、花賣「イヤ申し女中方、私は近郷の小百姓、畑の隙には此ごとく花を擔いで賣りあるき、通る度々この御殿、外から見てもきらりと、結構づくめを見るにつけ、ア、内へはいつて見たい事ぢやと思ふが一つ覗いても呵人なく、はいりかよつて御門の内、これが何と出られませう、とてももの事にとつくりと入れさして下さりませ」と云ひつゝ立て行かんとす。判官聲かけ、比企「ヤア何奴なれば尾籠千萬、御前様の御側近く慮外致さば一討」と、叱り飛ばされ吃驚し、春より取出す梅の花、判官が前に置き、花賣「ハイ御許されて下さりませ、御前様がかろくと出てござるとは夢にも知らず、ア、勿體なや、お前様の執成で拜まして下さりませ。其かはり此の梅を上げませう、イヤ申賣あまりでは御座りませぬぞへ、物は云はねど此花はお詫の種の一枝」と云はせも果てず、比企「ヤイ見掛けによらぬ土性根の太い奴、武士を提へて嘲弄する憎くい頼柄、いがめてくれん」と飛懸り、目鼻もわがず丁々、打つ度ごとに散る梅の落花狼藉厭ひなく、びくともせば手は見せぬとつき放されて、今更に返へす詞もちり打はらひ、花賣「去にましょ去にましょ。慈悲専らと思ひの外、去とは惨いお衆達、何ほ結構な著物きて、仔細らしい顔召されても、斯う邊がひどうては御出世はなりません、貴い寺の門前から去んだがまして有つた物、

はいつて見たさに痛い目した、命が物種おさらば」と、呟き立出づる。「夫繩打て」と宇治の方御聲かよれば能員が、取つて引立て無二無三、提緒手繰つて小手擲、權威に壓され詮方も、投首してぞ居たりける。比企の判官取りあへず、比企斯様の奴等が徘徊致し、御前様の御身の上悪様に觸れ歩く愚人奴等への見せしめに、首ぶちはなし成敗の手に致し候はん」と聞きもあへず、宇治の方「いか様そなたの言やる通り、下として上を計らひ頼家や自らが掟を誘る者あらば、たとへ町人百姓でも生けおいては政道立たず、處刑の手初其者は自らが手をおろし手討にする、覺悟せい。イヤなう能員、斯くも濫りに入り込むは、外面を守る役目の過り、つまりこのとほ侍に、守厳しく申付け、ともに心を配るが第一、コリヤ腰元ども、其方達は奥へ行き、自らが腰刀早く、これへ持來れ」と仰に生きた心地もなく、花賣「申し奥様、今の様に申したのでお腹が立たば幾重にも、コレ申し女中方、詫して給べ」とおろく、聲、願へどいつかな弛めぬ判官、比企「スリヤ御前様には自身の御手討」宇治の局「ヲ、云ふにや及ぶたつた今、そなたは次へ腰元共、早う早う」と宇治の方、嚴しき下知に能員も、その儘立つて入りにける。圍れし今ぞ命の置所、屠所の歩みの未より、響く時計は八つも過ぎ、七つ何とか女子共さどめき渡る腰刀、御前になほし置き、立つて入るさの月ならで、花にその目を置く露の涙と共に、花賣「コレ申し殺される此命、

惜しいとは思ひませぬが、今此處で斬られたら、跡に残つた女房子が、路頭に立つは知れた事、一人と思へど親子三人、見殺にして何の益、何卒お助け下され」と拜み度ても後手に、縛搦めし有様を、見やるこなたも打曇り、清くさせんと下立ち給ひ、宇治「歎き慕ふは道理ながら、助けられぬ其方が一命、移るほど思ひの思ひ、源家の大將頼家が母宇治の方が手に懸るを、果報と思ひ諦めよ」と、すらりと抜いたる刀の光、恐々そつと顔打ちながめ、花賣「スリヤ如何でもこなた殺す氣か、ハア是非に及ばぬ、とても切られる上からは、潔う死んで見せませう。そのかはり又此方様にもすつぱりとした刀の切れ味、サア切らつしやれ」と突付ける身體の捻りに宇治の方、きつと目を付け、合點と丁と切つたる覺の手の内、解ける繩目に吃驚し、花賣「ム、こりや切つたのは繩ばかり、スリヤ殺しやなされませぬか」宇治「ヲ、何のいの、生けて再び自らが、頼みたい事あつて、殺すというたはみんな嘘、人前つくりし心を見や」と刀は鞘に納まれど、まだ治まらぬ胸の中、底意如何にと兩手をつき、花賣「百姓づれの私に、頼みたいと仰しやる理はえ」宇治「そなたに惚れた」花賣「エ、イヤモ今日ほど恐ろしい事を聞く日はない、長居したらどんな目に遭ふも知れぬ、もうおさらば」と立上る。宇治「イヤ去ななぬ、云ひ出すからは金輪際、たとへ何れの花にもせよ、その一枝は自らに折らして給も」と慕ひ寄り、取る手に絶つて、花賣「エ

エ滅相な、女だてら男に惚れると云ふ様な、無遠慮な事があるものか。なうくこはや恐ろしやと振切りく、逃け惑ふ、道を塞で宇治の方、宇治「そんなら手討にあひたいか」花賣「サア」宇治「それは厭なら此の戀叶へい」と、退引させぬ難題に、返答ほうど行き詰り、宇治「サアく」花賣「そんならあいで御座ります。ア、お前様もいらぬ物好き、ア、したが、如何でもそぐはぬ色事が當世の流行物、あなたもお公卿様の娘御なら、我等さしつめ痛い腹、必ず切らして下さりませ。なへ。それはさうぢやが、如何いふ御心で惚れさしやました、譯を聞かして下さりませ」宇治「さればいの、君に後れておのれやれ、貞女の道は背かじと、思ふに違ふ起臥に、契り置きにし私語、思ひ出せし床の中、只一人寐の手枕に、深き思ひを打わつて、云ふべき人も有りなんと、武士町人の別なく、入込ませしは幾萬人、數も限らぬその中に、今日といふ今日其方の顔、一目見るより戀草の、闇を縫ひゆく螢より、焦るゝ宇治が袖袂、下ゆく水の流さへ、外には洩す人もなき、わしが寢所にこつそりと、忍男といはど云へ、サア打解けて給もいの」と、ひつたり濡るゝ雨が下、又とあるまいこの戀路、在所育ちの麥飯で、釣れし戀は淀川の、七年もの知られたり。花賣「イヤ申し其の御心、何時迄も必ず違へて下されますなへ」宇治「チ、何のいの、一旦惚れたる上からは、武士は勿論高家でも、いつかな觸れぬ肌と肌、そなたと合すが互の固め、サアおぢ

やいの」と打連れて、上る疊の裏表、片岡造酒正出仕なりと呼はるにぞ、はつと仰天、こなたにも人音すればせん方なく、隠し所も宇治の方、襦褌ひらりと忍夫、暫しは宿る下蔭に、身を潜てぞ窺ひ居る。春の日脚の長廊下板敷の音しとやかに、武士の鑑の大廣間、それと見るよりハ、はつと、座を立隔て造酒正、謹んで兩手をつき、造酒正「こは御前様只お一人、心得がたき館の構へ、殊に只今侍中が申すを聞けば、片岡御殿へ通すまじと遮つて申せども、某却つて合點まるらず、御所存如何に」と尋ぬる中、「ホ、其の仔細某が云ひ聞かさん」と立出づる大江の廣元入道とうけん、頭ばかりは丸けれど、角稜立てる眼付、真中にどつかと坐し、廣元御邊一人奥御殿へ通さぬといふ仔細語るに及ばぬ、貴殿の胸に覺あり。今度の使者鎌倉へ参りながら、その役目は遲滞に及び、剩へ時政の娘時姫を頼家公に妻さんなどと、旁以て心得ぬ心底、さるによつて御前より仰渡さるゝ右の條々、言わけあらば言へ、聞かん」と席を打つて詰めかよれば、造酒正「ホ、それにこそ片岡が深き所存、此度鎌倉に立越え、事の様子を窺ふ所、時政の心底如何にしてもその意得がたく、その儘にてさし置かば、遂には兩家戦の亂を押へん其の爲に、北條殿の指圖に従ひ、時姫を請ひ受けしは、なほ御一家の縁深く、自然と和談に及ぶは治定、そこを以て片岡が三ヶ條の御不審も只婚禮にて事を治め、立歸つて様子を聞けば、宇治の方の御身持、武士は勿論町人百姓、

毎日々々入込ませ、御目に止りし者とは御寢所に引入れさせ、故埒惰弱の御遊びと聞きたる時は造酒正、はたと塞がる胸の戸も明けて、一人誰有つて諫言申す者もなきか、エ、是非もなき次第やと、思ふに任せぬ片岡が、屍は泥に埋むとも、一心變ぜぬ魂と知ろし召されぬ事ならば、再び生きて歸るまじ。穩やかならぬ鎌倉の、大事を前に置きながら、色に溺れ酒に長じ、世の人口にかよるといひ、覺むれば夢のあと先に、御心付けて唯一言、頼家公に御意見の、杖柱ともなるべき御身、思ひ止つて給はれ」と忠に凝つたる片岡が、諫める五體に汗滴、袴も浸すばかりなり。宇治殿氣色をかへ給ひ、宇治、ム、自らが身持放埒、町人百姓を引入るとは、跡方もなき噂を取上げ、貞女の道を背きしと、無き名を立つる推參慮外、女と思ひ侮つてか、詞が過ぎるぞ造酒正「造酒正」ハツ／＼御心に障りなば、その儀は幾重にも御宥免、唯々返へす／＼頼家公へ御祝言の御勧め、この嫁入を變改あらば、最早和睦も叶はずして、亂に及ぶは今この時、熟と御賢慮廻らされ、時姫君の御事のみ、偏に願ひ奉る」と、我身に代へて祝言の、治まり願ふ四海浪、ゆたかに見えぬ風情なり。入道とうけん聲荒らけ、廣元「同じことをくどく」と、主人に向ひ尾籠の振舞。ヤア／＼誰かある、アレ引立て」と呼はる聲、「畏つた」と比企の判官、襖あらはに、能具是さ片岡、鎌倉方のぬらりくりり、言分しても返らぬ事、去に端が無うて得立てずば、立たしてく

れん」と立かよるを、腕首擱んで眞逆様、見向きもやらす摺寄つて 造酒正「たとへ御咎蒙るとも厭はぬ／＼。此の上は頼家公へ直に御願申さん」と、いふ間あらせず入道は、推參なりと打かくる手裏劍、丁と身をかはせば、小柄は外れて禰禰あらはに、花賀「アイタ、」小手打ちこまれし以前の男、一座の驚きなまなかに、隠立して川霧の、現はれわたる宇治の方、暫し詞もなかりしが、宇治恥かしや造酒正、最前そなたの意見、面目なさも切なさも、思はれぬ程可愛いは、眞實惚れた忍び男、女の因果と堪忍して、必ず呵つて給んな」と、詫びるは武將の御母君、天下晴れたる御身持、呆れて何とせん片岡、入道も苦笑、廣元「頼家公の御母公爲たい事なさるとが武將の威光、誰が何と申す者がござらう。片岡が押付願、御得心ないは知れて有るも、身が取次してくれう、次へ立ちやれ」と權柄顔、破るは易く守るは片岡、結ぶは早き戀の殿、三つに別るゝ奥の間に、笛の響も大將の、機嫌取々鼓の音、銀燭臺の影高く、輝きわたるばかりなり。若狭はそつと奥の隙、出づる後にとうけんが、聞くともし知らず獨言、若狭「娼衆の話を聞けば、モウ祝言は止まつたさうな、これといふも入道様の御蔭、エ、忝い／＼。それに引かへ片岡殿、わしが爲には戀の仇」廣元「イヤその敵は外に有る」若狭「エ、外に有ると仰るは」廣元「ヲ、理を知らねば不審は尤、君を大事と思込まれし志は切なる故、入道が語つて聞かせん、近う／＼」と小聲に

なり、廣元「何をか包まん其方の仇となるべき人こそ、館の後室宇治の御方」若狭「エ、」廣元「ヲ吃驚は道理々々、エ、情なや武將の母と云はるゝ身が下種下郎を引入れて、アレ寢殿に不義密通の私語、先君頼朝の御恩を忘るゝ人非人、鎌倉には頼家公謀叛などなき名を立つるも、皆宇治の方の不所存から、この人を生け置いては頼家公の御身の仇、家の爲天下の爲、御身竊かに寢所へ踏込み、一刀に討つて給べ」若狭「ア、これ申し、滅相な事ばかり、大事のく、殿様の母君、殺せとは勿體ない」廣元「シイすりやこなたは頼家公が大切にはないか、大切ならば後室を殺すのが殿の御爲。よし／＼これ程の一大事、口外へ出すからは最早暫時も猶豫ならず、こなたが得殺さずば、身が手に掛けて家國の禍を拂はん」と奥を目掛けて駈入る氣相、若狭「コレなう待つて入道様」廣元「待てとは此方が討つ所存か」若狭「サアそれは」廣元「サア／＼如何ぢや」と競り付けられ、若狭「そんなら宇治様殺しませう。君に添たい殿様を、大事々々にかまされて、同じお主といひながら、御家の爲にはかへられぬ、仕おほせて御目に懸けませう」と、口に云ふさへ勿體涙、胸にせきくる若狭の水。廣元「ヲ、出かされた、天晴々々、それでこそ頼家公の北の方、これ此刀ですつぱりと、アレあの囃子の終らぬうち、時を過ぎず、合點か」「心得ました」と脇挟み、氣も太鞘の白拍子、目釘開して忍び足、窺ひ／＼入る姿、見やる眼も笑壺に入る、

邪智を隠せし胸算用、獨り領く思案の後、奥よりひよか／＼以前の男、思はずばつたり、花賣「ハア是はしたり御許されて」と行過ぐる。廣元「待て／＼、汝合點の行かぬ奴、匹夫下郎の身を持つて後室に近寄る不敵奴、汝を生けては歸されぬ、覺悟して居らう」花賣「エ、イ是はまた迷惑な、花賣に來た御庭先で後室様の御目に入つたは私が花の科、此方から仕懸けた色事ではなし、畢、竟御前様の御悪性様ながら、私は何にも」廣元「ヤアぬかすまい、そればかりでない、汝最前から何ぞ聞いたで有らうがな」花賣「エイ夫は聞いたでもなし、聞かぬでもなし」廣元「それ聞いたら許されぬ」とすらりと抜いて切付けるを、脇息おつ取り、丁ど受け、花賣「こりや何となされます」廣元「ヤア御前様を誑し、御家を亂す大罪人、觀念ひるけ」とまた切込む、鏢元丁と打落し、脇腹うんとたぢ／＼、透さず駈寄る比企の判官、主は誰とも手裏劍に、ぎやつと一聲敢なき最期、見向もやらず一間に向ひ、高綱「良禽は木を見て住む、大將の器量を選び、此の程民間に名を隠す、近江源氏の嫡流佐々木四郎左衛門高綱、今日たゞ今頼家公の御味方、軍帥となる時到来り、家來、刀」と詞の下、ハアはつと一度に立出づる姿も、一對二人の佐々木。入道が恟りけてん、様子如何にと窺ふうち、さし出す大小おつ取つて、床机にとつかと坐したる面體、主従かはらぬ三人佐々木、三國一の勇士なり。御劍携へ宇治の方、御悦の聲高く、宇治「六十餘州に一

人の軍士待ち焦れたる甲斐あつて、今といふ今手に入るは、味方の礎大願成就、頼朝様より傳はりし雄雌の劔と名づけたる二口の太刀、軍師と頼む上は手渡しする雄の劔、士卒を靡かす采配ぞ」と恭しく手に渡し、宇治「心得難きは大江とうけん、頼朝様の御恩を受け、頼家の師範とも付置かれし身を以て、何怨あつて鎌倉へ内通は致せし」と仰せにとうけん起直り大馬存じ寄らぬ御疑、鎌倉へ内通とは何を以て」高綱「イヤ〜大江殿とほけまい、豫てより北條家に心を通はし、隙あらば頼家御親子を害せんとする貴殿の底意、争はれぬ證據は、最前我手に受け留めし小柄の手裏劔、片岡目あてに打つと見せて、正眞の狙ひの的は宇治の方であらうがな。ハ、ハ、ハ、其時我手に受けずんば、宇治の方はその座で落命、そののみならず貴殿の娘を若狭といふ白拍子にしたて、頼家公に放埒を勧むるが、鎌倉へ内通の證據、お隠しあるな」と一言は、三寸短釘打つ如く、廣元「ム、流石の佐々木よく見付けた、淫亂不義の宇治殿を、殺さんと謀りしは家の爲を思ふ故さ、又白拍子若狭をわが娘とは何を證據」高綱「チ、其の實否は谷村小藤次、四宮六郎、主人の下知にて鎌倉の様子を窺ふ忍びの犬、妾腹の娘若狭、藁の上より扇が谷の里に預けて置かれた事迄、聞きぬいて来たこなたの腸、サア〜白状々々」と、詰めかけられてさしもの入道、返答塞がる障子の内、太刀音丁と唐紅、白拍子が首提げ、立出で給ふ頼家公、退つて敬ひ奉れば、

緩然たる御氣色にて、頼家「京鎌倉と隔りしこの頃の人心、圖りかねたる我が放埒、今改むる手始めに、成敗せし此女、他人の手に人と爲り、入道が娘とは今日迄其身も知らず、初めて聞いて身を悔み、覺悟の最期主を謀る天罰、我が子に報うと知つたるか」と常に變りし御上意に、一く一統赤面し、思へば無念せん方な、自害と見ゆれば高綱押止め、高綱「ヤレ暫く、假にも先君頼朝より若殿の御師範と名を付けられし大江の入道、心を改め忠勤あらば生害には及ぶまじ。一旦内通の貴殿なれば、所詮生けては置くまいと思つての覺悟ならんが、佐々木四郎左衛門高綱軍師となる上は、貴殿如きが幾萬人内通しても苦には致さぬ、御心遣御無用」と人を育つる大器の詞、とうけん初めて生きたる心地、廣元「けにも〜、今の命を戰場にて我が君に奉るが忠勤の第一、差當て御近習の比企の判官が打止めたる曲者、忠義はじめに生捕つて御覽に入れん」と立端の鹽しほからい目に大江の入道、とうけんの逆吠してぞ入りにける。大將重ねて、頼家「佐々木を軍師と招きし上は、母君諸共日頃の念願、時まさに到るはこと、急ぎ士卒をさし招き、評議如何」とありければ、佐々木高綱暫しと止め、高綱「御説には候へども、北條家には御存なき今日の次第を、次の間に窺ひ待つたる武士一人對面致せし上の事」と、家來を近づけ、高綱「ヤア〜兩人、其方達は宿所に歸り、我が身の上を告げ知らせ、早く〜」と追ひ遣つて、突立上り高聲に、

高綱「鎌倉よりの附家老片岡造酒正、佐々木四郎左衛門高綱見參ぞふ」と呼ばれば、襖をさつと造酒正、出づる後に組子の侍おつ取巻くを事ともせず、造酒正「最前かくと見極めし我が推量に違なく、扱こそ佐々木でありしよな」と、いふ間もあらせず左右より、「捕つた」と聲かけよる所、その手をすぐに引搦み、造酒正「斯くも君より御不審のかより繋がる鎌倉に足を留めたる造酒正、たとひ主君の御意なりとも、滅多に繩はかゝらじ」と、彼方此方へどつさりいはせ、造酒正「臣は臣たる道を盡し、君を守るが習ひといへど、疑蒙る我なれば、只この儘に出城して、再會は重ねて」と又も組子が打かゝる十手を透さず引たくり、眉間真向うち割つて、云はぬ互の胸と胸、宇治の方御聲かけ、宇治誤つて疑へば人と俱に亡ぶといへど、意地を磨くは武夫の、道にはづれし造酒正、再び歸り逢坂の關を破ると破らじと、其方一人にとどめし」と仰の中より佐々木高綱、高綱「味方にあつては一方の旗大將ともなるべき御邊、その儘出城せしむること、虎を赦して竹林に放すとは云ひながら、我又斯くて有る中は、何條事のあるべきぞ。すは合戦に及ぶ時、何萬騎にて寄せるとも、高の知れたる葉武者ども、四方に亂るを鈍揃へ、搔首梨割鐵砲の、音も烈しき味方の軍勢、君の威勢を真向にさしも功ある鎌倉方、どつと寄手の勢にて、勇めやかゝれと數多の士卒、諸葛が術をなすとても我が方寸の計略にて、そこにも佐々木こなたにも佐々木佐々

木と名をふらし、こゝの森蔭彼方の境、追詰め〜時政に泡吹かせんは高綱が胸に納めし軍の備へ」詞涼しく言放せば、造酒正につこと打笑み、造酒正「我とてもまつその如く、君に疎まれ君臣の禮義背きし上からは、本國に引籠り、旗上せんは易けれど、末代此身の瑕瑾となる、我が悪名もさつぱりと、流せば其名も楯の板、只いつまでも忠臣の、必ず二字を忘るな」と、味方に付くとも付かぬとも、善惡二つを一道に、納めて歸る造酒正、さらば〜と高綱も、御親子誘ひ奥と口、とうけんが采配にて造酒正を歸さじと、琴柱刺股ふり廻はし、逆さぬやらぬと憚いたり。造酒正「ヤア性懲もなきうざい餓鬼、残らずうせい」と聲かくる。物な云はすな搦めよと、右往左往に打つてかゝる、鼓は奥の間、謠の拍子、舞延年の時の和歌、是なる山水の落ちて巖に響くこそ、秘術を盡して争ひしが、さしもの大勢たまりかね、逆散るあとに我武者の二人、抜合せて切かゝる。かいしづんで鬮筋斗打たせ、直ぐに腰骨踏みつくれば、やらじと取付く組子が急所、仕止めしは何者と、見やる後の障子の中、衣服改め佐々木高綱、高綱「判官を討ちとめて我を庇し小柄の返禮受納あれ」と高綱が立つる勇者の道々に、奥は安宅の舞謠ひ、とく〜立つか弓取の、心ゆるさぬ造酒正、暇申してさらばよとて、おひにはあらぬ相生の、祝言さへも三々九度、言分何と片岡が、虎の尾を踏む毒蛇の口、逆さぬ佐々木が四つ目結、紋にあらはす四天王、その隨

一と鳴りわたる、鐘もさやけき 三重夜嵐の。

第四 道行旅路の濡衣

憂き事のつかさを問へば世の人の、戀と旅とに有明の、光は空にいや高き、北條時政の深窓に、
秘藏娘ともてはやす、名も時姫の時にあふ、鎌倉山をあとになし、都路さして嫁入りの、道は東
路戀路はよそへ、それではづして徒路の野もせ、數限りなき傳の、中を隠れ路近江路を、心のあ
てど共々に、お側去らずの住の江が、助けまるらせ玉鉾の、道ならぬとや四方山の、噂に濡れん小
夜衣、裾吹き拂ふ春風に、露ふみわけて辿りゆく、村々つゞき果しなく、物思ふ身は若草や、紫
雲英土筆も目に添はで、葉越の瀧の木靈さへ、我を追ふかと怪まれ、木の間隠れに立忍ぶ、そなた
の方より一群の、往來の中に聲高く、鹽の安賣山ばかり、噂都の伊達姿、商ふ鹽に數々あり、日月
晝夜満干の潮、どうと寄せ來る浦浪は、須磨の上鹽鹽なれ衣、松風村雨一荷にして、行平これをな
め給ふ。阿胡に名高き鹽の色、雪より白いを此の如く、富士の山もり安いが一徳、おし合ひ幹
合ひ、隣のお玉や向のお鈴が、こほれかゝつて我等が袖を、じつと捉へて鹽の目の、戀路は柵に
はかりなき。「サア召せ〜」と口上に、數多の往來輿に入り、笑ひを殘し行過ぐる。被衣あらは

に姫住の江、義村様かと見合す顔、素知らぬふりに行く袂、二人はやがて右左、縋り止めて、「コ
レ申し、さ程無情い御心と、知らぬ私が憂き思ひ、都の方へ嫁入りも、父御の仰是非なくも、其
場を紛れ落人と、かく成りゆくを可愛と、少しは思ひ給はれ」と、口説き給へば住の江も、「ほん
に私がいろ〜と、口説き落した其上で、お姫様への媒人を、あとで思へば味な氣に」縋ると絲
や青柳の、亂れて今は啣ぐさ、花と櫻の二思ひ、色香をわけて苦杖、手を取り〜や虎杖の、
離れがたなき蔦若葉、縋り口説けど大丈夫の、心は空に春の風、吹わけらる袖袂、放ちはせじ
と篠原を、あなたこなたと附纏ひ、亂ると裳裾紅の、入日の波と見え隠れ、木の間の櫻ばらば
らばら、春のもなかの雪おろし、花ふみわけて 三重。

第五

近江野や鏡の山へ影遠き、高宮の村外れ、辿りて爰に時姫君、住の江諸共憂き旅に、うき戀人を
見失ひ、其所よ此所よと立やすらひ、時姫「コレなう住の江、そなたの世話でやう〜と廻り逢
うた戀人に、ふり捨てられし我身の上、推量して給もい」と、涙先立つ嘆言、住の江「チ、御道理
御道理、物堅い義村様でも木竹であるまいし、此方の心が達いたら、何ほ無情男でも、情心が出

來そなもの、何にもせよ此邊を尋ねるにしくはなし。御氣遣なされな」と力を附る其折柄、後の方より同勢引連れ、北條の家來關口平太、姫を尋ねるうろく、眼、かくと見附け走り寄り、平太「時姫君にて候な、御行方知れざる故、方々と尋ね御迎に参つたり。住の江殿にも御供有り、いざ御出」と申せども、時姫「イヤ、鎌倉へ何面目に歸るべし」と呑み給へば關口平太、平太「片岡殿の思慮有つて悪しくは計らひ申さぬ由、是非御供」と住の江も、俱に引立つ大勢が東路さして急ぎゆく。雨の山坂花見りやすべる、花に思ひがよいと息杖しやんとせ。「ヤイ仁作狼狽たか、此の酒屋に駕籠立てて親方にもお茶上げい、憩む所で憩みもせず、コリヤ奈落の底まで昇き込むかい、性根を付けい」と悪談に先肩もひやうまづき、駕籠昇「ナアニ馬鹿つくすやら、儂と合棒するが最後、定付の立場でも氣に入らねばすつとこな。酒屋さへ見りや何度でも休みたさうな面付」「それといふも呑たいから、どうで儂は聞及んだ、八つ目の大蛇の再來か、すつてんどうの眷屬か、いけちない酒好」と競合ひく、ヤットコ駕籠卸せば、「サア、お呑み」と亭主が詞に、駕籠の垂上げて牀机へ歩み寄る十河額の東武士、悠々と押直り、侍「ナニ跡肩の者はへ参れ、最前汝に云付けたは、急用のある身共なれば、立場をぬいてはつ付けよと云うた通りに精が出た、極めの外に褒美をくれる、聞けば儂酒好きとやら、亭主ソレ、彼めに酒を飲ませよ」と

降つて湧いたる幸は得手の好物、嫣然と笑を含んで駕籠の錢戴き、両手をつき、駕籠昇「エ、適れなお侍様、極めの外の褒美には五十三増しの錢下さる所を酒と出たは、又違つた物ぢや。大將々々、何と仁作よ、是見たか」と、云ふを打消し相棒仁作、駕籠昇「申し旦那、結構な御意なれど、ア同じ事なら餅がよい。酒に優つた餅の徳、年の初の鏡餅、重ねて神の二柱、或は茶粥の柱とも腹の減ること遅いなり。第一、駕籠昇に酒吞ますは、嬢に地黄を吞ますと同然、何處ぞの程では乗手の身に怪我の出来るは知れた事、酒をとんと止めにして、餅になされませぬかい、餅になさるが上分別」と、下戸と上戸の得手勝手、咽喉は鎌倉街道の食争ひと見えにけり。侍は苦笑ひ侍「ホ、チ其方にも望次第何なりと仕度致せ」駕籠昇「ソリヤ有がたい御意が出た。シタガ、ハア悲しや、此の店には酒計りで餅はなし」亭主「ヤット力を落すまい。堤の餅屋も此方の出店、後肩殿はあの壺から、お指圖次第に飲んだがよい。サア、ござれ」と亭主が案内に相棒は、おのれ存分食ふべしと、旦那へ目禮、機嫌取、けんこ取をと急ぎ行く。後肩は立上り、勝手知つたる器の酒、有合ふ枴を盃に杓からうど注ぎ移し、駕籠昇「然らば旦那たべまする」侍「コリヤ見事ぢや、枴で呑むか、何ぞ肴をくれたいなア」駕籠昇「ア、いえ、御肴は持つて居ります、先づ一口」と隅呑に、がぶくくと一息つき、腰の胴亂引明けて取出す唐辛、駕籠昇「コ

レ旦那、御覽じませ、肴はこれでよう御座ります」侍ア、何とやら、ヲ、それよ、榎木も紅葉しにけり唐からし」「此紅葉をお肴」と一口食うてぐつと乾し、駕籠昇「エ、心地よい、コリヤたまらぬわい。申し旦那、ちと御願が御座ります」侍ム、願とは何事ぞ」駕籠昇「ハイ、いやモ外の事でも御座りませぬ、もう一つ是でたべませうかと申す事ござります」侍「ハ、くくくム、何其の上をまだ飲むか、ハテ扱きびしい上戸だな、何程なりと勝手にせよ」駕籠昇「コリヤ有がたい」と立上り、手酌のはかり思ふ儘、てうど注いで、駕籠昇「へ、又たべます、今度は一息に」と櫛引かへ、鱗が、瀧の流を呑む如く、侍も呆れ顔、駕籠昇「エ、忝い命、まだこれからが酒なれど、如何にしても無作法千萬、マア此の邊で入りませう。ハア扱と。ヤ慮外は御免。ちとろく」とやりませう」と芝にころりと邯鄲の枕いらすに早や昇、仙人界も斯くやらん。時刻移れば侍は立上つて身拵、用意の内に都路を、東の方へ急ぎの武士、顔見合せて、侍「貴殿は八藤軍治殿」軍治「コレハ、曾平殿」と時の挨拶、雙方が互に禮儀事終り、八藤軍治聲潜め、軍治「貴殿の御主人大江入道殿兼ねて鎌倉時政公へ御内通の忠臣、京家にては出頭の入道殿、鎌倉へ内通とは神も知らぬ謀事、相互に三日目に逐一の御文通、定めて貴殿も此方の主人への御使ならん」曾平「如何にも、仰の通り、主人大江油断なく京城内の爲體、萬事具さに申上ぐる、

この頃京都頼家公には、諸國の武士を狩集め、密々の評議あり、その儀についての御使、幸ひに途中の對面、雙方の狀を取換へ、一刻も早く歸國せん」軍治「ホ、尤も」と兩人が、互に密書の箱取かへ、懐中して立上り、鬼山曾平あたりを見廻し、曾平「イヤこれさ軍治殿、兩人の外人なしと、一大事の物語、見ればあれに臥したる下郎、何者やらん」と尋ねれば、軍治「ホ、御不審は尤も、彼めは拙者を當所迄、昇て參つた駕籠の者、食ひどれてあの通り、イヤもうたはいもない下司下郎、氣遣あるな」と聞きもあへず、曾平「成程熱酔の體なれど、下郎ながら彼めが人相、遅しい生れ付、茅にも心置く時節、事漏れては一大事、拙者よろしく計らはん、コレか」とハッ藤に、嘔けば打うなづき、寢入りし下郎が側へ寄り、耳近く聲張上げ、「ヤイ、コリヤ駕籠の者、用事がある目を覺ませ」と呼はる聲、ウンと寢覺の酔機嫌、駕籠昇「エツツツム、何方かと存じたら最前のお侍様、エツフウム、まだこれや呑めと云ふ事ぢやな。イヤモまつさら一人は呑めませぬ、ちよつとお間を頼みましょかい。サアおさしなされませ」と、寢ても覺めても酒の事、鬼山はつと寄り、曾平「イヤコリヤ下郎め、儂が名は何といふ。何所の村に住居致す」駕籠昇「ハイ、ハテ變つた事のお尋ね。我等住居は何所とも定らず、此街道でこんもりと、よう茂つた森のぶんは、慮外ながら拙者が寢所、又名がお聞なされたくば、本名は雲助、又かへ名が呑助。呑む事は

二斗三斗、まだ其上もたべますによつて、この頃は名がかはり、四斗兵衛くゝと何所でも申し
ますて、又ほんに酒に於ては、適れの手柄者、どなたでも叶ふまい」と半分言ひさしとろく寝入
軍治立寄り、軍治「ヤイくゝくゝ、目を覺さぬか」と引起せば、駕籠昇「チツト合點ぢやくゝくゝ。フ
ウム、くゝ何と仰やる、我等に着を致せか、イヤもう私大無器用者、駕籠昇く事と酒呑むよ
り、外は何にも存せぬぢや。シタガ何ぞやりたいが、ホンニ此間子供らが、街道筋でうたふ歌、
覺えてゐるが、ヤてんほの皮、やつてのきよかい。おまん股ぐらへ太々神樂が飛込んだ、またす
ずふつて跳込んだ。ハ、ハ、ハ、ハ」と餘念なさ。鬼山いらつて 軍治「ヤイこりや下郎め、謔言云は
ずときつと聞け、格別に其方に頼みなき仔細あり」と、聞いて四斗兵衛起き直り、駕籠昇「私にお
前方が頼みたい仔細とは」 軍治「チ、サ、其方が命がほしい」 駕籠昇「エイ」 軍治「イヤサ、其方が身
體をくれい」 駕籠昇「エイ」 軍治「チ、サ、驚きは尤もくゝ、只今此御方と、主人の密事を談じ合ひ、話し
終つて後を見れば、酔臥したる體なれど、兩人が不覺の第一、たとへ密事は聞かずとも、此儘に
捨置いては、我々が後日の過り、是非がないと諦め命をくれよ」と聞く中に、四斗兵衛は猶吃驚、
四斗兵衛「様子聞く程膽がつぶれ、興も酒も醒め果てました。成程左様に仰やるからは、定めて譯
がござらうけれど、何にも聞いた覺もなし、又私には嫌もあり、忤もあり、今年八十三になる母

じや人もござります。なんほ雲助致しても、大切なこの命、御免なされて下され」と哀れをつ
ぐる空とほけ、詫びるより外詞なし。軍治怒つて 軍治「ヤアどこへくゝ、最前住所を尋ねし時、所
所の森に寝ると云つた、スリヤコレ儂は知れた宿なし。絶體絶命覺悟せよ」と、刀ひらりと抜放
せば、わつと飛退き、四斗兵衛「イヤそれから仰やります。私が申す事も、マア聞きわけて下さり
ませ。最前家がないと言つたは、酒の上の放題、きつと家もござります。ア思へばくゝこの様
な、無法な事に出合ふのも、悪い星があつたのか。何にもせよ此身の因果、さつぱりと諦めて、
命は上げます、が只今も申す通り、今年八十三になる忤や、六つになる躰にも暇乞、ちよつと歸
して下さりませ」と、逃出すうしろ遁さじと、肩先かけて一刀、切つたか飛んだか古井戸へ、眞
倒に落込んだり。鬼山すかさず手頃の木端、古井戸へ打込みくゝ熟と見、曾平「モウかく仕つ
たら氣遣なし、思の外脆い奴、御互に安心」と、八藤も刀を鞘に收め、軍治「存じも寄らぬ下郎に
かより、思はずも時刻延引、これよりは夜道をかけ、國元へ急がん」と猶も何かを談じ合ひ、互に
禮儀兩人は、京と東へ別れ行く。始終の様子最前より、木蔭に窺ふ鹽賣長藏、さし足して歩寄
り、井戸へ落ちたる下郎こそ、只者ならず訝しく、試みせんと豫てより、仕込むおうこに穂長の
鎧、井戸に立寄りさか落し、ぐつとつと込む手練の手答、透さず抜取る鎧の穂先、ほつくと折れ

しはさてこそと、躊躇ふうちに井戸よりも、ぬつと出でたる件の駕籠舁、上るや否や發矢と打つ、穂先の手裏劍長藏は、眞俯けに倒れ伏す。四斗兵衛は見向もせず、何か心に打領き、のさりのさりと懐手、村道さして行過ぐる。跡に長藏空死の、鎧の穂先は手に受止め、むつくと起きて身繕ひ、早暮渡る空の色、曲者が行く道筋を、遙に見やり見定めて、後を慕うて三重追うて行く。

第六

所の名さへ醒が井と、いへど朝夕醉臥して、酒手に諸色諸道具まで、酒屋へかき出す駕籠舁あり、名は四斗兵衛が内一ぱい、ふんぞり返る高枕。側に女房が賃仕事、小遣だけを紡出す、ぶんぶ車も世渡りも、廻りかねてぞ見えにける。四斗兵衛は大欠身中さすつて起き上り、四斗兵衛「エ、耳のはたでぶうくく」と、あつたら夢をさましくさつた。目覺しに一杯せう、一走り行て買うて来い」と、奈良漬臭い嘔氣しながら、まだ呑みたがるいけちな上戸、女房仕事の手を停め、女房「チ、たつたいませその徳利を呑乾して又かいな。買ひに行こにも、もう値がござんせぬ」四斗兵衛「錢が無か儂がわんほうぶち殺して買うて来い」と、無理邪も男の權柄。女房「サアわしが單衣は惜まねど、その様に飲ましやんしては、身のためになるまい、ちつと嗜んだがよいわ

いな」四斗兵衛「又男の咽喉締爲をるがな、おのれ食は食はいでも、酒が呑まずに居られるものか。小言いはすと買うてうせう。行かぬかい。コリヤ頼む、何卒一杯呑ましておくれ」と猫撫聲も呑みたさの、餘りの事に女房は、呆れて詞なかりけり。折から表をひよかくと、通り過ぐるやつこらさ。四斗兵衛見るより飛で出で、四斗兵衛「申し、可内殿權平殿、申し」と呼びかけられて立戻り、奴「今呼かけたは御身か」四斗兵衛「ハイ私で御座ります」奴「私だといふそ様は誰だ」四斗兵衛「誰ぢやとは外々しい、扱々先日はいかい御馳走に預つて忝うござります。マア、お入りなされませ」と、いはれて合點の行かぬ奴、無理に伴ひ内に入り、四斗兵衛「それから一寸お禮に參らうと存じたれど、貧乏暇なしで、お禮さへ延引。女房ども彼方へようお禮申してくれ、この中あなたで結構な御料理を振舞はれ、その上結構な御酒を強ひられ、それは、近年の御馳走。お禮申せ」と減多無上に悦べど、根から覺えのない奴、奴「イヤこれさ、そりや何の事だ、俺はお手前にも振舞うた覺はないぞ」四斗兵衛「ハテ扱覺の悪い、あれ程振舞うて置いて、エ、こりや、その振舞返してもせうかと御辭儀ぢやな。イヤモ御覽じます體なれば、振舞返へしとはえ致さぬが、御酒は一つ上げませうかい。又此方の嗅が悪い癖で、人様に振舞はれて居るがきつい嫌ひ、嗅が心休めぢや一つ上つて下さりませ。嗅ひと走り酒買うておぢやらぬか」

といはれて否とも客の手前、不承々に女房は、徳利下けて出て行く。奴はなほも不思議な面付、奴「俺に酒香ますとは如何やら嬉しい事だんべいが、振舞つたなどは白癩覺のない事共、コリヤ酒の奸佞だないかよ」四斗兵衛「エ、うまい和郎ぢやわいの、何の有様に酒一杯振舞はれた事はなけれど、あんまり鼻めが香まさぬ故、斯ういふ手段を廻らしたは、彼奴に酒買ひにやらうばつかり」奴「ハア、それでよめた、こりや己を餅のかたではない酒のかたにしたのだな。それ程に呑みたがるお手前も呑助だな」四斗兵衛「呑助の段か名さへ四斗兵衛」奴「何だ四斗兵衛、えらい名だな」四斗兵衛「これも初は一斗兵衛で有つたれど、段々呑上るに付き二斗兵衛と立身し、三斗兵衛と出世し、追付菰かぶりまで呑上るといふ心で、今の名は四斗兵衛、何とえらい呑助であらうがの」奴「こりやきつい、一斗兵衛から四斗兵衛までの立身、その位では今の間に、五斗兵衛と名を萬天に上るであるべい、エあやかり者め」と話のうち、徳利ぶらく女房のおまき、四斗兵衛「イヤ待兼山の不如歸、鳴く音は本尊缺徳利。マア客人から」と差出せば、女房「酒はあつても肴があるまい。奴様の御馳走に、湯奴なりとして上げう」とおまきは勝手へ入りにけり。奴「湯奴とは忝い。出来るまで一杯しやうかい」奴「エ、この和郎も近渴」四斗兵衛「そんならそれからお初めなされ」奴「エ忝い」と茶碗引受けどぶくく、一口二口目を綴め、奴「エ、酒ぢや

ない、こりや水だ」「何ぢや水ぢや」と茶碗にうつし、四斗兵衛「ほんに水ぢや、コリヤ男をやり仕事にかけをつたな」女房「何と一つ上つたか、この手でさいくこちの人に、騙られた振舞がへしの御馳走、奴様よう上つて下さんした」と、云はれて月夜に鎌鼬奴、奴「テモ酷い目にあはしたな、コリヤ湯奴ぢやない水奴だ、エ、あた歩の悪い」と、呟き立歸る。引違うて来る男、平樽片手に肴籠、男「申し一寸物が尋ねたう御座ります、何所ぞ此所らにさかひやの三右衛門様といふのはござりませぬか」と聞いて女房が 女房「イエく、爰らにそんなお人は御座んせぬ」男「ハア何所やら此邊ぢやと聞いたが、そんなら外を尋ねて見ませう」と、行く酒樽に目の付く四斗兵衛、四斗兵衛「コレく待たしやれ、こなた其の樽肴何所へ持つて行くのぢや」男「サア今尋ねる堺屋の三右衛門様へ」四斗兵衛「アノその酒をやるのか、よし、コレその堺屋の三右衛門といふは爰ぢやわいの」男「エそんなら内方でござりまするか」四斗兵衛「爰ともく、即ち三右衛門といふは己ぢや」男「これははしたり、左様ならあなたが躰様でござりまするか、媒人蠟燭屋善兵衛申します、追付嫁御様お越しでござります、これは少分ながら躰様へ嫁御のお土産でござります」と、樽と肴を差出せば女房吃驚、女房「コレく粗相なそんな事はこつちに覺は」四斗兵衛「シイく、エ、すりや、こりや嫁御の持參か、コレハく御丁寧な、女夫の中に氣を張らいでもよい事を、祝

言の盃さつぷきは後程、先づ手附に一杯致さう」と取出とりだす茶碗、女房「コレ滅相な、其酒呑んで嫁御とやらが爰へ見えたら如何せうと思つて」四斗兵衛「ハテ如何せうの斯うせうのと、高が女房に持ちやえいぢやないか」女房「アノわしといふ女房のある上に」四斗兵衛「チ、酒さへ持つてくりや幾人でも女房にする、酒戻はせぬものぢや」と、茶碗ちやわんについてぐつと一飲、女房「アレ、嫁御がもう爰へ」といふ間、表に風薫る二八の花の振の袖、町屋にあらぬぶつ裂き羽織、大小の拵こしらへもりかたを好む立派の侍、誰たぞ案内頼みたし」と音なふ聲に、おまきがむつと女房「門達の嫁御様、あたよう御出なされた」と咥つひやく女房、四斗兵衛は酒が仲人の俄聲、これへくくに打通る。竝なみ々ならぬ其の勿體。女房「ヤアお前は兄様」造酒正「コレ、私の縁は縁、今日これへ参つたは、四斗兵衛殿へ折入つて頼みたき仔細有つて、嫁と名付けし此の御方は、鎌倉の大將北條家の御息女、頼家公へ縁邊を取結びし所、御若氣とて三浦之助にわりなき戀路、京鎌倉和睦と思ひし事、却つて破れの端となり、時姫の首討つて渡せと京都よりの難題、時政公も不義の娘、親子の縁切つたりと鎌倉へも入れられず、御身一つの御難儀は、此片岡が一心に迫り、様々思慮を廻らせど、何を云うても火急の沙汰先づ御姿を隠し置き、其の上事を圖らん爲、魂を見届けて御預け申す四斗兵衛殿、くれぐれ頼み存する」と餘儀なき體におまきが悦び女房「親兄の許しもない

に我が儘な男選み、憎い奴不義者と、御手討に逢ふとても無理とは思はぬ身の淫奔、悔みは千萬返らぬ昔、其の御叱りもなう親身の御頼み、御氣遣遊ばすなと申したけれど、氣の毒は、酒故心轉々する夫の氣質」四斗兵衛「コリヤやい、二言めには酒々と男を打込むさいまぐれめ、魂を見込んでとあるからは、如何にも四斗兵衛が命にかけて御匿ひ申ませう」女房「イヤ合點が行かぬ、其の氣ならよけれども、酒呑ましやんと忽ち變るお前の心」四斗兵衛「ハテお匿ひ申すうちは何年でも禁酒々々」造酒正「ハテ匿ひおほせたらその時褒美に四斗樽四五挺」四斗兵衛「マア夫迄はかざも嗅がぬ氣」女房「チ、出かさしやんしたく、お前さへその心なら、アイ兄様、何時までなりとお匿まひ申ませう。其のかはりに夫の身の上、よろしう頼み上げます」と夫婦が詞に片岡悦び造酒正「妹が縁につれ姫を匿まひくれられうとは、町人ながら頼もしき心底、首尾よく致さば妹諸共鎌倉へ同道致し、拔群の知行取る侍に取持いたさん」女房「そんならアノこちの人を侍にして下さんすか。コレ悦ばしやんせ、知行取にするといな」四斗兵衛「おつとよしく、知行取になつたらかよ、酒買ひに行くも乗物に乗せてやるぞ」女房「アレまだそんな事ばかり、夫の出世もお姫様、よう御出遊ばして下さりました」と追従も夫思ひと知られたり。時姫も顔を上げ、「不思議の縁で夫婦の衆、世話になる身は陽炎の、あるかなきかの憂き命、よきにとばかり」と云

ひさし、顔さし入るゝ懐の、内や涙の淵ならん。片岡座を立ち夫婦に向ひ、造酒正「兩人に預くる事此上の安堵なし、必ず人に氣取られぬ様、随分心を附けられよ」四斗兵衛「イヤモこの四斗兵衛が預るからはゆつくりと、通し駕籠に乗つた様に思つてござりませ」造酒正「是はくゝ忝い、事によらば引かへしてお迎に」四斗兵衛「ハテ御念に及ばぬ御勝手次第」造酒正「然らば御暇おさらば」と娘にも禮儀片岡は、元來し道へ立歸る。あとに夫婦が氣もいそぐ、コリヤ鼻よ、きつう競口がよくなつて来たわい。コリヤまあちつと御酒でも上げぬかい」女房「アノたつた今、禁酒ぢやというてもうかいの」四斗兵衛「ほんにな、その禁酒をとんと忘れた程にの、ハ、ハ、ハ。したが呑みつけた酒飲まずに居たら、氣が盡きてたまるまい、イヤ己が氣の盡よりお姫様が、ア嘸御退屈にござりましよ、ソレ御慰に酒の糟なと買つて来て進せぬかい」女房「ヲ、嗜ましやんせ、何のあなたへそんな物、御不自由も暫の中、臆てあなたの思召、戀人様に逢坂山の實葛、人に尋ねてつひお出でござりましよ」と、諫め申せば時姫も「時姫」よしなき戀に絡まれて、我身ばかりの片岡に、苦勞かけるも自ら故、夫婦の手前恥かし」と、顔は照り葉におく露の、袖にひたせる有様に、おまきも詞涙ぐみ、暫し應答もなかりけり。折から来る鹽賣が、上下ため付け酒樽を、肩にぶら／＼足音の、中に若しやとおまきが氣轉、「誰が見咎めても大事の御身、見苦しけれど奥の間へ」と女房

に誘はれ、靜々立つて入り給ふ。表に鹽屋が頓きよ聲、鹽屋長藏「駕籠昇の四斗兵衛殿とは爰でござんすか」とすつとはいつて顔と顔、長藏「ヲ、こゝな様が四斗兵衛殿かい、つひに逢うた事も、又近付でも、内儀様は留守でござんすか」四斗兵衛「ア、鼻は内に居ますが、貴様マアどつからござつた」長藏「イヤおれや鹽賣の長藏といふ者でござんすが、ア、鹽商賣も身の廻りに張込んであふこつちやござんせぬわいの。それで元のいらぬ駕籠昇がしたさに、弟子になりに来やんした。マア近付のため少分ながら此一樽、寢酒に飲んで下され」と、酒樽なほせばにつこりと笑ひ顔、四斗兵衛「ハ、ハ、ハ、こりや忝い、酒さへ貰へばどつからでもようござつた。したが駕籠昇の弟子に上下とは、ア、裸で茶の湯に行く裏ぢやの。そして、こりやきつい氣の張りやうぢやが、是もまた水ぢやないかや」長藏「ハテそんなぢやない、小ながら酒や八文酒、飲みつけた口には、ちつと重うて呑みにくからう、並酒でもないこりや鎌倉山」四斗兵衛「ヤ何と」長藏「サア鎌倉山といふ大切な銘酒ぢや程に、へ、味はうて呑んでもらひましょかい」四斗兵衛「ム、ムン呑ましょよ、如何にしても云ひ様が面白い。又この四斗兵衛が呑むからは、鎌倉山でござらうが、富士の山でござらうが、たとへ日本國でも、コレ此茶碗に引受けて、いでと思はどぐつと一飲み。マア試に一杯致そ」と、樽の口からどぶ／＼／＼「お辭儀なしに下される」と引受け／＼續け飲み。「こりや見